

# 関西大学ピア・コミュニティ 平成 26 年度報告書

関西大学

# 関西大学ピア・コミュニティ 平成 26 年度報告書

関西大学



## 「平成 26 年度報告書の発刊にあたって」

関西大学学生センター所長

黒田 勇

学生支援プログラム「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ」は、平成 19 年度学生支援 G P 採択を機にスタートし、平成 26 年度は、昨年度の状況を踏まえつつ、今後も継続的・発展的に活動していくために必要となる支援やシステムについて検討を重ね、様々な取り組みを実施してまいりました。

まず、ピア・サポートを実践するために必要な知識と意識、そしてプロセスを学ぶための正課教育科目「関西大学ピア・コミュニティ入門」について、平成 25 年度は全 15 回の授業のうちはじめの 3 回を 3 クラス合同で実施し、その後の 12 回を 3 名の担当教員が 4 回ずつ順に担当するという形で行いました。平成 26 年度においては 1 名の担当教員が 15 回を通して授業を実施し、ピアとは何かということを共通内容として盛り込みつつも、各担当教員の専門性がより発揮される形としました。

次に、関西大学においてピア・サポート活動に継続的・発展的に取り組んでいくため、学生自身によるピア・サポート活動の継承を促進する仕組みのひとつとして、シニア・サポートを新設いたしました。シニア・サポートは、ピア・サポート活動に関するアドバンストなスキル・知識等をもつピア・サポートのいわば「斜め上」の存在であり、所属するコミュニティでのピア・サポート活動、および学生によるピア・コミュニティの継承に携わる存在として、今後の活躍が期待されます。

さらに、ピア・サポートを対象に、「ピア・サポート活動に係るアンケート」を実施し、自らについて振り返る機会を提供し気付きを促すとともに、その気付きを集約しピア・サポート活動を行うことの効果について検証しました。

現在、8 つのピア・コミュニティが、それぞれの活動領域（専門分野）に応じて様々なピア・サポート活動を実践し、関西大学の学生をサポートしていますが、これもひとえに学内外各方面からの多大なるご協力をいただいたおかげであり、ご指導ご鞭撻を賜りました皆様に、厚くお礼申し上げます。

今後もピア・コミュニティに対して、教職員・学生支援室 T A による重層的な支援を行い、さらに、「学生が求める学生支援を、学生自らが実践する」本学独自の学生支援体制の確立に向けて取り組んでまいりますので、本取り組みに対する皆様のご理解、ご協力を賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。



# プログラム概要

## プログラム概要

### ○取組紹介

本学生支援プログラムは、関西大学の学生が豊かな人間力（21世紀型関西大学学生気質）を備えることにより、本学独自の知徳体を融合する学生文化（学生が主体性をもって構築するキャンパス環境）を育み、卒業後に21世紀の知識基盤社会を支える人材として活躍するために必要な「社会人基礎力」を修得することを目的とする。平成20年度から実施された「全学共通教育改革」と連動して、ピア・サポート養成に関する正課及び正課外教育システムを構築し、その教育成果として意識改革を果たした学生たちが、自ら考え方行動（考動力）できる体制を確立させた「ピア・コミュニティ」の創設を目指す取り組みである。

### ○事業組織

事業推進責任者	:	黒田 勇 学生センター所長（社会学部・教授）
事業推進者	:	赤尾勝己 学生センター副所長（文学部・教授）
事業推進者	:	田中俊也 正課教育コーディネーター（文学部・教授）
事務担当者	:	中塚義史（学生サービス事務局長）
事務担当者	:	綱木 寛（学生サービス事務局次長）
事務担当者	:	堀 律子（ボランティア活動支援グループ長）

### ○各種会議

本補助事業の実施運営にあたり、「学生支援連絡協議会」、「学生支援運営会議」、「ピア担当者会議」といった3つの会議を開催している。

#### ■学生支援連絡協議会

本プログラムを実施運営するにあたっての意思決定機関。

#### ■学生支援運営会議

本プログラムの具体的活動内容等を協議、実行するための機関。

#### ■ピア担当者会議

ピア・コミュニティの主旨や活動内容において、各学生支援部署との相互理解、情報共有を図り、ピア・コミュニティの創出を実現するための機関。

#### 【平成26年度】

日 程	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
学生支援連絡協議会	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	2
学生支援運営会議	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ピア担当者会議	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	3



## 目 次

1 正課教育の報告	
1.1 さまざまな組織をつなぐピア・サポートの仕組み	1
1.2 平成 26 年度正課教育科目について	3
2 ピア・コミュニティの活動報告	
2.1 ピア・コミュニティ活動のあゆみ	17
2.2 ピア・コミュニティの活動	20
2.2.1 ピア・コミュニティ運営本部	20
2.2.2 国際コミュニティ “KUブリッジ”	31
2.2.3 ピア・スポーツコミュニティ (PSC)	44
2.2.4 KUサポートプランナー (KUSP)	45
2.2.5 KUコアラ	55
2.2.6 KUサポートアーズ	63
2.2.7 ぴあかんず	74
2.2.8 関西大学ITピア・コミュニティ “i.com”	75
2.3 ピア・サポートからのメッセージ	81
2.4 支援部署職員からのメッセージ	86
3 ピア・サポータの育成	
3.1 ピア・サポータの育成	91
3.2 関西大学ピア・サポート研修	93
3.3 スキルアップ講座	96
3.4 効果測定	98
4 学生支援室の活動報告	
4.1 学生支援室の役割と主な活動	103
4.2 新規TA研修	104
4.3 学生支援室TAからのメッセージ	106



# 1 正課教育の報告

## 1.1 さまざまな組織をつなぐピア・サポートの仕組み

正課教育コーディネーター

田中俊也（文学部教授・教育開発支援センター長）

平成19年度の学生支援GP採択（文部科学省）以来、関西大学では、「学生総ピア・サポート体制の構築を！」というスローガンのもとに、学生自身の持つ、他の仲間の学生（ピア）をサポートする潜在的な力を如何なく發揮できるような雰囲気・組織づくりをしてきました。こうした雰囲気や組織は、本来はボランティアの形で自然発生的に生まれてくることが期待されるのですが、多種多様な学生を擁している関西大学のような大規模大学では、こうした自然発生的萌芽は期待することが難しく、本取り組みでは、まず、正課授業という形で「ピア・サポート」自体の本質をしっかりと考えていくことからスタートしました。これが取り組みのスタート段階での「関西大学におけるピア・サポートを考える」という授業でした。

当初は、「学生総ピア・サポート」体制構築のために、単に教学だけではなく法人の第一人者をも巻き込んでの、文字通りオール関大、の体制の授業をも組みました。現在の理事長や本部長等が今より少しお若いころにその部局の代表として学生に「講義」をしていました。こうした授業に加えて、大学院生を中心としたRAやTAを中心となり、ピア・サポートの養成、ピア・コミュニティの創設も相次いで行われ、現在、8つのピア・コミュニティが活発な活動をし、「総サポート」体制つくりの牽引役を担ってくれています。

それぞれのコミュニティは、関連する部局（国際部、図書館、学生生活支援グループ、スポーツ振興グループ、ITセンター、ボランティアセンターなど）と密接なつながりがあり、この活動は、従来の部局単位の縦割り的な動き方では完結しないものです。この、ピア・コミュニティの活動は、こうした学生の他者支援の力や他者に対する教育力の活用の方途について関西大学総体として再考する、絶好の契機をもたらしてくれました。

本取り組みは、文科省からの財政的援助が終了したのちも、教学・法人両者の慧眼のおかげで、その必要性が評価され、関西大学独自の取り組みとして継続されてきました。現在では多くの同程度の規模の大学でもこうしたピア・サポートの概念が浸透しています。

正課授業としては、平成23・24年度からはさらに「関西大学ピア・コミュニティ演習」という演習の授業も設定され、「入門」と「演習」で密度の濃い授業が展開されてきました。さらに25年度からは「関西大学ピア・コミュニティ入門」という、演習を中心とする科目に発展させ、受講生のコミュニケーション力・表現力のブラッシュアップに力点がおかれ授業になっています。

本年度はこうした活動に加え、この活動を学生自身の手で継承・発展させるべく、学生のなかにシニアなサポートを養成する取り組みも始めました。こうして関西大学の新しい文化が力強く根付いていく仕組みがうまく働き継承されていくことを心から願っています。

以下、それぞれの担当者の先生方、事務スタッフ、院生等から詳細な授業紹介、ピア・コミュニティの活動などを紹介し、本年度の活動報告といたします。

最後になりますが、本取り組みを支援いただいている全学共通教育推進委員会、学長・法人関連部局の皆様に深甚の謝意を申し上げます。

## 1.2 平成 26 年度正課教育科目について

### 平成 26 年度正課教育科目の授業内容について（科目担当者：三浦真琴）

前年度までのリレー方式とは異なり、今年度は当該科目担当教師全員がそれぞれ春学期の授業を全 15 回実施した。昨年度までは教師一人当たり 4 回の授業担当であったが、今年度はその 4 倍ほどに授業内容が増えたため、新たな授業の準備やその省察・整理に追われるセメスターであった。15 回すべての授業について内容や方法を報告するほどの紙幅が許されていないので、本章では主たるテーマあるいは方法ないしは概要を説明する。

本科目では学内外を問わず支援を必要としている人たちと、どのように関係を取り結び、相手が必要としているサポートをいかにして提供するか、それを真摯に考えた上で実際に行動に移す際に何に留意しなければならないか、そのようなことを総合的に判断し、実践する力を身につけることを目的としている。実践のステージは大学内に限らないし、サポートする自分ならびに相手を学生に限定することはしない。かかるサポートの必要性について学生は頭では理解しているが（知識は有しているが）、実際の行動に結びつけていくことに多くは困難を感じている。そこで実践に必要な考え方、姿勢、スキルなどを可能な限りわかりやすい「かたち」で提供し、試行錯誤を体験しながら（失敗することを通じて）、少しづつ行動する力を身につけていく体験をするように、授業内容や方法のデザインに工夫を施した。以下、前年度と重複する部分もあるが今年度の授業実践について報告する。

#### 1. グループワークに向けて

ピア・サポートには質の良いコミュニケーション能力が必要である。コミュニケーション能力をいくつかの要素に分類すると、大きくは発信力と受信力ならびに両者を統合する力の三つが考えられる。その力を身につけ、伸ばすためには、そのことを強く意識した日常生活を送る必要がある。かかる「意識した生活」は講義形式の授業において、断片化された知識を転移することによって実現されるものではない。その力を獲得していくプロセスを少しづつでも体験し、積み重ねていくことがハビトゥスへの階梯となる。そのように考えて、報告者が担当する授業ではグループワーク（以下、GW と略記）を主とした TBL 型の授業を展開している。これは前年度より継承されている考え方である。

第一回目の授業はグルーピングから始める。このグルーピングそのものがガイダンスの意味を有するからである。1 グループのサイズは 4 人と決めてあり、そのメンバーに学部や学年、男女、あるいは科目担当者の他の授業科目履修の有無にも偏りがないように、あらかじめ 4 名の組合せは考えておく。しかし授業時にそれを単に発表し、その組合せに基づ

いて座席を移動するというようなことはしない。学生はたった一つの法則にしたがって作成された四桁の数字（と氏名）が書かれたカードを受け取った後、そこから法則を読み取って 4 名ずつのグループを編成する作業に入る。この法則を発見するためには、クラス全員の協力が必要である。やがて必ず誰かが受講生全員に声を掛け、それぞれが持っているカードの数字を読み上げる。自発的にそれを黒板（ホワイトボード）に書き連ねていく学生も現れる。全部の数字が出そろったところで、今度は全員が法則を発見するために意見を交換する。つまり、このグルーピングはこのあとの GW の予行演習になっている。

知恵を出し合った後、受講生は正解にたどり着き、無事グループが編成される。機械的にポジションを与える場合に比べて、自分たちで「解」を発見したという達成感があるため、グループにはアイスブレイクの必要がないほどであるが、ここでは敢えて互いの名前を決して忘れない自己紹介をアイスブレイクに加えてグループの体温をさらに高める。

グループが結成され、メンバー全員の名前を誰もが漢字で書けるようになった後は、グループネームを考案させる。ネーミングの理由も書き残すように指示を与える。これはメンバーがグループへの帰属意識を持つ・高めるために必要な作業である。ちなみにその内容は次回以降毎回授業冒頭に配付する「ピアコミ通信」の記事の一つとなる。

これでグルーピングは終了するが、このまま直ちに GW が可能となるわけではない。初回の授業時には二回目以降の GW の予行演習としてシンプルな練習問題を出すようにしている。多くの受講生が GW 未体験者なので、このステップを省略することは考えがたい。シンプルな課題であっても、ひとたびグループで同じ問題について考え、答えを模索することを体験すれば、受講生はその「妙」や「不思議」に心を留めるようになる。例えば『私は犬です』を可能な限り多くの英文に翻訳しましょう」という問題を出す。ほとんどの受講生は問い合わせが “I am a dog.” しか存在しないと考えているので、この問題を GW の課題とすることに首をかしげるが、やがて誰かがコンテキスト次第で多様な答えが可能になることに気付く（そうならない場合には、さりげなくヒントを出す。もしくは LA に暗示的なサジェスチョンをしてもらう）。あるグループが 4 つの答えを発見したと報告すれば、他のグループは 5 つ以上を目指す、というようにモチベーションへの刺激にもなる。また「コンテキストを読む」という姿勢、心がけ、意識はコミュニケーションを円滑に進める上でも、ピア・サポートを実践する場合にも必要なことなので、それを先取りするかたちで受講生に「発見」させるというねらい（とねがい）がここにはある。

以上を終えた後、この回の授業で体験したことに対する意味があるのかを解題し、以後のクラスでは同じ様な、あるいはもう少し複層的で奥の深い課題が出されるが、グループメンバーが一丸となって取り組めば恐るるにたりないと伝える。例年のことながら、

たったそれだけのことを伝え、キャッチしてもらうために、LAの力・アドバイスは不可欠である。おかげで初回の授業を展開するに当たって前年度同様に困惑することはない。

## 2. きわめてシンプルな問題から着手する

GW を開始する前の練習問題として、毎回少なくとも 5 問は用意する。そのほとんどが「最適解」のない「問い合わせ」である。受講生はこれらの問題を通して、「最適解」を探すことではなく、問い合わせによっては最適解が存在しないこと、あるいは時と場所によって最適解が姿を変えることを学ぶ。立場によってものの捉え方・見え方が異なることを知るのは、コミュニケーションを益あるものにするためにも、ピア・サポートにおいてサポートが自分の考えを押しつけないように配慮する上でも不可欠のことである。

第二回目の授業ではアフォリズムなどの一部を空白にしておき、そこに入る文言をグループで考えるというワークを行う。そのいくつかを紹介する。

「人生とは [ ] を夢中に考えている時にある」(ジョン・レノン)

「いつでも愛は [ ] 」(岡本太郎)

「[ ] のは恥ではない。[ ] のが恥なのだ」

いずれも正解があるとすればそれは原作ということになるが、授業時にはその「正解」を伝えない。人によって様々な考え方、捉え方、表現の仕方があるということを知り、それを受容することが肝要であることを学んでもらうためである。アフォリズムとは何かという質問が毎回出るので、金言名言至言であると説明する前にいくつかのアフォリズムを紹介することにしている。その中にピア・サポートを実践する上で心得とするに値するものをいくつか入れておく。例えば『誰であれ、他人を確実に助けようとすれば 必ず自分自身をも助けることになるというのは、人生の中で最も美しい報酬の一つである。』(エマソン) などである。

また、人によっては自らの思いや願いを言葉に託すことができない者もいるので、その空白を想像力によって補う必要があることも伝える。このことによって、アフォリズムの空白を埋めるのは、その予行演習としての意味を持っていたことを受講生は知る。以下にこの授業回の学生の感想を数編紹介する。

- ・人それぞれに考えがあって、時々考えを押しつけていた節があったと思う。3回生になって、新入生の1回生と話す機会があったのは、新鮮な体験だったと思います。質問された時、友人と話している時、自分自身がどう考えているか、言いたいことを上手に表現できているか、今一度、考え直してみようと思いま

す。お疲れ様でした。

・「人生とは」や「愛とは」というお題のときに、それぞれの話題に対して議論しあって、改めて考え直す機会ができてよかったです。人それぞれの色んな意見があつて、面白い授業になりました。また一つの話題に対し、深く考えていきたいです。

・一見単純な文章でも、いろんな視点から見ると、いろいろな考え方があつて、とても面白かったです。GWだと自分の持っていない考え方を発見できるので、それもおもしろかったです。だいぶ自分の頭がかたくなつたと感じました。

・普段は考えないようなことをみんなで話し合つてみる。とても新鮮でした。人に何かを聞かれたとき、相談された時にはその人の言葉の背景を考えることが大切だと知りました。「いつでも愛は、どちらか一方が深く、切ない」という岡本太郎さんの言葉は、味があつて好きです。私もそんな風に上手くアドバイスできる人になりたい。

### 3. さまざまな立場に我が身を置いて想像してみる

「人の立場になって考える」、これは手垢の付いた言葉である。その意味することは深長であるのだが、惜しむらくは伝わるのが精々手垢でしかないということである。大切なのは、頭では分かっているつもりでも、それを実践に移すことはなかなかできるものではないと改めて確認することである。そのために問題をいくつか用意してある。そのうちの一つを紹介する。

『あなたはミュージシャンの卵です。まだデビューしていませんが、プロになって活躍し続けることを夢見ています。新人发掘オーディションに応募するための楽曲と歌詞ができあがりました。オーディションは半年に一度ほどの頻度で定期的に開かれています。

あなたなら次のどの行動を取りますか？

- A 行動は早いほうがよいので、一番近いオーディションにすぐに応募する。
- B 数多くの友人に音楽を聴いてもらい、その意見や感想を参考にした上で作り直す部分があれば徹底的に作り直して応募する。
- C 自分で何度も聴き直し、さらに納得のいく出来になれば応募する。』

一般的にはBが正解のように思われるが、AにはAの、CにはCの理屈があるので、最適解を一つに決めることは不可能であるということを学生に気付かせるための問題である。

上記以外に、骨太の問題を三問用意してある。いずれも受講生は真摯に取り組み、グループワークは大いに盛り上がる。以下にこの回（二回に及ぶ）の学生の感想を示す。

- ・たとえ話から隠された真意を読み取ることの難しさを実感しました。楽しい講義ではありましたが、オーディションの話は自分が将来的にどうなりたいかが最も大事だと思います。もちろん、採用してくれる企業も大事ですが、その中でも現代のアーティストは固有の特徴…を表現できていると思います。取引においても、自分が念頭に置いていることを考慮して行動すればいいと思います。浜口京子さんの例については…まだよくわかりません（笑）。お疲れ様でした。
- ・今日はオーディションの問題やウサギの問題を通して必ずしも「正解」という答えはないということを知りました。受験勉強などをしていると、どうしても「正解」にこだわってしまうけど、日常生活には、その必要のないことの方が多いのではと思いました。
- ・柔軟に物事を考えるということは大切で、いろいろな人の視点から物事を考える大切さがわかり、面白かったです。
- ・人を励ます時に、その人を傷つけないようにいろんな事を考えすぎて、当たり障りのないこととかになってしまって、そうじゃなくて、一言、的確な言葉を言ってあげられるようになりたいと思いました。
- ・相手の気持ちを考えて言葉をかけてあげるのは、すごく難しいことだと思った。だけど、かける言葉一つで空いてを元気にしてあげることができるかもしれないと思ったら、言葉って本当にすごいなと思いました。

#### 4. 学内外で主体的に活動している学生を知る

学生の中にはピア・サポートは「特別なこと」であり、ピア・サポータとして活動する（できる）のは限られた人だと誤解している向きもある。そこで学内外でピア・サポート活動をしている学生に登壇してもらい、何故そのような活動に参加しようと考えたのか、活動に参加してみてどのような発見があり、自分自身にはいかなる変化があったのかについて話してもらう。「活動に参加する前は消極的な人間だったが、ある日ある時、何かをきっかけに一步を踏み出してみたら…」というライフヒストリーは多くの受講生の胸に届く。活動の場所が国内であれ、海外であれ、サポートの内容が家を建てるという大がかりなものであれ、そうでなかれ、そこに通底するものを学生は感得したようである。

- ・私は今まで一度も家を失ったことはありません。家はあって当たり前だと思っていました。しかし今日のお話を聞いて、世界には私の想像していた以上の子どもが家のない生活を送っていることを知り、心が痛みました。家がなければ、仕事もできないし、健康な体でもいられない。私は今まで困っている人のために何かをしたいと思ったことはあっても、なかなか行動できませんでしたが、こんな厳しい生活をしている人のために、大学生の間に何かしようと思いました。
- ・ボランティアサークル マスターピースさんの話を聴いて、まず、ピア・サポートとの関連を考えていきました。サークルとしての活動で、チーム皆でミーティングをして、皆で協力して家を作ったりのグルー

プの団結が、僕たちがこの授業でしているグループ活動と似ているなと思いました。団結力って大事だと思いますし、はじめの方で言っていた、している事は小さな事だけど、皆ですれば大きくなる的な言葉はすごくいい言葉だと思ったし、それを「家」を作るという実際の形で実現しているマスターピースさんはすごいと思いました！僕たちも小さな事でも沢山積み重ねて、大きなグループ、チームになりたいと思います。

・今日は興味深い発表をありがとうございました。海外の貧困地域を支えるボランティアにも様々なものがありますが、マスターピースさんには素晴らしいポリシーがあるように感じました。それは支援後の被支援者の生活を考えておられる点です。ボランティアを行う際にあまりにも過度な介入をしきりても、その後の彼らの生活が続きません。“家”という生活の基盤を与えてあげることで、今後の生活の手助けに重点を置いておられるのは大事だと思いました。あと、友人がマスターピースに入ってから、とても楽しそうで、しっかり者になって驚いています。

・私たちはとても裕福で、不自由のない生活をしているので、家のない人の考えていることや苦労は分かりません。だから、私たちが考えている困難なこと以外にも、たくさんの困難が、家のない人にはあると思います。先生が言っていた「～してあげたい」と「～する」という壁を越えるきっかけがあればいいなと思いました。

・困っている人のために行動する。口で言うのは簡単だけど、実際に動くのは難しい。また、ただ動くだけでは自己満足に終わってしまうことが多い。でも、マスターピースの皆さんには、支援を必要としている人々のことをきちんと考えて活動しているのが分かった。私自身、困っている人のために何ができるか。何をするか。色々なことを考えさせられた3限だった。

## 5. 「交渉学」を体験する

ハーバード流交渉学は契約成立のためのスキルの集合体ではない。相手との信頼関係を如何にして築き、それを継続させるか、そのためにどのような情報が必要であるのか、現時点の相手ならびに自分における情報の過不足を的確に判断し、不足情報を入手あるいは出力するためにはどうしたらよいのか、そういうことを総合的に判断し、コミュニケーションを深め、適切な意志決定をするためのシンキング・ツールやメソッド、ケースを豊富に携えた実践的学問である。ビジネスシーンを想定したケーススタディが多いが、サポートし、サポートされるシーンにも十分に応用が利くと考え、これをマイクロインサーションすることにした。以下に学生の感想を載せる。

・企業同士の取引も、個人個人のやりとりも、根本的には同じことなんだなと思いました。相手から返事がなかったら、自分が何かしてしまったのか、相手側で何かが起きたのか、大きく分けるとどちらかなんだと思いました。

・「与えられた情報が全てではない」、当たり前だけど、忘れる事だと思う。結局は、目の前のことしか見えなくなるのが人間なのだろうか。今日の授業で最も印象に残った言葉だった。これから誰かと話すときに、この言葉を意識してみようと思う。今日のような内容を考えるときに必要なのが経験と想像力なのだろうか？

## 6. ピアコミュニケーションを知る

セメスターの中盤に至るまで学生はピア・サポートに必要な考え方や姿勢を様々な事例を題材にシンキング・ツールを用いることによって体験してきた。これを実践力へと育むためには、身近に感じられるケースに如何なる問題が隠されているか、それを解決するためにはどうしたらよいのかを考える体験が必要である。そこで学内のピアコミュニケーションからサポートに登壇してもらい、コミュニケーションの活動紹介と事例に基づくワークを実施した。

・今日はピアコミュニケーションの人たちの話を聞いて、自分たちで関大生の生活をサポートする企画を考えました。考えてみて、はじめて私達が関大で快適な生活を送っているのも、こうして企画してくれる人がいるからなんだなと思いました。

・今日は、普段、改善したらいいなと思っていることもみんなで話し合い、そこを改善するための企画を計画するのが、とても楽しかったです。自分たちの企画したもののが実現したらいいなと思いました。

・自分たちの困っていることから、それを解決するための方法等を考え、企画するというかたちの授業は初めてでした。自分たちが実際に悩んでいることだったので、案を出し合っている時は実現することを想像すると楽しかったです。逆にふつうの大学生活を送っているつもりでも、意外と困っていることが多いのだと気付きました。まだまだ自分の知らない支援を受けることができる団体等も知れたのでよかったです。

・いつも授業でやらないようなポスター作成やイベント案などができるよかったです。私は普段から図書館で勉強することはあっても、本を読むことはなかったので、この授業を通じて、もっと本を読んでみようと思いました。

## 7. 自分史を描く・知る

学士力であれ、社会人基礎力であれ、重要な基盤の構築に必要なものの一つに「自己の発見（self awareness）」がある。そのきっかけとなるように「自分史」を授業教材として採り入れ、自己を省察する機会体験と、他人も自分と同じようにそれぞれの人生において主人公として活動しているということを実感してもらった。

・今日の講義では、人生の振り返りを行ったわけだが、人それぞれにドラマがあり、人はみかけによらないんだなという事を再認識した。それと同時に、人生を見る事はおもしろいことだなと思った（不謹慎だ

けれども)。人生を他人に評価してもらうことで、励ましてもらったり、新たな視点を教えてもらえる。そういう意味ではすごく有意義であると思う。

・いろんな人の人生を知れてすごく楽しかった。有名人とかでなくても、今まで生きてきている中にたくさんのストーリーがあって、もっと知りたいと思うようになった。人に興味を持つのはこういうことからだと思った。自分自身の人生を振り返ってみても、けっこう波があって、それなりに良い人生を送っていると思った。これからも充実度は高低があるだろうけど、それを楽しめるようになりたい。

・多くの人の自分史を聞いて、話して、アドバイスしたりされたりで、とても刺激をもらいました。自分の言った事で、相手のやる気をださせたり、他人の意見をもらって、これからの事にプラス思考になりました。沢山挑戦するものを見つけて成功と笑っていられる人になりたいです。

## 8. 実験で確認する

ここに至るまでの授業で実際に体験しながら学んできたことが、自分の考え方や行動にどれだけ反映されるようになっているかを実験によって確認するのがこの授業の主たる目的である。実験のプロセスについては前年度と同じであるので省略する。わずか十数回の授業で「相手の立場になってものを考える」力や「物事を多面的に見つめる」習慣が身につくとは思わないが、最終回の一つ前の回において、「身についたはずだ」と自分が思いこんでいたことを学生は知り、省察的であることがいかに重要であるかを実感する。

・今日は見事にしてやられたなと思いました。ただ今回学んだ事は確かに大事なことで、人がどれだけ先入観に囚われているかということをさまざまと見せつけられた気がします。時々、企業説明会や何らかの会員登録の際の説明を受けることがあるが、そこでわからない単語、聞いたことがない単語が出てきたときにどうしたらいいのかと考える事があるし、特に中高時代において私は数学、理科などの理数系が大の苦手だったのだが、おそらく最大の要因が自分で勉強する際に解答を見ても答えに至るまでの過程を省略されてしまっているため、問題を理解できたためしがなかったことが、大きな原因となっていたと思います。基本的に人間は前提条件を設定したうえで話を進めていることを反省すべきだなと思います。

・単純に人に何かを伝えるということは、とても難しいことだなと思いました。伝える側があたり前すぎて無意識にぬかしている些細な情報が実は相手にとって最も重要なことだったりするのかなと思いました。今回の実験で使われた物たちは、どれもとてもシンプルな物ばかりだったのに、こんなにも伝わらないのかと驚きました。物だけではなく事柄や説明ひとつでも相手の立場に立って考えることがいかに大切かということを実感しました。

・今日の実験を見て思ったことは、相手の立場になって物事を考えることが大切なんだということです。自分が見ている世界が、相手が見ている世界と同じではないとわかったので、思い込みや、自分の考えを相手に押し付けないように心がけ、相手の気持ちや相手の今の状態などを考えて、コミュニケーションを

とっていかないとだめだと思いました。

・人へ自分の思い、考えを正しく伝える事は難しいと実感できました。今日の実験で自分は相手の事など何も分からぬのに、勝手に考えて行動伝達をしてしまうと大きくくいちがいがおこりました。今日は物による伝達だったけど、これがもし対人関係ならば大きな問題にもなりかねるなと少し怖くも感じました。まず相手の情報、可能な事を把握し、理解したうえで、伝達、コミュニケーションをすべきだと思いました。しっかりと、誤解を招いたりすることのないコミュニケーションをとれるよう、今日の実験を踏まえて行動していきたいです。

## 9. その他 いくつかの新たな工夫

いずれの授業回にもゲーム的要素を盛り込み、学生が興味を抱けるように工夫を凝らした。今年度は特にゲーミフィケーションに留意し、上述しなかつたゲーミフィケーションとしてインタビューゲーム・ハンターゲーム・ホスピタリティゲーム（報告者の命名による）を実施した。いずれも学生には好評であり、そのような機会を得ると、学生たちがアクティブになる様子を確認できたことを記しておきたい。

・先週の帰り道に先生にゲームをするという話を聴いていたので、少し楽しみにしていました。楽しかったですし、人をサポートしながら仲間を探していくというゲームで大事な事を学べた気がします。自分から声をかける事の大切さ、人の質問をしっかり聞いてこたえてあげる能力、そして僕はする事ができなかつたけど、人のサポートをしてあげる事、とても良い事を実践しました。今後活かしていきたいです。

・周りを見渡すことで他者を認識し、自分という人間との共通点、相違点をまず知ることが人間関係の構築の一環を担っている。自分という人間を知るためにには、からにとじこもって自分の内側に答えを求めるだけでは足りない。他者の存在を認め、その多様性を受け入れることで自分を受け入れることができる。

・今回のワークは積極的に相手に質問をしなければ答えが分からぬという、人見知りな自分にとってはちょっと大変なワークでしたが、楽しんですることができました。自分との共通点のある相手を探すだけでなく、誰かと誰かがチームであることに気付いて声をかけられるような人になりたいなと思いました。あと全く関係ないですが、誕生日を班のメンバーが祝ってくれたのが嬉しかったです。この班、好きです。あともう少しで終わるのがさびしいです。

・自分が何者なのか分からぬ状態で、相手に情報を聞いて解読していく過程がとても難しかったです。でも、自分が何者なのか徐々に分かってきて、仲間を探しているときに仲介者の人が教えてくれて、とても助かりました。普段の生活でも、自分がなかなか輪に入れないときに仲介者が自分の事を仲間に入れてくれたときは「助かった」と感謝する経験がだれしもあったと思います。このゲームで仲介者がいかに重要な存在であるか分かったので、自分も仲介者の役割を担いたいです。

## 2014年度春学期

### 関西大学ピア・コミュニティ入門（科目担当者：山本敏幸）

春学期は、34名の受講者があった。さらに、4名のLA、3名のTAが授業に参加し、参加者全員参加型のコミュニケーションの大切さに終始したグループワーク演習を中心として、シラバスに記載したスキルの習得・獲得を目指して、授業を進めた。

#### 本年度のピア・コミュニティ入門、演習における概要

本年度の受講生は今までの受講生に比べてかなり充実した深い思考ができる学生から成り立っていました。そういった学生を本学のピア・コミュニティで、強いては、卒業後も社会人として活躍できるように仕上げていくという目標を立てて授業を組み立てました。

先ず、傾聴力、気配り力を涵養し、何をすることがいいのかを自分の立場で考えられるようにすることを目標に演習を行ってきました。その中で、相手に信頼してもらい、安心して思いや願いを言ってもらうためにはどうすればいいかをピア・サポートを求める側、実施する側の両視点から考えてみることをディスカッション形式の演習で理解を深めてきました。つまり、永く良い信頼関係を築き、持続させることの大切さを理解し、そうするためには、どういうふうに自分の思いや考えを情報発信すればいいかを考えることをグループによるPBL型の授業で実践していました。この根幹をなす、「言葉によるコミュニケーションによる合意形成」という要の部分を、演習形式で、1対1の状況下から始め、最終的にはグループ対他のグループの合意形成（ここにはそれぞれのグループ内の合意形成のプロセスも含む）にまで実践していました。

授業後のアンケートで自由記述の欄に学生のこの授業を受けての達成感、満足度が読み取れると思います。

結局、この授業で身につけたことは、これから社会人となって社会に貢献していく「関大人」にとっては基礎となる社会人基礎力ではないでしょうか。

この授業の方針は一昨年度から続けていますが、ピア・コミュニティ入門の授業でまいた種が実ってくれることを期待します。

次年度もこれまでの方針を変更せずに、信頼関係を主軸に授業を継続して行きたいと思っております。

以下にこの授業での狙いと実践について報告します。

- ・ 「関西大学ピア・コミュニティ入門」で取得した知識を、知恵や経験に変えて社会人になってからもピアの精神をもって、社会人として実践できるように授業を設計した。
- ・ 俯瞰的視点からの思考ができるようになるため、ロジックツリー、マインドマップ、マトリックス視点分析などのシンキングスキルを使って、準備した状況を読み取り、どうピア・サポートへと行動できるかをグループ演習で考えた。
- ・ 日々の授業でもメタ認知によるリフレクションを行う習慣を身につけさせ、最後の授業ではリフレクションにより自己の成長を確認することをおこなった。
- ・ ピア・チームワークを牽引できるよう相手の信頼を得て、長くいい関係を築くことで、ピア・チームワークを確認できるように合意形成のためのディスカッションを主体に演習による学習活動をおこなった。
- ・ 高邁なリフレクションを重ねて、想像力と創造力を豊かにすることができるように終始した。この成果は最後のリフレクションに反映されていることが観察できる。
- ・ ピア・サポート活動においてイニシアティブがとれる学生になるために、被ピア・サポーターと信頼関係を築き、安心してピア・サポートを受けられる環境づくりを行った。それには、思いや考えをきちんとことばにより誠意を持って伝えるという根本的なコミュニケーションの習得をロール・モデリングやロール・プレイイングにより多視点から自分の置かれた状況を確認し、エンパシーの涵養を行った。つまり、他者とコミュニケーションを通して、情報を共有し共感することの大切さを理解し、仲間としての他者に対するサポートを考動力として実践できる根本的なコミュニケーションの基礎力を身につけられるように授業を行った。

## 添付資料

- (シラバス)
- 授業の様子 (写真)

### 1. (シラバス)

シラバス					
シラバス 2014 年度の講義概要のデータベースを検索します。					
*学部・研究科 法/文/経/商/社/政策/外/シ/環/化	*時間割コード 00849				
*科目名 関西大学ピア・コミュニティ入門	*授業形態/単位 春/2				
*担任者名 山本 緑生	*曜日 水3				
*授業概要、到達目標		*授業概要			
「ピア・サポート」とは、仲間同士で助け合うことを意味します。仲間とは、もっとも少ない人数では二者の関係を表し、規模の大きい集団では複数他者との関係を表します。それは心理的な安定感の獲得を目指すものであり、学習活動を共有する存在であったり、競技において勝利を目指す向士であったりします。					
このような相互援助の活動は豊かな人間関係を育む基本となるものです。この科目ではこのように意義深いピア・サポートについて学びます。それは同時に、社会に出てから必要とされる「社会人基礎力」や「人間力」に結びつくものになります。即ちこれは「専門力ある関大人」を育成することを目的として、関西大学が独自に実践する教育プログラムです。					
わずか4年間の大学生活の中で、社会に貢献する態度や姿勢を身につけるのはたやすいことではありません。社会は相互援助関係とそれを変えるコミュニケーションを通じた信頼によって成り立っています。この授業ではそのことを少しでも身近なもの、我が事として捉え、より豊かで確かなピア・サポートができるような「ちから」を養成していくことをねらいとされています。					
*到達目標					
他者に共感することの大切さを理解し、仲間としての他者へのサポート行動を自明のこととして実践できるように、基礎的知識・スキルを獲得します。					
以下にこの授業での到達目標を提示します。					
<ul style="list-style-type: none"> <li>ピア・サポートの基本を理解し、演習を通して得た知識を実践で応用することができる。</li> <li>シンキング・スキルを身につけ、実践に応用するに当たっての判断に活用することができる。</li> <li>内省・メタ認知・リフレクション等により自己の成長を確認することができる。</li> <li>ピア・コミュニティーにおいてチームワークを牽引できる。</li> <li>コミュニケーション能力を高め、情報を共有し、意見や感情などを共感できる。</li> </ul>					

### 2. 授業の様子 (写真)



図 1. 授業風景: TBL による PBL 学習で信頼関係を重視した演習形式の授業

## 平成 26 年度報告書「正課教育の報告」(科目担当者：田上正範)

本年度は、昨年度の取り組みを踏まえ、3 教員が独立して全 15 コマを担当する構成にて、授業設計を行った（下図参照）。その際、授業プログラムとして、次の 2 点に留意した。

### <H25年度 構成概要>

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
セミナー：入門 (田中先生)	セミナー-A(山本)	セミナー-B(三浦)	セミナー-C(田上)											
	セミナー-B(三浦)	セミナー-C(田上)	セミナー-A(山本)											
	セミナー-C(田上)	セミナー-A(山本)	セミナー-B(三浦)											

[反省] ・ピアソポーター活動とピア・コミュニティ授業とのブリッジが弱い  
・4回授業(1教員)のため、学習の深みに不足を感じる

### <H26年度 構成案>

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
							セミナー-A(山本)							
							セミナー-B(三浦)							
							セミナー-C(田上)							

※2-3コマ      ※2-3コマ      ※2-3コマ

ピアソポーターの参加型授業の導入      学生の状況をみて、教員で話し合い  
授業の相互補完を実施

- 1) ピアソポーターの参加型授業を、2-3 コマ実施する：ピアソポーターの活動を知る
- 2) 授業の相互補完を実施する：同じ学習目標の、異なる授業（クラス）を経験した受講者同士で話し合い、価値観の広がりや理解をさらに深める

さらに、3 つ目の取り組みを行った。本履修者の学年構成として、1 回生の割合が全体の 8 割超を占めていた。そこで、自分の気持ちを発すること、特に素直な気持ちを発する姿勢に着眼し、その学習環境づくりを意識して取り組んだ。具体的には、映像教材 (Web・DVD) を利用した。感情的になりやすそうな情報を共有した後、受講者同士で話し合い、互いに共感し合える場面を積み重ねた。

例年通り、信頼関係つくりを主たる学習目標として取り組んだ。授業アンケートより、「人の意見を聞いて考え方の引き出しが増えた」「自分の視野が広がり、考えが深まった」などがあり、人と人との関係を深める上で、相手の価値観や考えを察しようとする姿勢を育めたと考える。以下に、3 つの取り組みについて、授業の様子および教材例を示す。

## 1) ピアサポータの参加型授業の様子

**【本日のワーク】**

ピア・サポートを体感しよう！

**KUコアラの課題**

本があまり好きでない・図書館へはめったに来ない  
学生に図書館へ来てもらうためには…？

**KUコアラ ∈ • ● • サ**

2014年5月14日(水) 関西大学ピア・コミュニティ入門

①新企画を考えよう！  
②誰もが手に取りたくなるようなチラシを作ろう！



↑2回目のピアサポータ参加型授業

↑受講生が作成したピアサポートへの提案例

## 2) 相互補完（2クラス合同授業）の様子



↑ 使用した教材の一部

↑ 合同授業のため、教室を変更して実施

## 3) 映像（Web・DVD）を利用した教材例



↑ 著名人のプレゼンを聴講



↑ 特別番組の一部を聴講

※いずれも引用の範囲内で実施



↑ テレビドラマの一部を聴講

## **2 ピア・コミュニティの活動報告**

## 2.1 ピア・コミュニティ活動のあゆみ

平成 20 年度に発足した「国際コミュニティ “KU ブリッジ”」、「ピア・コミュニティ運営本部」、「ピア・スポーツコミュニティ」、平成 21 年度に発足した「KU サポートプランナー」、「KU コアラ」、「KU サポーターズ」、「ぴあかんず」、そして平成 22 年度に発足した「i.com」、あわせて 8 つのピア・コミュニティが、ピア・サポート活動を行っている。

以下の表は、平成 26 年度における各ピア・コミュニティのあゆみである。概ね、年間を通じて活発な支援活動が行われているが、メンバーの減少等により活動に苦慮したコミュニティもあった。

	ピア・コミュニティ 運営本部	国際コミュニティ “KU ブリッジ”	ピア・スポーツ コミュニティ (PSC)	KU サポート プランナー (KUSP)	KU コアラ	KU サポーターズ	ぴあかんず	i.com	代表者 会議
平成 26 年									
4月	・新入生誘導活動 ・ピア・コミュニティ広報ポスター作成	・大お花見会 ・書道教室		・「STEP!」	・コアラ☆ミュージアム第 6 弾	・ほっこり相談室 ・Facebook を利用した広報活動 ・関大生なんでも Q&A ・コミュ力基本の「キ」			17 日 30 日
5月	・ピアエリア広報・掲示	・茶道体験		・友達を手料理でおもてなし	・今月のテーマ本				7 日 20 日
6月	・Welcome to ピア・コミュニティ	・GLOBAL KITCHEN ・グローバル体験 in 淡路島		・関大卒女子起業家講演会 ・音楽とラジオの未来へ向けて ・キャンパスツアーハ行こう ・Welcome to ピア・コミュニティ	・関大生に読んでほしい本 100 選	・コミュ力基本の「ホ」 ・KU グチコレ ・コミュ力基本の「ン」			4 日 17 日 25 日
7月				・学びを聞く	・図書館広報誌 vol. 5 の誌面作成			・GIMP 小冊子企画	2 日
8月		・KU ブリッジ夏合宿							
ピア合宿									
9月		・秋学期交換留学生キャンパスツアー			・自主研修合宿				10 日
10月		・KU バザー			・今月の本			・IT スキルアップ講座のリハーサル ・IT スキルアップ講座 (GIMP でチラシや POP を作ろう ! )	3 日
11月	・peer 憇いの場「はねやすめ」	・弓道体験			・図書館広報誌 vol. 6 の誌面作成				7 日 21 日

	ピア・コミュニティ運営本部	国際コミュニティ “KU プリッシ”	ピア・スポーツ コミュニティ (PSC)	KU サポート プランナー (KUSP)	KU コア	KU サポートーズ	ぴあかんず	i.com	代表者会議
12月	・他大学事例研究	・4年生による！留学生向け就職活動報告会 ・Global Talk ・ハンドメイド教室		・BLACK MUSIC CONCERT ・ワコールの下着セミナーでキレイ度アップ		・ほっこり通信-2014年度版-発行			5日
平成27年									
1月	・ピア・コミュニティ広報ポスター作成			・京都伏見フィールドワークツアー	・特集本				9日
2月	・入試誘導 ・三大学交流会						・ITスキルアップ講座のリハーサル ・ITスキルアップ講座(GIMPで色を塗ろう！)		26日
3月	・運営本部合宿				・自主勉強会				27日

また、平成26年9月に、ピア・コミュニティ合同の合宿を実施した。

本合宿は、すべてのピア・コミュニティで役立つスキルの修得、これまでの活動内容と今後の活動計画に関する情報共有、ピア・コミュニティ間の交流を目的に行われた。以下にその詳細を示した。

◆企画名	2014年度 関西大学ピア・コミュニティ夏合宿
日 程	平成26年9月15日(月)～9月16日(火)
場 所	関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館
参加者数	34名(ピア・サポータ18名、研修生7名、教職員7名、学生支援室TA2名)
目的	

①ピア・サポート活動で役立つスキルを身に付ける。②各コミュニティの違いと特色、メンバーについて知る。以上二点によってピア・サポータとしての意識を高め、今後の活動に活かすことを目的とする。

### スケジュール

1日目：9月15日(月・祝)			2日目：9月16日(火)		
10:30	関西大学総合図書館前 集合		8:00	朝食	
13:00	開会挨拶、館内諸注意・合宿上の注意		9:00 ～9:30	○ボディワーク	30分
13:30 ～14:10	○アイスブレイク	40分		10分 一休憩一	
	10分 一休憩一		9:40 ～10:30	○共感させること、納得させること	50分
14:20 ～15:10	○正しい言葉遣いを考えよう	50分		10分 一休憩一	
	10分 一休憩一		10:40 ～11:55	○好印象を持たせる紹介を考えよう	75分
15:20 ～16:10	○職員によるワーク	50分	12:00	昼食、アンケート記入等	
	10分 一休憩一		14:00	出発	
16:20 ～18:00	○計画書を書こう	100分	16:00	関西大学到着、解散	
18:00	夕食・入浴				
21:00	懇親会				

## 効 果

参加者から「実りあるものであった、スキルが身に付いた、他のコミュニティの活動を改めて知ることができた、学んだことが将来の活動で活かしていけると思う」などといった感想を聞くことができた。

運営面や企画実施面ともに多くの課題や問題点が見え、そして同時にそれに伴う改善点が発見された。

## 改 善 点

- ・合宿がどういったものであるか、その意図と内容など、合宿を企画する者が直接各コミュニティに赴いて説明することが、ピア・サポートの合宿に対する理解を深めること、少しでも興味をもってもらうこと、ひいては合宿参加者増加に繋がると考えられる。
- ・合宿の企画運営は、企画ごとに班を構成して行う。各企画班内での情報共有を確実に行い、その企画班の誰に聞いてもワーク概要、進行状況が答えられ、またその内容に差異がないようにする。いつまでに何をするのかというスケジューリングを、企画班ごとに徹底して行い、修正が出た場合も余裕をもてるようとする。
- ・次回以降は凜風館のミーティングルームを事前に借りるなどして、できるだけリハーサルの場所から本番に近いものにする。いくつかの企画で上がったパワーポイントのスライドが見にくいといった意見に対し、事前に対策できるようにする。

## 感 想

今回のピア・サポートと研修生の参加者は合わせて25名、全体の約四分の一程度であった。一部のピア・サポートのスキルアップや交流が盛んになることのみでは、運営本部の理念である各コミュニティの連携促進やサポートが十分に行えていないといえる。一人でも多く参加者を増やす努力をすることで、より活発なコミュニティ間の交流を促し、ピア・コミュニティ活動をさらに意識の高いものに繋げていく必要があると思う。

## 2.2 ピア・コミュニティの活動

この章では、ピア・サポートからの声を中心にピア・コミュニティの趣旨と特徴、各活動の実際を紹介する。

### 2.2.1 ピア・コミュニティ運営本部

#### ■ ピア・コミュニティの趣旨

ピア・コミュニティ運営本部（以下、「運営本部」という）は、存在するすべてのピア・コミュニティを見渡し、ピア・コミュニティ間の連携や情報共有を促す役目を担っている。そのため、ピア・サポートの合宿や研修などの企画・運営を行い、ピア・コミュニティ間の交流を促進している。このほか、関西大学におけるピア・コミュニティの普及と各ピア・コミュニティの活動支援を行っている。

#### ■ 所属人数

16名（男8名、女8名）

\*1年次生3名、2年次生8名、3年次生4名、4年次生1名（平成27年3月末現在）

#### ■ ミーティングの概要

週1～2回（曜日は不定期。随時、調整。）

#### ■ ピア・コミュニティ内の連携

今年度は会議の改善と研修生がピア・サポート活動に積極的に関わっていける環境づくりに努めた。

会議を1週間に1回設け、メンバーの出席率が高い日程と時間に設定した。欠席者のために議事録をメーリングリストで送信する。議事録をマイクロソフトのApplicationdriveに掲載する。これらの取り組みが功を奏し、会議において活発な議論が行えるようになった。

企画を進めていく際は研修生が主体となって企画を進めていき上位年次生がサポートするという形をとった。こうすることで、研修生が積極的に関わっていく姿勢を養えた。

#### ■ ピア・コミュニティ間の連携

運営本部はその活動の趣旨から、必然的に他のピア・コミュニティを支援する連携体制を取っている。また、合宿などの合同企画を通じて、すべてのピア・コミュニティに所属するメンバー間の交流を促進させ、連携を深めることができるよう活動している。

#### ■ 教職員との連携について

経験の豊富な上位年次生が少ない中、まだまだ経験の浅いサポートで進めていくことが多かった今年度の活動において教職員との意見交換は、よりよい活動の実現に欠かせないものであった。新体制が軌道にのり、サポート自身が考えて行動できるようになったことから、次年度以降は要所で必要な助言をいただきながら、学生主体のより質の高いピア・サポートを目指していきたい。

#### ■ 昨年度からの改善点

今年度は、昨年度上位年次生の支援の下、経験を積んだ2年次生が中心となり、活動した。サポート各々が自身の個性と能力を活かし、様々な企画に挑戦することができた。しかし、企画の規模を昨年度より大きなものにしたため、上位年次生が中心に進めてしまった部分が少なからずあったとも言える。今後は、1年次生にも責任のある役割や活動を積極的に経験してもらうことで、運営本部を任せていきたい。

**◆企画名** 新入生を迎える！！（新入生誘導活動）  
**日 程** 平成 26 年 4 月 1 日（火）  
**場 所** 関西大学千里山キャンパス  
**参加者数** 11 名（ピア・サポート）  
**目 的**

新しく関西大学の仲間（peer）となった新入生に対し、誘導活動を行うことで、新入生へのピア・サポートの普及を行う。ピア・サポート各自が活動に参加することで、サポートとしての自覚意識を高める。また、ピア・サポート同士の交流を促進することで、今後の円滑な活動につなげる。

#### 内 容

- 入学式が行われるまでの約一時間の間、本学正門を中心とした学内での新入生・保護者を対象とした式場への誘導やカメラ撮影補助を行い、スムーズな人の流れが出来るよう努めた。
- 式場（中央体育館）周辺にて午前・午後の入学式後に新入生・保護者の誘導を行った。
- 新入生・保護者に対して目印となるように、案内板（案内係と印字された紙をラミネート加工したもの）を使用した。案内板は3枚作成、使用した。
- 運営本部だけでなく、他コミュニティにも参加を呼びかけた。さらに、昼食時にトーケーテーマボックスを使用し、ピア・サポート同士が楽しく交流をできるように話題を提供了。
- 活動時、ピア・コミュニティの青いジャンパーを着用し、ピア・コミュニティの広報にも努めた。

#### 効 果

- 正門前での誘導において、二人一組で行動することによって撮影補助と写真撮影の列のみだれを正すことが効率よくできた。
- 入学式誘導に参加経験のあるサポートがいたことによって、当日の流れが良かった。
- 体育館前での誘導において、新入生とその保護者が会場への道に迷っている時、ピア・サポートとして会場までの案内をしっかりと行えた。
- 案内板を使用したことによって、新入生とその保護者がサポートに会場までの道など困ったことがあった際、聞きやすい状況をつくることができた。

#### 改 善 点

- 他コミュニティから誘導活動に協力してくれるサポートを多く集めることができなかつた。→募集開始を早めに行うことを心がける。他に良い募集方法などを考える。
- 正門前での誘導において、全体を見渡し指揮をとる人がいなかつた。→全体を見て通路を確保したり、会場へのスムーズな誘導を担う役割を設ける。
- 誘導時の詳細部分を把握できていなかつた。→事前に一度打ち合わせを行う。

#### 感 想

誘導する際の注意点や詳細を事前に打ち合わせをすることができなかつたが、臨機応変に対応できたのはよかつた。人数が少ないこともあり、細かい誘導が困難だったので、次から多くのサポートに参加してもらえるよう、募集に関して早め早めに行動していくようになる。

**◆企画名** ピア・コミュニティ広報ポスター  
**日 程** 平成 26 年 4 月 18 日 (金) ~8 月 2 日 (土)  
**場 所** 関西大学施設内 【ポスター掲示場所】参照  
**参加者数** 11 名 (ピア・サポート)  
**目 的**

凜風館だけでなく、関西大学全体でピア・コミュニティについて知れる機会を増やすため。そして、一般学生のピア・コミュニティ活動に対する認知度をあげ、少しでも多くの学生にピア・コミュニティに興味を持ってもらい、企画への参加に繋げるため。

### 内 容

目的に合わせ、大小 2 種類のポスター・ビラを作成した。大きいポスターはマネジメント BOOK で指定された場所に掲示するため、A3 サイズで関西大学内や関西大学学生寮などに貼り出した。一目で見て分かりやすく、興味を引くようなデザインを心掛けた。内容はコミュニティについてとピアエリアの場所を記載した。

小さいビラは A4 サイズ両面刷りとした。ピアエリアに訪れた一般学生が、自由に持ち帰れるよう配置した。内容は各ピア・コミュニティの企画例とその説明、また一般学生がその企画に参加することへのメリットを記載した。

#### 【ポスター掲示場所】

- (大)・凜風館一階入り口横
  - ・中央体育館
  - ・秀麗寮
  - ・ドミトリートリ一月が丘
- (小)・ピアエリア

### 効 果

- (大)・ピアエリア以外の場所にポスターを貼り出したことで、一般学生に対してピア・コミュニティをアピールする場を設けることができた。
- (小)・最初に刷った分が減っていて、一般学生に持ち帰ってもらうという当初の目的が達成された。
  - ・各コミュニティのガイダンスでも使われていた。

### 改 善 点

他コミュニティへの依頼内容があいまいで、他コミュニティからの返事が遅れてしまい、完成が自分たちで決めた日程よりも半年ほど遅くなってしまった。依頼文と一緒に例を載せて、依頼内容をもう少し具体的にするべきだった。

### 感 想

大きいポスターはシンプルに作りすぎてしまい、一般学生の目を引きやすいものではなかったけれど、本部の会議で意見をもらいながら改善していった。

小さいビラは、最初に刷った分が減っていて、一般学生に見てもらえているということがわかりやすかったけれど、大きいポスターは見てもらえているのかがわからぬいため、振り返りでも意見がなかなか出てこなくて、効果があったのかがわかりづらかった。

また、広報ポスター担当のサポートが忙しかったため、完成が予定よりも大幅に遅れてしまったので、もう少しお互いに協力しながらやっていくべきだったと思った。

**◆企画名** ピアエリア広報・掲示  
**日 程** 平成26年5月1日(木)～平成27年3月31日(火)(掲示期間)  
**場 所** 総合学生会館凜風館1階 ピアエリア  
**参加者数** 3名(ピア・サポート)  
**目 的**

- ・ピアエリアに自己紹介カードを掲示することで、関大生にピアエリアがピア・サポートの活動場所であることを広報する。
- ・ピア・コミュニティ内におけるピア・サポート同士の交流を促進する。
- ・ピア・サポートとしての意識向上を目指す。

#### 内 容

- ・昨年度に実施した、ピアエリア広報・掲示企画を引き続き実施した。
- ・コミュニティ紹介ポスターは昨年度に作成したものをそのまま掲示し、自己紹介カードは新しくピア・コミュニティに加入した研修生向けに作成し、配付した。配付した自己紹介カードを回収し、ピアエリアに掲示した。

#### 効 果

##### <自己紹介カード>

- ・他コミュニティに所属しているピア・サポートがどのような人であるかが知れた。
- ・加入したばかりのピア・サポートにピア・コミュニティでどのような活動をしていきたいか、考えるきっかけを設けられた。

##### <コミュニティ紹介ポスター>

- ・他コミュニティが普段行っているピア・サポート活動について知れた。
- ・他コミュニティに興味を持つサポートが増えた。

#### 改 善 点

##### <自己紹介カード>

- ・ピアエリアを訪れるピア・サポートがほとんど同じ人であるため、自己紹介カードがピア・サポート同士の交流に役立っているとは言えない結果となった。
- ・一般学生に対する広報効果に関しては、自己紹介カードは文字のみのレイアウトであつたため、一目見るだけでは情報が伝わりにくく、あまり効果的な広報にはなっていないと思われる。
- ・ピアエリアには知らないピア・サポートがいて入りにくい等の声も聞かれ、ピア・サポートがピアエリアに来やすい環境を整えることが重要であることがわかった。
- ・研修会や交流会などを企画しピア・サポート同士の交流を深めることで、ピアエリアを利用するピア・サポートを増やしていきたい。

##### <コミュニティ紹介ポスター>

- ・文章ばかりのポスターであったため、人目に付きにくく、一目見るだけでは内容が理解できないポスターであった。写真や絵柄などを掲載することで、人目に付きやすく、内容も分かりやすいポスターを作っていく必要がある。
- ・ポスターは長期間にわたって掲示しているため経年劣化が激しい。作り直しを検討したい。

#### 感 想

目的をあまり達成できたとはいえない結果となってしまった。しかしポスターのレイアウトに関することや、ピアエリアを利用しづらいというピア・サポートの声といった教訓を得ることができた。

今後もピアエリアを使った広報企画とコミュニティ間の連携を促進するための企画を行う予定なので、今回の企画で得た教訓をいかしていきたい。

<b>◆企画名</b>	Welcome to ピア・コミュニティ～ピアになじもう～ [KUSPとの共催]
<b>日 程</b>	平成 26 年 6 月 27 日 (金)、6 月 30 日 (月)
<b>場 所</b>	総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム 1
<b>参加者数</b>	27 日：17 名 (ピア・サポート 9 名、研修生 8 名)、30 日：13 名 (ピア・サポート 6 名、研修生 7 名)

#### 目的

- ・今年度新しくピア・コミュニティに入った研修生に各コミュニティの活動内容について知ってもらうことによって、ピアに馴染んでもらう。
- ・ピアエリアの使用方法について改めて説明することで、今後ピアエリアを利用しやすいようにする。
- ・新研修生同士の交流を促進することで、今後活動するにあたり、コミュニティ間の連携につなげる。

#### 内 容

##### ① コミュニティ紹介

27 日はパワーポイントで 8 つのコミュニティの紹介を行い、1 つのコミュニティ紹介ごとに会議風景の映像を流した。30 日はパワーポイントによる紹介を前半に行い、後半に会議風景の映像をまとめて見てもらった。

##### ② ゲーム

席替えゲームとたけのこニヨッキゲームを行った。30 日は参加者の交流をより深めるために、罰ゲームで自己紹介を行うルールを加えた。

##### ③ ピアエリアの説明

ピアエリアの説明をパワーポイントで行い、その後実際にピアエリアに行って説明を行った。参加者にはワークシートを配付し、説明を聞きながら空欄を埋めてもらった。

#### 効 果

- ・コミュニケーション紹介を通して、他コミュニケーションの詳細な活動内容や普段の様子を知つてもらうことができた。
- ・ゲームを通して、参加者間の交流を促進することができた。
- ・ピアエリアの説明を通して、備品台帳などの使い方を知つてもらうことができた。また、ワークシートに空欄を埋める形式としたことで、参加者に説明をしっかりと聞いてもらうことができ、さらに実際にピアエリアに行って説明を行ったことで、参加者の理解をより深めることに繋げられた。

#### 改 善 点

- ・企画の内容がまとまらず、参加者の募集開始が遅れ、実施日を遅らせることになってしまった。
- ・リハーサルでもっとしっかり台本の読み込みやパソコンの操作の確認を行えば、内容を高めることができた。
- ・運営本部と KUSP の役割をしっかり分担すればよかった。
- ・コミュニケーション紹介は担当者が内容の把握をあまりできていなかった。
- ・ゲームはもう少し盛り上がって、かつ名前を覚えられるものの方がよかったです。

#### 感 想

- ・担当者は全員今まで企画の立案から進行まで未経験だったので、企画全体の流れを知ることができ、自己の成長につながった。
- ・共催という形で連携することにより、運営本部と KUSP の担当者の交流が深まった。また会議見学に行ったことであまり交流が無かった他コミュニケーションのサポートとも交流を深めることができた。

<b>◆企画名</b>	<u>peer 懇いの場「はねやすめ」</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 11 月 1 日（土）～11 月 4 日（火）</u>
<b>場 所</b>	<u>総合学生会館凜風館 1 階 ピアエリア、グローバルエリア、ライティングエリア</u>
<b>参加者数</b>	<u>15 名（ピア・サポート 14 名、研修生 1 名）</u>
<b>目 的</b>	

ピア・コミュニティの大きな課題として、団体の知名度がまだ低いという点が挙げられる。そこで学園祭という関西大学に大勢の人々が集う機会を利用し、ピア・コミュニティについて気軽に知ってもらえる場を設けたいと考えた。また、ゆっくり座って休憩したり、買ったものをゆっくり食べられたり、学園祭をより楽しむためにもちょっと一息つける場所にもしたいと考え、実施した。

### 内 容

- ・机にラミネート加工したコミュニティ紹介資料を置き、自由に見てもらえるようにした。
- ・昨年度の広報・掲示活動で作成したポスター・資料・各コミュニティから提供された実際の企画写真などをホワイトボード、衝立などをを利用して掲示をした。
- ・プロジェクターとテレビを使用して、KUSP、KU サポーターズの実際の企画映像や紹介プロモーションビデオを流した。
- ・当企画そのものを知ってもらうため、宣伝をおこなった。
- ・質問対応、巡回をした。

### 効 果

- ・KUSP がワコールとコラボレーションして企画をするきっかけになった。  
→ワコールの方達が何か関大生のために講演会をしたいと考えており、机の上に置いていた資料を見て、KUSP 主催の企画に興味を持ち、共催企画が実現した。
- ・当日に運営するサポートの人数が少ないように感じ、心配していたが、呼び込みや質問対応、巡回ができていたので良かった。
- ・サポートが楽しんで活動できた。
- ・準備の進行は遅かったものの、資料や写真は良いものができる。今後、様々な企画の中で使えると思った。

### 改 善 点

- ・質問への対応に困ることがあった。  
→マニュアルをあらかじめ作っておく。
- ・展示物を多くの人に見てもらうにはどうしたらいいかを考えていくべき。
- ・展示物の準備にとりかかるのが遅かった。  
→学園祭の前日に急いで作業をしていたので、余裕をもって作業に取り掛かれるようにする。（学園祭の 3 日前までには準備を終わらせておく、など。）

### 感 想

他コミュニティからの資料集めは、コミュニティごとに資料の量の多寡や、資料を貰える日の遅速が様々であったこと、どの資料や写真を展示するかを選ぶのにも時間がかかり大変だった。しかし、資料や写真はこれからも使える良いものができたので良かったと思う。当日はスムーズな行動もでき、サポートも楽しめた。今後またこの企画を行う際には、スペースをもっと広げ、より多くの学生や一般の人達に一息ついてもらい、ピア・コミュニティの事を知ってもらえたらしいと感じた。

**◆企画名** 他大学事例研究（立命館大学）  
**日 程** 平成 26 年 12 月 18 日（木）  
**場 所** 立命館大学衣笠キャンパス 至徳館 304 東会議室  
**参加者数** 3 名（ピア・サポート 2 名、職員 1 名）  
**目 的**

立命館大学において、同大学にて行われているピア・サポート活動の報告会（Assembly for Peer Supporters）が開かれる。報告会は立命館大学に多数存在するピア・サポート団体間の連携をテーマに行われ、報告会に参加することで運営本部の活動の一環であるピア・コミュニティ間の連携の促進について現状を見つめ直し、新しいピア・コミュニティ間の連携を模索する。

### 内 容

18:30～18:35 開会の挨拶  
18:35～18:50 APS の取り組み —APS2013 での気づきと APS2014 開催までの経緯—  
18:50～19:05 APS2014 の取り組み —ピア・サポートマップとピア・サポートーズプロフィールの完成まで—  
19:05～19:15 ピア・サポートーによる連携のアイディア事例 1  
19:15～19:25 ピア・サポートーによる連携のアイディア事例 2  
19:25～19:40 本学のピア・サポート活動、APS の取り組みについてのコメント  
19:40～19:55 意見交換  
19:55～20:00 総評・閉会の挨拶

### 効 果

関西大学ピア・コミュニティはこれまで、それぞれの分野、領域ごとにコミュニティを分け、コミュニティごとに各々の理念に沿った個性あふれるピア・サポートを展開してきた。ピア・コミュニティ間での必要なコミュニケーションは定期的に実施している代表者会議が担っているが、関西大学内でのコミュニケーションに留まっており、他大学とのピア・サポートを通じた対外的な交流はほとんど出来ずにいる。今回、立命館大学のピア・サポート団体が実施する『Assembly for Peer Supporters』に参加し、他大学がどのような視点でどのようなピア・サポートをされているかを知ることができた。参加できなかつたサポートとの共有の第一歩として、代表者会議を通じて他コミュニティへの報告をおこなった。資料はピアエリアで管理し、誰でも自由に見られるようにした。大いに活用してもらうことで、今後の関西大学におけるピア・サポート活動の視野と可能性を広げていくことに繋がれば良いと思う。

### 改 善 点

当企画は各コミュニティから 1 名の参加が望ましかったが、実際に参加できたのは運営本部から 2 名のみであった。資料の共有という形での情報や内容の共有はおこなったが、コミュニティによって視点や捉え方は異なるくると思われる所以、できれば参加の上で資料を基にした意見交換をした方がより具体的な共有ができると思った。

### 感 想

立命館大学のピア・サポートーは 3000 名ほどいると事前に聞いていたが、当企画への参加をとおしてその規模の大きさを改めて感じさせられた。しかし大きな規模である故の課題が存在していることも同時に感じた。「他のコミュニティのことを知らない」という課題には、私たち関西大学ピア・コミュニティにも通ずる部分があり、運営本部としてはサポート一人一人が解消できる策を考えていくべきだと思う。

◆企画名	<u>ピア・コミュニティ広報ポスター</u>
日 程	<u>平成 27 年 1 月 13 日 (火) ~ 3 月 31 日 (火)</u>
場 所	<u>関西大学施設内 (【ポスター掲示場所】参照)</u>
参加者数	<u>12 名 (ピア・サポート 11 名、研修生 1 名)</u>
目 的	

- ・一般学生に「ピア・コミュニティ」という団体名及び活動について知ってもらう。
  - ・ピア・コミュニティという団体名を知ってもらった上で、今後、企画時の参加者募集等の際に興味・関心を持ってもらえるようにし、企画参加へのきっかけをつくる。

内 容

目的に合わせ大小二種類のポスター・ビラを作成した。大きいポスターはマネジメントBOOKで記載された掲示可能場所にA3サイズで貼りだした。一目見て「ピア・コミュニティ」の文字が視界に飛び込みやすいデザインを心掛けた。内容はコミュニティについての紹介文と活動風景を写した写真を掲載した。小さいビラはA4サイズ両面刷りとした。ピアエリアに訪れた一般学生が、自由に持ち帰れるよう配置した。内容は各ピア・コミュニティの企画例とその説明、また一般学生がその企画に参加することへのメリットを記載した。

## 【ポスター掲示板】

(ポスター)・凜風館1階入口横・凜風館1階ピア・コミュニケーション揭示板・凜風館4階学生支援室前・正門ボランティアセンター揭示板・誠之館・秀麗寮、ドミトリー1月が丘・KUシンフォニーホール前・凱風館・新凱風館揭示板・中央体育館・東体育館・新関西大学会館3階キャリアセンター揭示板・ITセンター1階揭示板・ITセンター4階揭示板・サテライトステーション1・2・総合図書館1階揭示板

(ビラ) ピアエリア・ボランティアセンター窓口

効 果

- (ポスター)・ピアエリア以外の場所にポスターを貼り出したこと、一般学生に対してピア・コミュニティをアピールする場を設けることが出来た。

  - ・ポスターに写真を載せることでどんな活動をしているのかがわかるようにした。

(ビラ)・各コミュニティのガイダンスでも使われていた。・最初に刷った分が減っていて、一般学生に自由に持ち帰ってもらうという目的が達成された。

改善点

- ・ポスターの掲示開始予定を学園祭としていたが、完成が3ヵ月ほど遅くなってしまった。
  - ・掲示期間がテスト期間中、春休み期間中で一般学生の少ない時期であったため、一般学生にあまり見てもらえなかった。
  - ・広報ポスターの依頼文と学園祭企画の依頼文が重なってしまい、他コミュニティの混乱を招いてしまった。

感想

大きいポスターは完成が予定よりも遅れてしまったが、何度も改善を加えたおかげで良いものが出来た。ただ、役割の分担がうまくできておらず、一人に負担が偏ってしまった。小さいビラは広報効果がわかりやすかったが、大きいポスターは効果があったか不透明であった。今回はマネジメント BOOK で記載された掲示可能場所すべてに掲出したが、ポスターを見る機会が少なく、目立っていなかった。ガイダンスに来た一般学生に聞いてみたところ、ポスターを見たことがないという返答があった。今後は現在掲示されている場所以外も検討する必要があると感じた。小さいビラは毎年更新が必要だが、大きいポスターは暫く使い続けることが出来るのではないかと思う。

◆企画名 2015年度入試誘導  
日 程 平成27年2月1日(日)～2月8日(日)  
場 所 関西大学千里山キャンパス  
参加者数 14名(ピア・サポート12名、研修生2名)  
目的

4月から関西大学の仲間(peer)になるであろう受験生に対し、誘導活動を行うことで、新1回生へのピア・コミュニティの普及とピア・サポート活動の精神の涵養を目的とする。また、他のコミュニティのサポートと一緒に誘導活動を行うことで、サポート同士の交流を促進し、今後の活動に活かしていく。

#### 内 容

主な活動内容としては、午前は受験生に受験票を確認しながら移動してもらうように繰り返し呼びかけたり、それぞれの校舎の場所をアナウンスしたり、受験票を見ながら立ち止まっている方を見かけたら積極的に声をかけ、丁寧に案内したりすることであった。午後は関大前駅への方向を示すプラカードを持って受験生を経路通りに誘導した。

#### 効 果

関大生の一員として教職員や他団体の学生と一緒に受験生のサポートを行うことができたので良かった。昨年度より誘導の回数が増えたが、大きなトラブルもなく終えることができたので良かった。その要因として、毎日ほぼ同じメンバーで誘導に参加したことが挙げられる。そのため、スムーズに誘導を行うことが出来たと思われる。また、誘導を行う前にその都度情報共有を行ったことも良かった。そして、今回から事前に資料を配って説明を行い、予め資料を読んでもらってから誘導を行ったので、誘導当日に慌てることなく活動を行えた。

また、今回は各配置に複数のピア・サポートを配置した。活動中はそれぞれサポート同士の交流も行えたと思われるので、今後の活動に活かしていってほしい。

#### 改 善 点

- ・今回初めて事前説明を行ったが、業務の注意点に関する説明がほとんどであったため、誘導当日の活動内容については、あまり説明できていなかった。そのため、実際の誘導内容について詳細な説明が必要であったと思われる。
- ・受験生に対して入構車両に関する注意喚起がほとんどなかつたので、受験生と車両が接触する恐れがあった。そのため、メガホン等を使って積極的にアナウンスを行う必要があると思われる。
- ・一部のサポートはメガホンを使って誘導を行ったが、近くでメガホンを使っている他団体の方と呼びかけのアナウンスが被り聞き取れない場面があったので、受験生に配慮しながら使用するべきだと思われる。
- ・今回は他コミュニティからの参加者が去年と比べて少なかつた。そのため、ピア・コミュニティ全体に対して依頼がくるものであり、ピア全体の企画であることを強調しながら広報を行い、参加者を集めていきたい。他コミュニティからの参加者が増えることにより、運営本部の参加者の負担も軽減されると思われる。また、そうすることによって、誘導の日程を増やすことが可能だと思われる。

#### 感 想

昨年度よりも多く誘導を行ったが、大きな問題もなく終えられたことはとても良かった。誘導初日をどのように人員配置すればいいのか迷つたが、各サポートの協力もあり最終的には上手く人員を配置することができたと思う。朝早くから夕方まで一日中の活動であつたが、参加者一人一人がピア・サポートとして誘導を行っていたと思われる。来年度も今年度の反省点や改善点を活かして、今年度よりも多く入試誘導を行ってほしいと思う。

<b>◆企画名</b>	<u>三大学交流会（神戸学院大学、県立広島大学、関西大学）</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 27 年 2 月 25 日（水）</u>
<b>場 所</b>	<u>総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム、チルコロ（懇親会）</u>
<b>参加者数</b>	<u>47 名（ピア・サポート 13 名、研修生 4 名、教職員 3 名、学生支援室 TA2 名、神戸学院大学 学生 17 名、教職員 1 名、県立広島大学 学生 6 名、教職員 1 名）</u>

#### 目的

神戸学院大学、県立広島大学のピア・サポート活動を知ること、意見交換を通じて自分たちのピア・サポート活動を再考し、新たな気づきや発見を得ることで、今後のピア・サポート活動に対する視野を広げる。

また、KU サポーターズ、KUSP、KU ブリッジのピア・サポートと協力し、交流会の主催を担うこととなったので、コミュニティ間の連携のきっかけとする。

#### 内 容

- 13:00 開会挨拶
- 13:10 アイスブレイク
- 13:40 活動紹介
- 14:50 ワーク「関大ピアをもっと知ろう」
- 17:00 意見交換
- 18:00 懇親会（チルコロに移動）

#### 効 果

アイスブレイクでは、当初の目的通り、雰囲気を和ませることに成功した。また、インタビューゲームを行ったことで、一般的な自己紹介よりも詳しくお互いについて知ることができた。活動紹介では他大学の活動内容を知ることができた。ワーク「関大ピアをもっと知ろう」では、関西大学の各コミュニティの行っていることが具体的に伝えられた上に、活動紹介で説明できなかったことのフォローにもなった。また、関西大学ピア・コミュニティだけでは気づくことができなかつた異なった視点、意見を聞く事ができた。意見交換では各大学におけるピア活動の違いを理解できた。懇親会では各企画で堅い雰囲気だったのが和らいだ。

#### 改善点

アイスブレイクでは、参加者に対してのルール説明が不十分だったのでどう説明したら分かってもらえるか考えてできるだけ細やかな部分まで説明する。活動紹介では、参加者のいないコミュニティの活動紹介をもっと充実させる。ワーク「関大ピアをもっと知ろう」では、各ブースがわかりやすいように、コミュニティの名前が分かるようなサインボードのようなものを作っておく。意見交換では、情報共有不足だったので関西大学側の参加者全員の情報共有を細やかに行う。懇親会では、各大学に分かれて話し込んでしまっていたので、招待側である関西大学側が積極的に参加者に声をかけたりして、交流を円滑にできるように心がける。

#### 感 想

- ・中々企画メンバーが集まらず、他コミュニティと何かを合同で企画することの大変さを痛感した。特にリハーサルの参加率が低く、準備不足になってしまった感じがした。
- ・学内へ行う活動が今まで多かったので、学外へむけての活動を経験できてよかったです。
- ・異なった視点、意見を聞くという意味では参考になったが、各大学コミュニティの有り方が違うので、今後の活動における参考にならない部分も多くあった。

**◆企画名** 運営本部合宿  
**日 程** 平成 27 年 3 月 14 日（土）～3 月 15 日（日）  
**場 所** 関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館  
**参加者数** 14 名（ピア・サポート 7 名、研修生 2 名、職員 2 名、学生支援室 TA3 名）  
**目 的**

- ・今年度の活動の振り返り
- ・運営本部理念（広報、交流、管理）の再確認を行う
- ・以上をもとに次年度の計画策定を行う

#### 内 容

今年度の反省、ピアの連携、ピア全体について、運営本部の在り方、次年度の計画という 5 つの議題について話し合う合宿であった。

・タイムスケジュール

(1 日目)

13:00～ 今年度の反省

15:10～ ピアの連携、ピア全体について、運営本部の在り方

18:00～ 夕食

20:00～ 運営本部の在り方

22:00～ 懇親会

(2 日目)

8:00～ 朝食

9:00～ 次年度の計画

12:00～ 昼食

13:00～ 次年度の計画

#### 効 果

- ・普段の会議では 90 分で 3 つ～5 つ程度の議題について話すが、合宿では 1 つの議題に 2 時間程度時間をかけることで、メンバー一人一人の意見をしっかりと聞くことができた。
- ・会議の司会をメンバー全員が交代で担うことで司会を経験したことのないメンバーにとっていい経験となった。
- ・運営本部メンバーで親睦を深めることができた。

#### 改 善 点

運営本部合宿は、準備から実施までわずかな時間しかなかったが、滞りなく実施することができ、また合宿当日に大きな問題も発生することなく終えることができた。

#### 感 想

ピア全体合宿中止ということは非常に残念なことであった。合宿は本来ピア・コミュニティ全体でするものである。他のコミュニティの人々に「合宿に参加したい」と思ってもらえるような合宿はどうすればできるのか検討していく必要がある。

運営本部合宿でピア全体合宿参加者減少の理由について話し合った結果、合宿の内容についての広報不足、合宿実施日の設定ミス、奈良県明日香村という遠方地での合宿に対する抵抗感等があげられた。これらの意見を参考にし、また各コミュニティからピア全体合宿への要望をしっかりと聞き取ることで、夏のピア全体合宿の実施につなげていきたい。

ピア全体合宿中止という問題に対して、運営本部メンバーが一致協力して、ピア全体合宿を運営本部合宿という形に変えることができ、運営本部の企画実施力が上がっているということを実感できた。引き続き運営本部の企画実施力を向上させ、関大生によりよいピア・サポートを提供していきたい。

## 2.2.2 国際コミュニティ “KUブリッジ”

### ■ ピア・コミュニティの趣旨

国際コミュニティ “KUブリッジ”（以下、「KUブリッジ」という）は、留学生の学生生活の充実を図るため、留学生が抱える学業・生活面双方での悩みや不安の解消を図り、留学生と日本人学生との交流を促進することを目的としている。このほか、日本と諸外国との文化交流イベントの実施や、国際部と連携した活動も行っている。

### ■ 所属人数

32名（男12名、女20名）

\*1年次生5名、2年次生9名、3年次生6名、4年次生11名、大学院生1名（平成27年3月末現在）

### ■ ミーティングの概要

定例ブリッジ全体ミーティング 週1回、定例国際部ミーティング 月1回

### ■ ピア・コミュニティ内の連携について

企画は5人程度のグループで考え、実行・振り返りまで一貫して行っているため、他のグループの状況がわかるように、週に1回の全体ミーティング（以下、「MT」という）でKUブリッジ全員が必ず顔を合わせるようにしている。MTの前半において各グループ3分で進行状況を報告したり、各グループが作成した資料など携帯やパソコンで誰でもいつでも確認できるようにすることで、情報共有を徹底している。またMT後半において各グループから提案のあった課題についてディスカッションをしたり、ワークを行うことで、KUブリッジ全員のモチベーション向上とスキルアップを図っている。

### ■ ピア・コミュニティ間の連携について

主な連携は代表者のみが参加する代表者会議である。春と夏に行われるピア全体合宿や他コミュニティが実施している企画など関わる機会は多くあるが、主体的に参加するメンバーはほんの一握りであるのが現状である。他コミュニティの学生と関わることの良さを先輩から後輩へ伝え、連携を促進していく必要があると考える。

### ■ 教職員との連携について

関西大学のグローバル化はまだ改善の余地があり、KUブリッジと国際部の連携を強化することで、学内での国際交流は活発化させることができると考え、今年度は国際部の職員の方と関わる機会を多く設けた。国際交流の活性化やKUブリッジが国際部へ求めていること、反対に国際部がKUブリッジに求めるなど意見交換をし、その結果、KUブリッジと国際部の関係性が徐々に密になっていった。今後も国際部との連携の大切さを認識し、共に関西大学のグローバル化を促進していくことを考えたい。

### ■ 昨年度からの改善点

KUブリッジをよりよくするには、全員が関西大学のグローバル化を促進するために今年1年KUブリッジとして何をしなくてはいけないかしっかりと目標を持ち、その上で企画の質とともに、一人ひとりの意識を向上させる必要があると感じ、ワークを通してこれらを達成することにした。ワークは、これまで情報共有にとどまっていたMTを、共有方法を工夫することで時間を捻出し、例えばKUブリッジの強みや弱みを認識し、改善するためのワークを始め、一人ひとりのメンバーが自ら考え行動できるようにするためのワークを行った。するとKUブリッジメンバーとして活動する意義の実感や物事の考え方のテクニックなどを修得することができた。その結果、企画数や企画参加者数は過去最高を達成することができた。これからは、KUブリッジメンバーのさまざまな違いを尊重して受け入れ、「違い」を積極的に生かすことにより、変化し続ける環境や多様化する留学生のニーズに最も効果的に対応しKUブリッジの優位性やオリジナリティを創り上げていくべきだと考える。

<b>◆企画名</b>	大お花見会
<b>日 程</b>	平成 26 年 4 月 6 日 (日)
<b>場 所</b>	関西大学千里山キャンパス
<b>参加者数</b>	343 名 (ピア・サポート 20 名、留学生・一般学生 323 名)
<b>目 的</b>	

この春新しく関西大学へやってくる留学生を主なターゲットとして、大お花見会を開催し、多くの友人を作つてもらう機会と日本語を話す機会を提供する。また、大お花見会の中でゲームを取り入れたキャンパスツアーを行うことで、これから半年ないし 1 年間過ごすキャンパスを楽しく理解してもらう。

KU ブリッジ、留学生会の知名度を上げるとともに、今後 KU ブリッジ、留学生会、国際部が企画する国際交流等のイベントやレクリエーションに参加しやすいような体制をつくる。

### 内 容

スプリングフェスティバルのコアタイムが終了したら、そのままグループごとに学内スカベンジャーントをスタートする。スカベンジャーントでは 6 つの施設・場所を回つてもらう。〔教務センター+国際部、該当する学舎の教室、1 学舎裏駐輪場、落し物センター、サテライトステーション、100 周年記念会館（ゴール）〕

各ポイントでは次の場所へ行く指令書と最後に必要となるキーワードが書かれたカードをもらう。グループは使う学舎が同じ人で構成されているので、例えば 1 学舎の人たちのグループは 1 学舎の教室のみ回る。グループごとに回る場所の順序はばらばらにして、一か所に全てのグループが集中しないようにする。ゴールの 100 周年記念会館に到着したら、グループでキーワードの書かれたカードを使って問題を解く。

また、謎解きが終わった順に順位を決め、1~3 位には参加者の前で景品を手渡す。

### 効 果

スカベンジャーントでグループごとにクイズを解きながら学内を回つたことで、学内の施設の場所や使い方が分かつてもらえたのではないだろうか。また、グループで居る時間が長かったため、グループ内で施設の使い方を説明したりするなど、グループ内での異文化交流や日本人学生・留学生の友達作りの良いきっかけ、機会になった。

また、多くの人に KU ブリッジの存在を知つてもらうことができた。

### 改 善 点

人数が多い場合は晴天、雨天に関わらず室内で行う。  
→人数が多い場合は声も通る室内で行うことで全体をまとめるることもできるし、室内であれば雨天を気にすることもないで安心して準備できる。

参加者数が多いと、どうしても大変になる。  
→新入日本人、新入留学生にのみにフォーカスしたり上位年次と新入生でお弁当を食べるだけの会をする。そうすることで 1 回の人数が少なくなり内容も 1 つのことに特化するため運営側も楽になる



### 感 想

KU ブリッジでの初めての大型企画であったため、企画時から非常に忙しかった。しかし、留学生会、担当部署の国際部の方々の力を借りてこのような楽しい会にすることができた。反省点は多々あるが、大型企画を成功させたという点では非常に達成感があり、反省点からも今後の企画やイベントに生かせるものが多く得ることができたことは大変良かったと思う。

◆企画名　書道教室  
日　程　平成26年4月21日(月)  
場　所　新関西大学会館南棟3階　国際部多目的室  
参加者数　20名(ピア・サポート10名、留学生7名、日本人学生3名)  
目的

留学生に日本の貴重な文化の一つである書道を体験してもらい、書道を通じて日本人学生との交流をはかること。

### 内　容

初めに同じグループになった人と親睦を深めてもらうために、アイスブレイクとして「嘘当てゲーム」というゲームをしました。遊び方は、1人3つ言うことを決めてもらい、その中に1つ嘘を交えてもらうことで、他のメンバーに当ててもらうというものでした。



実際に書いてもらう前に、書道の道具の説明や、書道の歴史の紹介をしました。

その後、ウォーミングアップとして、自分の名前を書いて練習してもらいました。それと平行して、最後に班のメンバーに渡すための名刺作りをしてもらいました。



最後に、メインイベントでもあった巻物を作りました。長半紙に自分の好きな言葉を書いてもらい、巻物本体に貼り付けてもらいました。

### 効　果

アイスブレイクで行ったゲームでは、お互いをよく知らないため嘘か本当かなかなか見破ることが難しく、そのおかげで場が盛り上がり参加者同士の仲が良くなるきっかけに大変なったのではないかと見てとれました。また、名刺作りでは参加者の方のこだわりで個性豊かな名刺でお互いの連絡先を交換するなど、後の交流にもつながると感じました。メインの巻物作りでは、たくさんの和柄を用意し好みのものを選んでもらったので、参加者のみなさんも大変喜んでくださったようでした。

### 改善点

書道を体験してもらうという企画だったため、室内が大変静かな状態でした。何か、和を連想させ、かつ癒しのような音楽をかけるとさらに雰囲気がよくなつたかもしれません。また、参加者の方が予定より少なかったにも関わらず、途中退出する方もいたためかなり少人数となってしまったのが残念でした。前日にはメールで当日の確認や、募集の時点ですでに退出を遠慮してもらうように呼びかけるということを注意しようということになりました。また、昨年は書道リレーというゲームでアクティブな要素もあったため、今年も静かな書道でも違った楽しみ方も提供すべきだったという反省点が見つかりました。

### 感　想

全体を通して、小規模な企画ではありましたが、後輩の企画に向けた準備もきちんとできており、巻物の質もかなりよかったです。また当初の目的でもある日本文化の体験を真剣に取り組んでもらう環境作りや、その文化体験の中でも日本人学生と留学生の交流を促す名刺作りをするなど体験だけでなく参加者同士の交流も深めることができたのではないかと思います。

**◆企画名** 茶道体験  
**日 程** 平成 26 年 5 月 8 日 (木)  
**場 所** 新関西大学会館南棟 3 階 国際部多目的室  
**参加者数** 24 名 (ピア・サポート 11 名、研修生 2 名、日本人学生 2 名、留学生 9 名)  
**目 的**

- ・留学生に日本文化の 1 つである茶道にふれてもらい日本の文化を学んでもらう。
- ・日本人学生もなかなか体験することのないお抹茶を体験してもらい、日本の文化を再確認してもらう。
- ・一緒にお抹茶体験をしながら留学生と日本人学生の交流を深めてもらう。

#### 内 容

- 14:40～ 会場準備  
15:15～ 集合・受付  
15:30～ あいさつ・自己紹介  
15:40～ 説明・お抹茶体験  
(1回につき 8 名ずつ体験してもらう)  
17:00～ 写真撮影・アンケート記入  
17:15 あいさつ・企画終了



#### 効 果

- ・この企画の目的通り、参加してくださった留学生と日本人学生が茶道体験を通して交流することができた。さらに小澤清風園さんの協力のもと、本格的な茶道体験を行うことができた。結果、参加者の満足度も高かった。
- ・ブリッジメンバーも当日体験でき、そのおかげで参加者に細かいところまで教えたり、アドバイスもすることができた。
- ・台本をしっかりと作成していたので当日参加のメンバーを含めスタッフ全員がスムーズに動けた結果、予定通りスムーズに企画は進み、さらに研修生たちが参加者に対して交流促進や写真撮影などよく動いてくれていた。

#### 改 善 点

- ・LINE への反応の悪さ、ミーティングの集まりの悪さ→直接会える時間をまずきめるべきだった。そうすることで当事者意識が持て LINE の反応もよかつたのかもしれない。改善されない場合は Skype の利用を検討すべきである。
- ・他人に任せすぎていた→気づいたら自分が動く。
- ・企画担当者のモチベーションの低さ→事前準備からもっとしっかりやっておく。
- ・当日メンバーのやる気の低さ→前日までに参加メンバー全員のミーティングを行う。

#### 感 想

- ・このイベントに参加してくださった方全員がこの企画に満足してくださり、楽しんでくれて良かった。
- ・企画を通じ見つかった反省すべき点を改善し、今後の企画、運営に活かしていきたい。



◆企画名 GLOBAL KITCHEN  
日 程 平成 26 年 6 月 5 日 (木)  
場 所 総合学生会館凜風館 2 階 生協食堂  
参加者数 36 名 (ピア・サポート 3 名、研修生 4 名、日本人学生 15 名、留学生 14 名)  
目的

留学生に日本の食文化、和食について知ってもらう。また、日本人学生と一緒に作ることで留学生と日本人学生との交流を促進する。

### 内 容

巻き寿司作り、稲荷寿司作りを通して留学生と日本人学生が交流する。

17:00 受付

17:20～班のメンバーで自己紹介

17:30～調理 (巻き寿司、稲荷寿司)

18:30～試食、栄養士さんに質問タイム、アンケート記入

19:30 終了



### 効 果

- ・巻き寿司や稲荷寿司を作るのが初めてという参加者が多く、貴重な体験を提供できた。
- ・巻き寿司の具材を選ぶことができたので、楽しめた。(参加者の意見)
- ・関西大学生協さんの説明で料理に興味が湧いた。(参加者の意見)

### 改 善 点

- ・声が通らない時があった。→マイクの音量を上げる。
- ・しおりを持って帰らない人が多かった。→厚紙にする、最初に配る。
- ・班のメンバーだけでなく、全員と交流したいという参加者の意見もあった。
- ・書類の提出がうまくいかなかった。→事前に上回生がチェックする。

### 感 想

- ・イベント中は終始、巻き寿司と稲荷寿司作りをしながら参加者のみなさんが楽しそうに喋っていたり作ったり食べたりしている姿が見受けられた。
- ・参加者の声には「たくさん交流ができるで楽しかった」「普段行事がないと関わることができない留学生の方々とすごせて楽しかった」「もっと料理したい」などの声をいただき企画は成功であったと言える。
- ・今回は関西大学生協さんの協力もありこのような素晴らしい企画を行うことができた。料理企画は毎回好評であるので次回また機会があれば協力してもらい素晴らしい企画を作り上げたい。



**◆企画名** グローバル体験 in 淡路島  
**日 程** 平成 26 年 6 月 21 日 (土) ~ 6 月 22 日 (日)  
**場 所** 淡路島および周辺施設  
**参加者数** 39 名 (ピア・サポート 3 名、研修生 3 名、一般学生 33 名)  
**目 的**

淡路島という大自然の中で普段では体験できないアクティビティを通して、留学生と日本人学生の交流を図る。

#### 内 容

- ・淡路花さじきという花畠でのアイスブレイク
- ・淡路島牧場での牛の乳搾り体験とバター作り体験
- ・国立淡路青少年交流の家での野外炊飯活動
- ・カッターライフ体験を予定していたが雨天により中止→卓球大会

#### 効 果

- ・グループ活動を通して連帯感、責任感を得ることができた。
- ・複数のアクティビティの中でいろんな人と交流を促進できた。
- ・自然の中での活動を行ったことがない人がほとんどで自然への良い意識が持てた。
- ・集団行動するのに当たり前のことを確立できた（時間を守る、他人への思いやり）。
- ・国立の宿舎に泊まったので、いろんなルールに従いながら行動できた。

#### 改 善 点

- ・企画を進めることに集中しすぎ、交流促進があまりできていなかった。
- ・予算書のミスがあった。
- ・ほかのメンバーに比べてリーダーの負担が大きすぎた。
- ・情報共有の不足。
- ・KU ブリッジとしての荷物の確認不足。
- ・施設の使い方がよくなかった、周りの人に迷惑をかけることがあった。
- ・夜中に宿舎の部屋の中で喋っていて注意を受けてしまった。
- ・雨天時のことについてもっと考えておくべきだった。



#### 感 想

- ・参加者のほとんどが時間をしっかりと行動してくれ運営がしやすかった。
- ・参加の人達が自分から行動してくれたことで助けられた部分も多かった。
- ・「すごく楽しかった！」という声を聞くことができた。
- ・淡路島の自然は本当に気持ちがよく、学生みんな癒されたと思う。

一泊二日という短い時間の中であったが、さまざまな体験を通して楽しみながら参加者同士が交流を図ることができていた。参加者にとっては大学でのよい思い出になったと思う。また、KU ブリッジメンバーもイベント企画を通して成長できた。

**◆企画名** KUブリッジ夏合宿  
**日 程** 平成 26 年 8 月 3 日 (日) ~ 8 月 4 日 (月)  
**場 所** 関西大学飛鳥文化研究所・植田記念館  
**参加者数** 25 名 (ピア・サポート 12 名、研修生 10 名、学生支援室 TA2 名、職員 1 名)  
**目 的**

1泊2日の合宿を通し、様々なワークや企画立案などを行い全員の士気をあげ今後のKUブリッジの活動に活かしていく。また、KUブリッジメンバー同士での結束もこの2日間で強める。

### 内 容

1日目	2日目
12:00 集合	8:00 朝食
12:30~14:00 ワーク 1	9:00~10:30 ワーク 4
14:10~15:40 ワーク 2	10:40~11:40 ワーク 5
16:00~17:30 ワーク 3	12:00 昼食
18:00 夕食・入浴	13:00~14:30 ワーク 6
20:00 懇親会	15:00 退館
ワーク 1 : 自分たちができること	
ワーク 2 : 提出書類の書き方	
ワーク 3 : プランニング	
ワーク 4 : ポスター作成のコツ	
ワーク 5 : モデルの決定プレゼンテーション	
ワーク 6 : 書類作成	

### 効 果

春に入った新メンバーはイベントをどのように考えるか1から学ぶことができ、さらにその先のポスター作成、書類作成をすることにより、この2日間で企画実施に必要なことを習得することできた。また先輩たちは後輩に対しアドバイスなどを的確にしている様子も見られた。

合宿実施後には新メンバーもブリッジにだいぶ溶け込むことができ秋学期に向けメンバー同士の結束を強めることができた。



### 改 善 点

- 企画を考える際に使用した資料が社会人などが使用する新規事業立案用で専門用語が多く理解できない人が多かったため、今後もっと簡単でわかりやすいものへ変更していく。
- まだ企画考案などに慣れていないため疲れている人が多かつたが、これからミーティングなどでどんどん頭を動かす習慣などをつけて慣れるようにする。そして意見がどんどん飛び交う素晴らしいチームにしていく。

### 感 想

1泊2日を通して1から企画を考えていった。数人ごとに分かれてグループを作り、留学生の立場に立ったアイデアを提案することができた。その結果、メンバーのモチベーションも上がり、秋学期に向けてKUブリッジの活動活性化への助けになった合宿だった。

**◆企画名** 平成26年度秋学期交換留学生 キャンパスツアー  
**日 程** 平成26年9月10日(水)  
**場 所** 関西大学 千里山キャンパス  
**参加者数** 70名(ピア・サポート6名、研修生4名、留学生60名)  
**目 的**

秋学期から関西大学で学ぶ交換留学生を対象に、キャンパスを案内することで少しでも早く大学に慣れていただき、学生生活を円滑に送れるようにする。同時にブリッジの活動も紹介して今後の企画への参加を呼びかける。

### 内 容

この秋から関西大学で学ぶ交換留学生の方と一緒にキャンパスを歩き、使用頻度が比較的に高いと思われる施設について、説明を行った。KUブリッジのメンバーも秋からやつて来た交換留学生との交流を深めながら、キャンパス内を一時間ほどかけて一周した。

#### タイムテーブル

- 15:00～15:15 キャンパスツアーの説明
- 15:15～15:45 キャンパスツアー
- 15:45～16:00 写真撮影、KUブリッジ告知

#### 行程

新関西大学会館北棟1階→保健管理センター→図書館→岩崎記念館→凜風館→ITセンター→教務センター→100周年記念会館→正門前

### 効 果

- ・交換留学生が使用することになる、施設、教室等を案内し、しっかりと理解してもらうことができた。
- ・KUブリッジメンバーと留学生の交流がきちんとできていたため今後のイベントの告知に役立った。
- ・時間通りキャンパスツアーを終え最後の時間でKUブリッジの活動及びKUブリッジをPRできたので秋に来られた交換留学生にしっかりと認知してもらえた。

### 改 善 点

- ・開始時間を早める。
- ・理解できたかどうかの確認をきちんとする。
- ・説明時に注目を集められるものを用意する。→施設の名前のプラカードなど

### 感 想

秋学期に来られた留学生60名は直前に日本語テストがあったため全体的に疲れていた表情であったが、キャンパスツアー中にはしっかりとKUブリッジメンバーの説明を聞いている姿が見られた。今回は英語でのキャンパスツアーと日本語でのキャンパスツアー2種類用意したのでまだ日本語に自信がない方でもしっかりと説明を聞くことができたと思う。キャンパスツアー中はKUブリッジメンバーと交流ができたことで、しっかりとKUブリッジの名前を周知でき、今後のKUブリッジの活動へつながる良いイベントとなつた。



<b>◆企画名</b>	KU バザー
<b>日 程</b>	平成 26 年 10 月 1 日 (水) ~ 10 月 2 日 (木)
<b>場 所</b>	新関西大学会館南棟 3 階 国際部交流室
<b>参加者数</b>	70 名 (ピア・サポート 8 名、研修生 3 名、留学生 59 名)
<b>目 的</b>	

本学学生に、家に眠っている食器や衣類などといった日用雑貨（使用・未使用は問わない）を中心とする物品を提供してもらう。それを KU バザーの場で本学交換留学生・正規留学生に無償提供することで、留学生の生活における利便性向上を図る。

## 内 容

学生から寄付してもらった物品を留学生の生活に役立ててもらうため無料で提供した。

### 【当日の流れ】

11:00 会場設営（机の配置・有鄰館ピア 4 からの物品の運搬・陳列）



12:00 企画開始（受付・バザーに参加してくれた留学生に名簿への記入を促す・どの種類の告知を見て、企画に興味を持ったのかを尋ね、表に記入してもらった。）

\* 巡回：会場で留学生に声をかけ、物品の紹介をした。物品の持ち帰りは一人につき原則 3 点までと伝えた。（参加者が少ない場合などはこの通りではない）

15:00 企画終了 → 後片付け（在庫管理表に残った物品と無くなかった物品を記入・残った物品の回収 → 有鄰館ピア 4 へ 会場をもとの状態に復元した。）

16:00 完全撤収

## 効 果

- ・来日したばかりで日用品、洋服、食器等が少ない学生に対して無料配布することができ、多くの留学生から満足を得ることができた。
- ・キャンパスツアー、バザーと連続してイベントをしたことで KU ブリッジがどのような団体か再認識され、さらに知名度が上がった。

## 改 善 点

- ・昼休み以外の時間に人は全く来なかつた。今後は開催時間を短縮する。
- ・いきあたりばったりの対応ではなく、KU ブリッジメンバーの役割分担を明確にする。
- ・品質が低いものがあったので、きちんと仕分けをして出した方が良かった。

## 感 想

この秋、新しく関西大学へやってきた留学生の皆さんに、関西大学の学生、職員、教員の皆さんより寄付していただいた物品を留学生へ無償で提供しました。多くの留学生の皆さんに来ていただき、私たち KU ブリッジも物品を通して関西大学の皆さんと留学生の皆さんを架け橋としてつなぐことができたのではないかなと思っています。これからも KU ブリッジでは、留学生の皆さんの手助けになるような活動と、日本人学生と留学生が交流できるような場を提供していきたいと思いました。

**◆企画名** 弓道体験  
**日 程** 平成 26 年 11 月 29 日 (土)  
**場 所** 総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム、弓道場  
**参加者数** 25 名 (ピア・サポート 7 名、研修生 3 名、留学生 15 名)  
**目 的**

留学生に弓道体験の場を提供し、日本文化を体験してもらう。

#### 内 容

##### 【当日のタイムスケジュール】

- 11:00 凜風館 4 階のミーティングルームにて  
パワーポイントを用いて弓道の歴史や  
道具の名前、やり方、注意等を伝える。  
12:00 凜風館の 2 階に移動し昼食をとる。  
13:00 弓道場で弓道部員による模範演技鑑賞  
のち個人指導、チーム戦の流れで行う。  
チームに景品をプレゼントする。全員  
での写真撮影後、挨拶を行う。  
15:00 解散



#### 効 果

- 参加者に弓道体験を通して楽しんでいただけた。
- ブリッジメンバーも実際に体験することができ、そのおかげで参加者と交流することができ楽しむことができた。
- 台本をしっかりと作成し当日のシミュレーションを何度もしたため、当日は余裕をもって予定通りスムーズに動くことができた。
- 授業訪問で弓道体験を告知したことでき多くの参加者に来ていただけた。
- 研修生が自分たちで何ができるのかしっかり考えて、イベント当日は交流促進や写真撮影などよく動いてくれた。

#### 改 善 点

- 景品だけでなく、弓道部へのお礼を考えて参加費を使えばよかった。
- 昼食の食べる場所をもう少し考えるべきだった。
- 最終的な人数を弓道部に報告するべきだった。
- 雨天決行をポスターに書いておけばよかった。(天気について考えることが必要)
- 国際部の行事日程表を見せてもらう。

#### 感 想

- 参加してくださった方全員がこの企画をとても満足してくださり、楽しんでくれて良かった。
- この企画に参加してくださった留学生とブリッジメンバーが弓道体験を通して交流することができた。
- 企画を通じ見つかった反省すべき点を改善し、今後の企画、運営に活かしていきたい。



**◆企画名** 4年生による！留学生向け就職活動報告会  
**日 程** 平成26年12月1日（月）、12月15日（月）  
**場 所** 総合学生会館凜風館4階 ミーティングルーム  
**参加者数** 16名（ピア・サポート8名、研修生1名、留学生7名）  
**目 的**

- ・学生目線で異国の方で就職活動をする留学生の力になる。
- ・就職活動体験者ならではの目線で就職活動を控えた留学生の力になる。
- ・イベントを通して就職活動を共にする仲間を作ってもらい、共に就職活動を乗り越えてもらえるようにフォローする。

#### 内 容

16:30	集合、受付開始
16:40～18:30	ゲストの留学生に体験談を語って頂く。参加者の質問に答えて頂く。 ゲスト：12月1日（月） ハンさん、陸さん 12月15日（月） 李さん

#### 効 果

- ・参加者に就職活動を身近に感じてもらえた。
- ・実際の体験談を多く聞くことができた。
- ・就職活動を開始する前に、日本の就職活動について知ってもらうことができた。
- ・実際に使用したエントリーシートや、ノート、本などを見せることで、より理解を深められることができた。
- ・ゲストの留学生に対して多く質問できる機会を提供することができた。



#### 改 善 点

- ・はじめからキャリアセンターと連携するべきだった。  
→キャリアセンターと連携することを最初は知らなかったので、しっかり情報収集する。
- ・キャリアセンターとのミーティング回数が少なかったので、少なくとも3回はミーティングをするべきだった。
- ・開始時間を守れなかった。  
→集合時間を早めにするべきだった。
- ・ゲストの留学生をもう少し呼ぶべきであった。

#### 感 想

- ・参加してくださった方全員が熱心に話を聞いたり質問したりする姿を見ることができ、イベントを行った意義を感じた。
- ・この企画の目的通り、参加してくださった留学生に日本の就職活動について知ってもらうことができた。
- ・企画を通じ見つかった反省すべき点を改善し、来年度以降も継続していくイベントにしていきたい。



<b>◆企画名</b>	Global Talk
<b>日 程</b>	平成 26 年 12 月 8 日 (月)
<b>場 所</b>	新関西大学会館南棟 3 階 国際部交流室
<b>参加者数</b>	16 名 (ピア・サポータ 3 名、研修生 1 名、日本人学生 4 名、留学生 8 名)
<b>目 的</b>	

国、地域、文化などの違いによる意見や問題に対する考え方の違い、また価値観の違いを国籍・学年の情報を伏せ、相手の文化の固定概念を無くして意見交換をすることでより深い異文化理解と相互の交流を行う。また、あまり話す機会のないテーマを考えることで国際関係に関する問題について意識を持ってもらう。メンターとしてお越し頂く関西大学国際部 HOME 千里交流拠点留学生コーディネーター三好氏にアドバイスをもらいディスカッションのスキルアップを図る。

## 内 容

### 【当日のタイムスケジュール】

- 16:00 企画担当者が国際部交流室に集合し会場設営。
- 16:20 受付開始  
受付では①企画趣旨②ルール（国籍、学年を伏せる）の 2 点を伝える。
- 16:35 アイスブレイク テーマ「犬と猫どちらが好き？」について意見交換。
- 16:50 国際関係に関するテーマについて意見交換。  
テーマ 1：ipad などの電子機器を授業に取り入れるのに賛成か反対か  
テーマ 2：環境問題に対して自分たちができること  
①1 つのテーマごとにそれぞれ 15 分間ディスカッションをする。  
②各グループ 2 分で話した内容を発表する。  
③三好氏からのフィードバック。  
①～③をテーマごとに繰り返す。
- 18:00 終了。
- 18:20 国際部交流室の片付け、備品の返却をして撤収。

## 効 果

今回のイベントを通して国際問題に関する視野を広めることができた。あまり話す機会のないテーマを考えて、違う国籍の人たちとの意見交換によって新たな発見があった。

## 改 善 点

- ①場所が少しうるさかったので、多目的室にすればよかったです。
- ②電話対応などの役割分担を明確にすること。

## 感 想

今まで KU ブリッジではこのようなディスカッション企画をやってこなかったが参加者から「また参加したい」「社会的な問題について話すことができた」と意見があり、来年度は定期的に開催するイベントとしていきたい。

普段のイベントは日本文化等を通じて交流するものが多かったが今回は考えて交流するイベントであった。今後はこのような考えて交流するイベントを増やしていきたい。



**◆企画名** ハンドメイド教室  
**日 程** 平成 26 年 12 月 17 日 (水)  
**場 所** 新関西大学会館南棟 3 階 国際部交流室  
**参加者数** 15 名 (ピア・サポート 4 名、研修生 2 名、留学生 6 名、日本人学生 3 名)  
**目 的**

留学生に日本で話題となっているハンドメイド (プラバンアクセサリー作り) を体験してもらう。またそれを通じて、日本人学生との交流を図る。

### 内 容

「開催当日のタイムスケジュール」  
15:00 会場設営 (机の配置、物品の運搬、材料の買い出し)  
16:10 受付開始 (参加者に名札の記入を促す)  
16:30 企画開始 (2つの班に分かれた後、説明をする。その後プラ板づくりを 2 回行ってから全体で記念撮影をし、挨拶をする)  
18:00 企画終了、後片付け、フィードバック



### 効 果

- ・和やかな雰囲気で参加者の人が楽しんでくれた。
- ・グループで座ってもらうことにより、参加者同士が自然と交流していた。
- ・確認メールをこまめに送ったことで、応募者の参加率が高かった。
- ・応募方法をネット (QR コード) にしたことで、応募が簡単になった。
- ・ブリッジメンバーも体験でき、参加者と一緒に楽しめた。

### 改 善 点

- ・参加者へ送信する前に、メールの文を確認するようにする。
- ・二回目の作成時間があまりなかったので、参加者には初めにタイムスケジュールを伝えておくべきだった。
- ・参加費が予定よりも安く済んだので、最初から安くしておくともう少し人数が増えたのではないか。
- ・ブリッジメンバー同士での報告、連絡、相談をもう少し活発にすべきだった。

### 感 想

- ・最後に行ったアンケート結果によると、参加してくださった方全員が、この企画を「とても楽しかった」と答えてくださり、満足してくださったので良かった。
- ・「ハンドメイド教室」の目的にあるように、参加してくださった留学生と日本人学生、そしてブリッジメンバーがこの企画を通して交流することができた。
- ・企画を通じ見つかった反省すべき点を改善し、今後の企画、運営に活かしていきたい。



## 2.2.3 ピア・スポーツコミュニティ（PSC）

### ■ ピア・コミュニティの趣旨

テーマは、関大生の「絆」。“スポーツ”をキーワードにして、関西大学のすべての仲間と、身体を動かしながら人と人との輪を広げ、学生交流を促進することを目的に活動している。そのため、現役の学生や校友の方への応援活動を行うことで、関西大学の学生としての帰属意識や母校愛を高めたり、地域の方との交流を促進することで、人との繋がりを感じ、より充実した学生生活を送れるようなサポート活動を行っている。

### ■ 所属人数

5名（男1名、女4名）

\*1年次生0名、2年次生0名、3年次生3名、4年次生2名（平成27年3月末現在）

### ■ ミーティングの概要

不定期

### ■ ピア・コミュニティの現状

現在は、メンバーそれぞれが多忙にしており、活動の継続が出来ていない状況である。しかしながら、オリンピックやワールドカップを見ていても分かるように、スポーツは多くの人を感動させ、勇気づける力がある。今後もスポーツを通じて関大生の「絆」を深めていけるような活動を行っていきたい。

### ■ ピア・コミュニティの課題

今後、活動を再開するためには、メンバーの募集が最優先である。正課体育の履修者数や体育系課外活動団体への参加率の増加を見ても分かるように、スポーツに興味を持つ学生が多い。それらの学生に、スポーツ行事を行う運営側の楽しさについても感じもらうことで、メンバーの増加につなげていきたい。まずは、他のコミュニティメンバーの方々の協力を得て、少しずつでも行事を実施していきたい。

## 2.2.4 KUサポートプランナー（KUSP）

### ■ ピア・コミュニティの趣旨

KUサポートプランナーは「素晴らしい活動をしているにも関わらず、発表する場所がない」、「多くの関西大学の学生と一緒に活動したい」と思っている関西大学の学生をイベントを通じてサポートするコミュニティ。関西大学生の団体及び個人のアイデア企画を募集し、共同で立案から実施までを行うこと、また学生の視点を生かした関西大学生のニーズに沿うようなイベントの企画・実施を行う。学年や学部を超えて、関西大学生の繋がりを広げ、対人関係能力や自己表現能力などの社会で生きる力を身に付けていくことを目的に、学生生活の活性化を促進することを担っている。

### ■ 所属人数

17名（男8名、女9名）

\*1年次生3名、2年次生5名、3年次生6名、4年次生3名（平成27年3月末現在）

### ■ ミーティングの概要

定例会議 週1回（現在は火曜18:10～20:00）

### ■ ピア・コミュニティ内の連携

連絡や情報の共有については、LINE及びメーリングリスト（ML）を活用することで、会議の遅刻・欠席の連絡は問題なく行われていた。改善すべき点としては、企画準備の際に概要が決定するのが遅く、募集期間が短くなる、企画のクオリティが下がるといったことが挙げられる。今後は計画的に企画を行い各々が自分の役割を果たし、事前準備を抜かりなく行うといったことが必要である。

### ■ ピア・コミュニティ間の連携について

他コミュニティの方に企画に参加してもらうことは多くあった。しかし、ピアエリア等で他コミュニティのメンバーと交流するメンバーがいる一方で、普段はピアエリアにいないメンバーについては他コミュニティのメンバーと交流の無いメンバーもいた。個々のメンバーの交流を増やすことで、コミュニティ間の連携促進につなげていきたい。なお、現在はメーリングリストを活用し、他コミュニティとの情報共有を行っている。

### ■ 教職員との連携について

学生生活支援グループが支援母体である。密なコミュニケーションが取れていた。企画の募集について多くの支援を得られたことで、一般学生の目に多く触れることができたため、企画に多くの方に参加してもらうことができた。また、企画の計画時やKUSPの運営についてもアドバイスをいただいたことで広い視野で考え、事前にリスクを減らす対策を行うことができた。

### ■ 昨年度の課題の改善点

企画準備の際に事業計画書の提出に時間がかかり、募集期間が短くなり、その結果、参加人数が少なくなってしまうということが課題であった。今年度、担当を二人制にするという措置を取ったが、スケジュール調整に時間がかかり、改善出来なかった。来年度は、担当決定をする前にスケジュール調整をした上で、事業計画書の提出に締切を設け、また余裕のあるスケジュールを組むということを対策として取り組みたい。

<b>◆企画名</b>	<u>「STEP！」～勉強の仕方を聞こう～</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 4 月 9 日 (水) ~4 月 16 日 (水) ※土曜・日曜を除く</u>
<b>場 所</b>	<u>総合学生会館凜風館 1 階 ピアエリア</u>
<b>参加者数</b>	<u>29 名 (ピア・サポート 12 名、一般学生 17 名)</u>
<b>目 的</b>	

入学したばかりで大学での学びについて知る機会、聞く機会の少ない学生を主な企画対象とし、先輩目線で大学での勉強への取り組み方を伝える事で学生の学びに対する意欲向上に繋げることを目的として実施した。

また、この企画を通じて学生の学部・学年を越えた新たなつながりが生まれるきっかけとなる場を提供することも狙いであった。

### 内 容

ピア・サポートがピアエリアで待機し、一般学生と昼食をとりつつ、勉強方法やテスト対策などの経験を話す。

※会話の内容はピア・サポートの個人的な意見で今後の参考にしてもらうものであり、仮にその意見によって不利益を被ったとしても関知しない旨を伝える。

### 効 果

システム理工学部:1 名、政策創造学部:1 名、環境都市工学部:3 名、文学部:4 名、法学部:6 名、商学部:1 名、社会学部:1 名が参加した。

主な質問内容は、以下の通り。

- ①テスト勉強の開始時期について
- ②論述の試験の勉強方法について
- ③日々の自宅学習について
- ④授業の内容について
- ⑤部活・サークルについて
- ⑥資格取得について
- ⑦留学について

効果を客観的な指標で測ることは出来ないが、参加者の不安解消という観点でみれば一定程度の効果があったのではないかと考えている。

### 改 善 点

新入生が入学してまだあまり日が経っておらず、サークルの勧誘の時期とかぶった事もあり、企画実施をもう少し後にした方がより需要が望めたかもしれない。

企画実施場所がわかりにくい為、ピアエリア内にも実施している事をわかりやすくする為のポスターなどを貼っておくべきであった。

### 感 想

多くの学生に参加いただき、企画者側にとっても大変有意義な機会であった。今後も、本企画を継続して実施していきたい。

<b>◆企画名</b>	<u>「友だちを手料理でおもてなし」</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 5 月 8 日 (木)</u>
<b>場 所</b>	<u>総合学生会館凜風館 2 階 生協食堂</u>
<b>参加者数</b>	<u>24 名 (ピア・サポート 9 名、一般学生 15 名)</u>
<b>目 的</b>	

本企画は主に下宿生を対象とした企画であり、比較的入手しやすい食材を使用して料理を作り、その調理方法を体得してもらうことで参加者の料理のスキルアップ、及び今後の下宿生活に活かしてもらうことを目的に実施した。また他学部や他学年の学生と共同で料理を作ることを通して交流の機会を提供し、関西大学に馴染むこと、関西大学の学生としての帰属意識を高めることを狙いとした。

### 内 容

6 回目となる関大生協との料理企画。主に下宿生を対象とし、家に友だちを招いた時の“ちょっとオシャレな”もてなし料理としてニヨッキとシーザーサラダの調理方法を体得することを目的に企画した。

### 効 果

さまざまな学部、学年、さらには留学生の方が参加していたが、終始和気あいあいとした雰囲気で進んでいた。初対面の学生同士で話が盛り上がり、楽しそうに料理を作っている姿が印象的だった。関大生同士の良い交流の機会となったと思う。

質疑応答も非常に活発に行われ、予定時間を大幅にオーバーするほどだった。下宿生からは、健康に気を使った食事や、簡単に作ることのできる料理、作り置きのできるものなど、様々な質問が出たが、すべてに食堂の管理栄養士の方が丁寧に回答してくださいました。今後の下宿生活におけるヒントを得ることができたのではないだろうか。

### 改 善 点

- ・名札の準備が必要だった（参加者と KUSP メンバーの区別がつきにくかった）
- ・当日の支払いの対応が不十分であった
- ・時期がよくなかった（昨年度のように、4 月中に開催した方がよかった）
- ・食べる時間、質問の時間が押してしまった（質問の時間を示すべきだった）
- ・班分けの時間などが多く、突然始まった感があつてよくなかった
- ・カメラ、ビデオ担当の調理を他の KUSP メンバーが肩代わりするべきだった
- ・しおりを持ち帰ってもらえなかった（班ごとにラミネート加工したものを準備した方がよい）
- ・担当者を細分化し過ぎたため非効率となつた（事業計画担当、涉外担当など）
- ・後始末が徹底されていなかった（関大生協任せにしきっていた）
- ・お礼がきちんとできなかつた（洗い物等、関大生協に対して）

### 感 想

- ・班の人数がちょうどよかつた
- ・進行状況がよかつた
- ・去年の待ち時間の改善ができてよかつた
- ・幅広い参加者に参加してもらえてよかつた

●アンケート結果から、料理企画へのニーズが高いことが読み取れるため、関大生協の協力による料理企画は恒例行事としてこれからも継続して実施していきたい。昨年度の反省を踏まえた企画にすることを目標に計画したが、今年度はこれまでにない反省点（当日スケジュールや関大生協との連携など）が出てきた。計画段階の役割分担も含め、来年度の企画に活かしたい。

<b>◆企画名</b>	<u>～関大卒女子起業家 presents～春から変わりたいあなたへ</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 6 月 6 日 (金)</u>
<b>場 所</b>	<u>総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム</u>
<b>参加者数</b>	<u>59 名 (ピア・サポート 6 名、研修生 4 名、一般学生 49 名)</u>
<b>目 的</b>	

本企画は、自らの学生生活の方向性を深く考えたい学生を対象とした企画である。  
 関大 OG を講師として招き、以下の事項を目的として行った。

①社会人目線、起業家目線で、学生が学生生活の間にすべきことを聞ける場を提供することで、将来のビジョンを明確にする機会としてもらう。

②関大卒の社会人と接する機会を創出することで、関大の良さを再確認してもらう。

### 内 容

講師の本学在学時に起業された経験と、その基礎となる経営学の考え方を基に、大学生のキャリアデザインについて考える講演である。

具体的には、5 年後の自分を想像して、5 年後の自分は今行おうとしているその選択を本当にするのか検討するといったものや、自分がやりたいことに「なんで」と繰り返し自問自答するといった方法で、自分が何をしたいのか、自分が何をすべきなのかを考えるといったものである。

### 効 果

企画実施後のアンケートによる調査で集計した 40 の回答のうち、「今回の講座はいかがでしたか?」の問い合わせに対し「とてもよい」32 名、「よい」6 名の回答を得られた。

また、「今回の講座はいかがでしたか?」で答えた理由では企画に対して「私が知りたかったことを学べることができた。」「起業家の生の声を聞く事はめったにないのでよかったです。」などの感想を得られた。

### 改 善 点 (反省)

- ・募集期間を余裕を持ってとれたため、ますますの参加者数を得た。
- ・普段司会や挨拶を行っていないメンバーにその役割を与えたため、良い経験を積めた。
- ・アンケートから満足度の高い結果が得られた。
- ・予想外に質問が多くなったために、予定時間をオーバーしてしまった。
- ・リスクとなりそうなものにはほとんど想定して対応していたため、時間のオーバー以外は特に大きな問題はなかった。

### 感 想

現在の就職活動状況で自分の学生生活に不安を持つ学生が多いであろうことを念頭に、社会人と接する機会を作ることを考え企画したが、講師に関大卒のまだ若い方をお招きしたことで、学生にとっても、行きやすい企画を行えたと思う。まずはの参加者を得たことからも、このような社会人と接する機会を創出することは関大生にニーズがあると判断できるため、今後もこのような企画を行うことも検討していきたい。

<b>◆企画名</b>	<u>音楽とラジオの未来へ向けて</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 6 月 12 日 (木)</u>
<b>場 所</b>	<u>第 1 学舎千里ホール</u>
<b>参加者数</b>	<u>141 名 (ピア・サポート 7 名、研修生 4 名、一般学生 130 名)</u>
<b>目 的</b>	

- ・ラジオの可能性について学び、その面白さや魅力をそれぞれが見出すことによって、本学学生の芸術や文化の視野を広げる。
- ・夢や想いを実現させるために、学生生活をどのように過ごせばよいのか知ってもらう。

#### 内 容

インターネットとの融合によって再価値化されつつあるラジオが、今日の音楽文化にどのような影響を与えるのかに焦点を当て、また音楽産業の創造現場で、想いを形にしてきた方々のお話を聞く。

#### 効 果

企画実施後のアンケートによる調査で集計した回答のうち、「今回の講座はいかがでしたか?」の問い合わせに対し「とてもよい」の回答が 90 パーセントを占める結果となった。また、自由記述では企画に対して「これから自分の進むべき道を見つけられた気がした。」「自分の興味のあることに接する講演会が今まで無かったので、このような参加しやすい機会を設けてもらえありがたかった。」などの感想が得られた。

#### 改 善 点 (反省)

- ・金銭面については早期の段階で詳細まで話し合っておく。
- ・データ共有の場を一つにする。
- ・書類を更新した場合には、古い書類を消去し、常に最新のものにしておく。
- ・事業報告書は早めに提出する。
- ・参加者との質疑応答の時間を長く取る。

#### 感 想

参加者の反応から、普段の講義では聞けないような学びの場を提供する、という目的が達成できたと感じた。一方で、参加者の所属学部に偏りが見られた。このことから、より広範囲の学生に興味を持ってもらう工夫が必要であったと考える。また、ゲストの方と学生が触れ合う機会(質疑応答など)を企画時間内により多く設けるべきだった。今後も既存の枠に過度に捉われることなく、学生のニーズに合った取り組みを実現していきたい。

**◆企画名** キャンパスツアーへ行こう@同志社大学  
**日 程** 平成 26 年 6 月 21 日 (土)  
**場 所** 同志社大学今出川校地  
**参加者数** 4 名 (ピア・サポート 3 名、研修生 1 名)  
**目 的**

本企画は、他大学のキャンパスツアーに参加し、一般学生や一般人に大学の良さをどのように伝えているのかを知ることで、関西大学の魅力をどのように伝えていかなければ学び、今後の企画に活かすことを目的とする。

#### 内 容

8:50 関西大学千里山キャンパス集合  
9:11 関大前駅発  
10:15 今出川駅着  
10:20 今出川キャンパス正門集合  
10:30 キャンパスツアー開始  
12:00 キャンパスツアー終了、各自解散

#### 効 果

今出川キャンパスでは 5 棟ある国の重要文化財（クラーク記念館、同志社礼拝堂、彰榮館、有終館、ハリス理化学館）を中心に、建物の由来やエピソードなどを案内していただいた。

日頃行く機会のない他大学で参加者の目線でキャンパスツアーに参加することができ、参加者がキャンパスツアーで何を見たいか何を知りたいか考えるとともに、今後の企画をどのように実施していくかわかった。(企画参加者への対応、時間、場所の設定など)

#### 改 善 点

特になし

#### 感 想

見学中は他大学にはない本学の魅力はどこであろうかと考えながら巡った。  
同志社大学は、レンガ造りの重要文化財が並ぶ京都で有数の歴史的景観を形成している今出川キャンパスにおいて、139 年の同志社の歴史と伝統を現代に伝え続けるレンガ造りの学舎の魅力を活かしたツアーを行っていた。

関西大学には重要文化財の建物はないため、同様のキャンパスツアーは行えないと判断した。よって、今後は建物を売りにしたツアーでは無く、ブランドスローガンにもある様に「人」を中心としたツアーを行うことを検討していく。

◆企画名 「学びを聞く」  
日 程 平成 26 年 7 月 7 日 (月) ~ 7 月 11 日 (金)  
場 所 総合学生会館凜風館 1 階 ピアエリア  
参加者数 9 名 (ピア・サポート 7 名、研修生 2 名)  
目的

大学での学びについて知る機会、聞く機会の少ない学生を主な企画対象とし、先輩目線で大学での勉強への取り組み方を伝える事で学生の学びに対する意欲向上に繋げることを目的として実施した。

#### 内 容

ピア・サポートがピアエリアで待機し、一般学生と昼食をとりつつ、勉強方法やテスト対策などの経験を話す。  
※会話の内容はピア・サポートの個人的な意見で今後の参考にしてもらうものであり、仮にその意見によって不利益を被ったとしても関知しない旨を伝える。

#### 効 果

参加者なし

#### 改 善 点

広報活動をもっと積極的に行う必要があった。また、何曜日に何学部のメンバーが待機しているかなど、詳細をポスターに記しておく必要があった。

#### 感 想

過去 3 回にわたり実施してきた企画であったが、参加者がいなかったのは初めての事であった。参加者が集まらなかった原因としては、周知期間が短い、広報活動の不徹底、活動の様子が見えにくいなどの理由が考えられる。過去の状況や学生生活実態調査報告書等の結果によれば、学生のニーズが一定程度あると考えられることから、今回の企画が不調に終わった原因を検討し、今後の活動へ活かしていきたい。

<b>◆企画名</b>	<u>BLACK MUSIC CONCERT (ideaを形に)</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 12 月 10 日 (水)</u>
<b>場 所</b>	<u>関西大学 KU シンフォニーホール</u>
<b>参加者数</b>	<u>118 名 (ピア・サポート 5 名、研修生 1 名、出演学生 37 名、一般学生 75 名)</u>
<b>目 的</b>	

本企画は、「idea を形に」の一環として、強いビート感・グルーヴ感を特徴とするアメリカの黒人発祥の音楽である「ブラック・ミュージック」の魅力を伝えるためにコンサートを開催したいという関大生に発表の場を設けるために企画した。

目的の詳細は以下の通り。

- ①主催者の自己実現のサポート
- ②企画を実現する構想の過程で「発想力」「問題解決能力」「人と関わる力」を育むこと
- ③関西大学の中でイベントを行い成功させ、関西大学への帰属意識を高めること

#### 内 容

A Cappella、JAZZ、FUNK、R&B、GOSPEL の 4 つのジャンル別に、それぞれ 1~3 曲のステージ演奏で、「ブラック・ミュージック」の魅力を伝えるコンサートを行った。

#### 効 果

企画者が「イベントを成功させることで達成感を味わい、自分に対する自信・関西大学への帰属意識を深める」という狙い通り、充実感を得られた企画になった。併せて、他のサークルとコラボレーションしたステージ内容により、出演者同士の新たな交流の機会を創出することができた。また、参加者にとっては「ブラック・ミュージック」という普段授業では学ぶことのできない内容について知識を深め、文化的な視野を広げることに繋がった。

#### 改 善 点 (反省)

- ・名札の準備が必要だった（参加者と出演者の区別がつきにくかった）。
- ・広報期間にもう少しゆとりを持ちたかった（広報方法の見直しが必要）。
- ・アンケート実施の検討もすべきだった。

#### 感 想

KUSP は KU シンフォニーホールを使用することができ、また KU シンフォニーホールを使用する企画の実現をサポートできる団体であることから、それを活かした企画を今後さらに検討していきたい。

2012 年度以来の「idea を形に」企画の実施であったため、戸惑う点も多かったが、企画立案者とともに実施まで活動する中でコミュニケーションに関する知識と技能を高めることができた。

関大生の中には、他にも多くのニーズが存在すると考えられることから、今後も様々な分野での企画の実現を目指していきたい。

<b>◆企画名</b>	<u>ワコールの下着セミナーでキレイ度アップ～カラダの加齢変化や正しい下着の知識で「今キレイ、ずっとキレイ」～</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 12 月 19 日（金）</u>
<b>場 所</b>	<u>第 1 学舎 A201</u>
<b>参加者数</b>	<u>40 名（ピア・サポート 6 名、一般学生 34 名）</u>
<b>目 的</b>	

ほぼ毎日向き合っている自分のカラダ。私たちは自分のカラダを知っているようで、実は知らないことが多いのではないかと思われる。下着の知識や女性のカラダの変化を正しく知ることで、女性としての身だしなみの向上、自身のカラダへの理解を深めてもらうことを目的とする。

### 内 容

講師として、株式会社ワコールの総合企画室広報・宣伝部、ボディコンサルタントの弓戸貴子氏が登壇。弓戸氏は、「ワコールの下着セミナーでキレイ度アップ～カラダの加齢変化や正しい下着の知識で『今キレイ、ずっとキレイ』～」をテーマに、加齢による女性の体の変化や、いつまでも美しい体型を保つための姿勢、下着を選ぶ時・着用する時のポイントなどを図や映像で分かりやすく説明した。また、ワコール人間科学研究所における研究や、ピンクリボン活動をはじめ、ワコールが行う社会貢献活動も紹介した。

### 効 果

アンケートの結果 8割以上が「とても参考になった」と答えている。残りの学生も、「参考になった」と回答しており、「参考にならなかった」という声は一つも上がらなかった。「ワンピースのときに、擦れるなあと思っていたのですが、それを防ぐものがあるなんて！」という驚きの声や、「普段聞く機会がない話なので面白かった」という声が上がった。授業では聞けない学びを提供するという KU サポートプランナーの目的を達成していると感じた。バストを計測してもらった参加者からは「今まで自分がつけていたブラが合っていなかつたこともわかりました。正しいサイズも教えていただいたので、自分に合ったサイズをつけて、きれいに見せます！自分のカップが予想より 2 カップ上だったこと、衝撃的でした。大学内でこのような講演を聞けるのは、たいへん嬉しく思いました。この機会に参加してよかったです」との感想を頂いた。セミナーに参加した学生は、自身の体や健康について考える機会となった。そして、自身の身体について真剣に考え、大事にしているという意識付けになった。

### 改 善 点

- ・ポスターをピアエリアに忘れたため、備品チェックを入念に行う必要がある。
- ・時間が大幅にオーバーしたため、余裕を持ったタイムスケジュールを組むほうがよい。
- ・会場の変更により、プロジェクターの動作の確認をしていなかつたことからピアエリアからプロジェクターを持っていくことになった。

### 感 想

- ・参加者の反応から、普段の講義では聞けないような学びの場を提供する、という目的を達成できた。
- ・本企画が大学 HP に掲載され、KUSP の知名度アップに繋がった。
- ・KUSP の企画のリピーターが見受けられた。参加者が「もう一度参加したい！」「KUSP の企画なら役立つに違いない」と思えるような企画を実施していきたい。

<b>◆企画名</b>	<u>京都伏見フィールドワークツアーア</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 27 年 1 月 30 日 (金)</u>
<b>場 所</b>	<u>月桂冠大倉記念館、伏見稻荷大社、駿河屋伏見稻荷店</u>
<b>参加者数</b>	<u>25 名 (ピア・サポート 5 名、研修生 2 名、一般学生 18 名)</u>
<b>目 的</b>	

本企画は、フィールドワークを通して交流の場を提供すること、日本の伝統文化に触れる機会を関大生に提供することの二点を目的として、京都・伏見周辺を散策するツアーを実施した。またこのツアーを通して、学生間のより活発な交流活動を目指すとともに、座学ではなく自身の五感で文化体験することで、京都・伏見の歴史、日本文化の奥深さ、日本の「ものづくり」について知識を深めることに繋げた。

### 内 容

12 : 30	千里山キャンパス総合図書館前	集合
13 : 00~14 : 00	出発、移動	
14 : 00~14 : 40	月桂冠大倉記念館見学、試飲	
14 : 40~15 : 10	移動	
15 : 10~16 : 00	駿河屋伏見稻荷店にて和菓子作り体験	和菓子作り定員の関係で
16 : 00~17 : 00	伏見稻荷（散策）	2 グループ交代で進行
17 : 00~18 : 00	移動（千里山キャンパス総合図書館前	解散)

### 効 果

- ・参加者感想アンケートより「とても楽しかった。」「初めての方と交流できて良かった。」「これといって関西観光をしたことがなかったのでとてもいい機会だった。」という回答を得ることができた。
- ・KUSP メンバーが積極的に参加者とコミュニケーションを取っていた。
- ・ニーズに沿った企画ができた（テスト後という日程、京都という場所設定）。
- ・和菓子の手作り体験の選択がよかったです（情報収集がうまくできていた）。

### 改 善 点

- ・月桂冠のガイドさんに見学時間を伝えていなかったため、時間が押してしまった。
- ・見学各所の予約を KUSP がするのか旅行会社に手配していただくのかどちらかに統一すべきだった。
- ・キャンセルが出た際の対応が不十分だった（友達との参加ではなく一人での参加者への対応の改善が必要だった）。
- ・KUSP メンバー全員の役割分担をしっかりとしておくべきだった。
- ・発案の際、目的がぶれていた（目的から場所を決めるべき）。
- ・参加者同士のコミュニケーションがあまり取れていなかった。
- ・一度 KUSP メンバーが下見に行っておくべきだった。
- ・急ぎ足だったので、もう少し各所でゆっくりしたかった。
- ・最初に参加者の自己紹介の場があればよかったです。
- ・関大生の誘導が足りていなかった。回りの方への配慮が必要だった。

### 感 想

京都の歴史を学び、日本の伝統文化にふれる機会を関大生に提供するという目的に沿った企画を行うことができた。また、関大生同士の新たな交流の機会を提供することもでき、参加者の満足度の高い企画を行うことができた。個人ではなく、団体でなければなかなか行くことのできない場所、体験することのないことなどを盛り込み、今後もフィールドワークを企画していきたい。

## 2.2.5 KUコアラ

### ■ ピア・コミュニティの趣旨

KUコアラは、関西大学の学生の図書館利用の向上を図るため、図書館での展示、図書を通じた交流といった学生視点による独自の工夫を行っている。これまでに、留学生や新入生対象の図書館案内、図書の落書き消し、特集本コーナーの設置、講演会の企画・運営、読書会を行った。

### ■ 所属人数

22名（男4名、女18名）

\*1年次生3名、2年次生7名、3年次生7名、4年次生5名（平成27年3月末現在）

### ■ ミーティングの概要

定例会議 週1回

### ■ ピア・コミュニティ内の連携

メンバー間での情報共有が上手く行えず、企画の進行に大幅な遅れが生じたことがあったので、定例会議にて、企画の進行状況などの情報共有を徹底して行うようにしている。また、メーリングリスト（ML）により、諸連絡や定例会議の議事録は迅速に行きわたっている。さらに、MLのアプリやonedriveを使用して情報共有を行ったり、情報共有の強化策として、MLの「読了確認」の機能を使用している。しかし、インターネットに不慣れなメンバーがいるので、使用方法を明記したマニュアルを配付したり、積極的に使用して慣れてもらう必要がある。

### ■ ピア・コミュニティ間の連携について

過去に留学生対象図書館案内といった他のピア・コミュニティと連携する企画や他のピア・コミュニティとの共催企画を実施した。また、ピア合宿にも参加しているが、全体的にまだ改善の余地があると思われる所以、積極的に連携していきたい。

### ■ 教職員との連携について

図書館事務室が支援母体であり、活動予定を担当者がメールで連絡している。また図書館事務室に伺う時は事前にメールでアポイントを取ることにしているため、親しいやりとりができる、連携が強まった。

### ■ 昨年度の課題の改善点

昨年度の課題であったアンケートの回答率の低さは、アンケートをポスターの形式にすることで、改善が見られた。また今年度も新メンバーの確保ができたので、次年度も春学期に企画を開催し、新メンバーを確保したい。

**◆企画名** コアラ☆ミュージアム～第6弾～・●・ヨ&手話サークル「あっぷる」  
**日 程** 平成26年4月1日(火)～5月29日(木)  
**場 所** 関西大学総合図書館内4か所  
**参加者数** 14名(ピア・サポート8名、手話サークル「あっぷる」6名)  
**目 的**

- 学内課外活動団体の活動公開の場の提供
- 来館した学生の図書館への興味・関心を広げる
- 図書館に読書、学習スペース以外の空間づくり

#### 内 容

●本企画は、手話サークル「あっぷる」とピア・コミュニティ「KUコアラ」との連携企画である。図書館内に手話サークル「あっぷる」の活動写真を展示し、学生にその活動の様子や楽しさを伝える。手話に関する活動に興味を持つてもらうきっかけを提供する。

●展示場所

①1階エントランスカウンター前②1階トイレ付近③階段④2階開架閲覧室

●広報

インフォメーションシステム、ポスター掲示、授業内宣伝を行った。

授業内宣伝では図書館広報誌 KULione を配布し、本企画の広報と合わせて KUコアラの活動近況報告も行った。

●評価方法

回収 BOX に投函してもらう紙のアンケートと併用するものとして、展示場所にポスターとシールを設置し、観覧した学生自身にその場でシールを貼って4段階に評価してもらった。ポスターは、本企画自体に対する感想を問うものと各展示写真に対する場所毎の感想を問うものとの2種類を制作した。

#### 効 果

●1階エントランスのガラスに外向きに貼り付けることで、図書館の外の人へアピールすることができた。

●ポスターとシールによる評価について、シールの貼付が最も良い1、次によい2に多く見られたことから、コアラ☆ミュージアムがおおむね高評価であることが分かった。

●手話サークル「あっぷる」の活動を広く学生に知っていただき、知名度の向上に一役買ふことができた。

#### 改 善 点

●スケジュール管理が甘く、KUコアラ内での連絡の遅延や作業の的確さを欠いたため、企画進行に遅れと焦りが生じた。今後はメンバーと密に連絡を取り、細かい点まで気を配った計画を準備段階で練っておくことが求められる。

●新しく取り入れたポスターでの評価には多数のシールが貼られていたのに対し、紙のアンケートの回収率は今年も15枚中3枚と低かった。今後実施するにあたり、計画は詳細まで決定しておく必要と、紙のアンケートに代わるニーズ収集方法を考える必要がある。

#### 感 想

今回初めてミュージアム班として企画班を構成し、副室長と責任者を兼任して運営を行った。半年という短いスパンでのやりくりに翻弄された時期もあったが、搬入時において最後の確認作業を行ったときには大きな達成感を得ることができた。ポスターでのアンケート機能や図書館外へ向けての作品展示は大変好評であったため、今後も続ける価値がある。次回実施する際の責任者には1年ほどのスパンを確保し、綿密な計画のもと、今何をすべきかを明確にしてから実行に移してほしい。

◆企画名 今月のテーマ本  
日 程 平成 26 年 5 月 1 日 (木) ~ 7 月 31 日 (木)  
場 所 関西大学総合図書館 2 階開架閲覧室  
参加者数 6 名 (ピア・サポート)  
目的

- 図書館で寝る、スマホを触る時間を、本を読む時間にしてもらう。
- さまざまな種類の本を「読む」「知る」きっかけを提供し、図書館利用者の興味や関心を広げる。
- KU コアラという団体を（新入生を中心に）知ってもらう。

#### 内 容

- 本企画は月ごとにテーマを設定し、そのテーマに沿った本を展示するものである。
- 展示内容  
「5月：料理 6月：歴史 7月：宇宙」と3ヶ月を通しての「勉強方法」というテーマを設定し、毎月9冊（月ごとのテーマ6冊と勉強方法に関する本3冊）を展示する。展示する際には「どんな内容の本か」「どこがオススメか」などを書いたポップを設置する。

#### 効 果

- サイズの大きな本、分厚い本など一見とっつきにくそうな本でも、多くの本が毎月借りられていた。
- KU コアラメンバーの半分以上が搬入、搬出、飾り作り等何かしらの形で企画に参加したため、KU コアラ内の活動の活発化につながった。
- 企画班のメンバーの個性が出る企画だった。テーマは同じでもいろいろな分野の本選びができた。

#### 改 善 点

- 企画責任者と企画班での情報共有が万全でなかった。企画班で企画を進める時は「誰がどの仕事を担当するのか」「どのように企画を進めていくのか」という企画の流れを示したものをメンバーに配るといいのかもしれない。
- 本企画ではアンケートを実施しなかったため、意見感想を集められなかつた。今後実施する際、時間的に入�数的に余裕があればアンケート用紙を作つて実施すれば、今後の企画に生かすことができる。
- 展示している本が借りられていることが多かつたので、ポップに本の写真（表紙や本の1ページ）を載せておくとそこに本がない場合でもどんな本かイメージしやすい。

#### 感 想

今回初めて企画責任者として企画を受け持つた。KU コアラで過去に実施したことのない、新しい企画だったので上手く進められるのかかなり不安だったが、無事進めることができたと思う。図書館事務室との連絡、KU コアラ内での連絡、飾り作り、本の入れ替え作業など1つの企画に多くの作業があり、また多くの人数が関わっていることがよく分かつた。この企画は、毎月本の入れ替えがあり、ポップも毎月作らないといけなかつたので時間的に余裕のない時があつたが、やりがいがあつた。

この企画は図書館に来た人向けの企画だったので、普段図書館にあまり来ない人に向けた企画を考える必要があるなと思った。

**◆企画名** 「関大生に読んでほしい本 100 選」  
**日 程** 平成 26 年 6 月 2 日（月）～平成 27 年 6 月 1 日（月）  
**場 所** 関西大学千里山キャンパス構内  
**参加者数** 10 名（ピア・サポート 7 名、研修生 3 名）  
**目 的**

学生、特に 2015 年度の新入生へ本事業で作成する冊子を通して本に興味を持つてもらい、図書館へ足を運ぶためのきっかけをつくる。

#### 内 容

学生から大学生の間に読んでおきたいおすすめの本、大学生活のためになるような本の紹介文を募り、それらをまとめた冊子を作成して配布する。募集は 2 期に分ける予定であったが、第 1 期募集（H26/6/2(月)～7/31(木)）の際に 235 冊の応募があったために 1 期で募集を打ち切り、平成 26 年度秋学期より本の選定と冊子の作成作業に移行した。冊子は A5 サイズ/袋とじのものを 400 部作成し、平成 27 年 4 月より総合図書館内 1 階エントランスホール、2 階開架フロアカウンター前にて配布を行った。また、高槻キャンパス・高槻ミューズキャンパス・堺キャンパスの図書館へ 3 部づつ、合計 9 部送付した。

#### 効 果

3 月 31 日に搬入を行い、5 月 1 日に完配した。KU コアラの新規メンバー募集ガイダンスの際、「この企画を知っている」「冊子を持っている」という学生が多かったと広報担当者から報告があった。このことから本企画は、大勢の学生の興味関心を惹きつけることに成功したと考えられる。また、高槻キャンパスで行われた父母会において、来館された 112 名の中で、カウンターに閲覧用として設置した本冊子を手に取る方が多く見受けられたとの報告が図書館スタッフよりあった。

#### 改 善 点

当初から予算を抑えて手作業で行うことにしていたため、400 部は限度の部数であったが、配布終了後には冊子が欲しかったという学生が多数現れた。今後同様の本を紹介するペーパーを作成する際にはページ数を少なくする、ホッチキスを使わない二つ折り冊子にする等の工夫をして手間を減らし、より多くの部数を発行するようにしたい。また今回の応募冊数や完配までの期間、その他の効果を鑑みて、本企画のような本の紹介冊子を配布するという企画は、十分学生の興味関心を得ることが出来、予算をかける意義のある企画であると考えた。このことから、製本を外部に委託することも視野に入れて、より多くの利用者の手に届ける方法について考えたい。

冊子の形態に関して、サイズや厚み等は程よいが、横長よりも縦長の冊子のほうがよかつたのではないかといった意見や、内容に関してはもっと学術書を多くするべきである、書名か著者名で五十音順に掲載されていたほうが探しやすい、ジャンルごとに分類して本を並べたほうがよかった等の意見があった。

#### 感 想

本の募集、製本、配布まで全てが予想以上に素早く進んだ。特に本の書影を集め際や製本作業に多くのメンバーの協力が得られたことが大きい。KU コアラ内で行った企画のフィードバックでは、「KU コアラらしい企画であった」「似たような企画があつてもよい」という意見があったため、今後は改善点を踏まえてよりよい企画として引き継いでいってほしい。

**◆企画名** 図書館広報誌 KULione vol.5 の誌面作成  
**日 程** 平成 26 年 7 月 1 日 (火) ~ 9 月 30 日 (火)  
**場 所** 関西大学千里山キャンパス構内、関西大学総合図書館  
**参加者数** 3 名 (ピア・サポート 2 名、研修生 1 名)  
**目 的**

KU コアラの活動を多くの学生に知ってもらい、興味を持ってもらう。

#### 内 容

- ・図書館広報誌 KULione vol.5 4 ページ目の上 2/3 に KU コアラの活動報告を掲載。
- ・今回の活動報告では、2014 年春学期に実施した「コアラ☆ミュージアム第 6 弾」および「今月の本」を紹介した。
- ・また、今回は併せて、図書館事務室作成誌面に撮影モデルとして参加した。

#### 効 果

- ・KULione に KU コアラの活動紹介を載せ、KU コアラのメンバーをモデルに取り入れたことで、読者に KU コアラの存在を知ってもらうことができ、知名度が大幅に向上了と思われる。

#### 改 善 点

- ・企画の提案から校正まで、全体のスケジュールが少々急であったため、余裕のあるスケジューリングが望まれる。
- ・原稿作成での質問や校正段階での要望などで、メールでの意思疎通がうまくいかないことがあったため、相手に伝わりやすい表現を心がけるだけでなく、直接対面して話し合いをする機会を設ける必要に思えた。
- ・KU コアラ原稿の校正が 1 回であったため、印刷前にもう一度チェックする機会が欲しい。
- ・KU コアラ側に発行日が伝わらなかつたり、図書館事務室側に KU コアラ Facebook ページの存在が伝わっていないなかつたり、ということがあったため、報告・連絡・相談をきっかけりするよう努めたい。

#### 感 想

- ・本企画では、KU コアラと図書館事務室が、一団体と支援部署という関係を超えて、双方が一つのチームとなって KULione 完成に向けて取り組むという点において、他の企画にはない特殊なものがあると感じた。
- ・また、本企画は図書館事務室の方と直接的な交流をする機会が多く（モデル撮影など）、特に研修生が企画進行について見て学ぶのに適した企画であるともいえる。
- ・何より KU コアラが過去の活動を見直し、直接学生に向けて広報する機会を得られるため、今後もぜひ続けていきたい。

**◆企画名** 今月の本  
**日 程** 平成 26 年 10 月 16 日 (木) ~ 12 月 21 日 (日)  
**場 所** 関西大学総合図書館 2 階開架閲覧室  
**参加者数** 6 名 (ピア・サポータ)  
**目 的**

- ・図書館で寝る、スマホを触る時間を、本を読む時間にしてもらう。
- ・さまざまな種類の本を「読む」「知る」きっかけを提供し、図書館利用者の興味や関心を広げる。
- ・KU コアラという団体を関西大学の学生に知ってもらう。

#### 内 容

本事業は毎月に設定したテーマに沿った本と学習に関する本を展示するものであった。毎月、月毎に設定したテーマに沿った本を 8 冊、学習に関する本を 4 冊、計 12 冊を展示了。

月毎のテーマは以下の通りである。

10 月 : スポーツ

11 月 : 恋愛

12 月 : 文化

展示の際は「どんな内容の本か」「どこがオススメか」などを書いたポップの設置を行った。

#### 効 果

12 冊本を展示していたが、1 冊も本棚に本が無い時があった程、多くの図書館利用者に展示した本を借りて頂けた。また、本を展示しているのは「今月の本」という企画であることと、主催しているのは「KU コアラ」であることがわかりやすいように、先の文言を明記して飾り付けをした衝立を本を展示してある本棚の横に置いたので、図書館利用者に KU コアラという団体のアピールができた。

#### 改 善 点

「どんな内容の本か」「どこがオススメか」などを書いたポップのレイアウトがバラバラであった為、少々見にくかった。次回行う際は配置した後にポップがどの様に見えるかまで考慮して作成するべきである。また、図書館利用者から今月の本に関する意見を頂く場を設けなかったので、次回行う際には検討するべきである。

#### 感 想

多くの図書館利用者に本を借りて頂けたので、この企画を通じて様々な本が総合図書館にある事を知ってもらえた、興味や関心を持ってもらえたのではないかと思う。目的が大方達成でき、大変喜ばしい。

**◆企画名** 図書館広報誌 KULione vol.6 の誌面作成  
**日 程** 平成 26 年 11 月 25 日 (火) ~ 平成 27 年 3 月 31 日 (火)  
**場 所** 関西大学千里山キャンパス構内、関西大学総合図書館  
**参加者数** 10 名 (ピア・サポート 7 名、研修生 3 名)

**目的**

KU コアラおよびその活動内容を多くの学生に知ってもらい、興味を持ってもらう。

**内 容**

図書館広報誌 KULione vol.6 4 ページ目の上 2/3 に KU コアラの活動報告を掲載。活動報告では、2014 年度秋学期に実施した「今月の本」での活動を紹介した。また、今回は併せて、図書館事務室作成誌面に撮影モデルとして参加した。

**効 果**

普段の活動ではメンバーが表にでることが少なく、企画をしてもどこがその企画をやっているのか認識されていない場合も多い。しかし、KULione を友人に見せたところ今月の本という展示が図書館で行われていることは知っていたが、KU コアラの企画だったというのは KULione を見て知ったという感想をもらったり、今年入った KU コアラの研修生に KULione を見て存在を知ったと聞くことができたので、KULione に KU コアラがどのような活動を行っていたかを掲載し、メンバーがモデルを行うことで、KULione を見た人に KU コアラの存在およびその活動について知ってもらう機会が増えたといえる。

**改 善 点**

メールのチェックのし忘れにより企画の進行が滞ってしまうことがあったため、企画責任者は特にまめなメールチェックを心掛けるよう気を付ける。

関係書類や原稿を期限がせまってから提出することが多かったため、校正にかける時間をあまり取れなかった。よりよいものを作るために余裕をもって提出し校正にかける時間を多くとるよう努めるべきである。

「コアラ☆ミュージアム」や「関大生に読んでほしい本 100 選」など他の企画に対する認識不足により記事の修正を加えるのを忘れてしまった結果、KU コアラの活動報告の記事が曖昧な表現での掲載になってしまった。KULione での活動報告の記事を作成するうえで、他企画についての認識をしておくべきであった。

**感 想**

この企画では KU コアラの活動報告記事という内容上、図書館事務室の方だけでなく他企画の責任者との連携も重要な企画であると感じた。

KULione は構内のさまざまな場所に置かれるため、比較的活動範囲の広くない KU コアラにとって多くの人に活動を知ってもらう良い機会であるので今後の活動のためにも是非続けていきたい。

<b>◆企画名</b>	<u>特集本～学びへの扉～</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 27 年 1 月 19 日 (月) ~ 2 月 9 日 (月)</u>
<b>場 所</b>	<u>関西大学総合図書館 2 階開架閲覧室</u>
<b>参加者数</b>	<u>29 名 (ピア・サポート 8 名、研修生 3 名、学術研究会 18 名)</u>
<b>目 的</b>	

幅広い分野の本を展示し、これらの本に興味を持って読んだ学生の新たな自己発見に生かしてもらうことを目的とする。

#### 内 容

本の特集展示を行う。

本の展示によって、図書館利用者の勉強以外での本を読む機会を増やすという目的のために、多岐にわたるジャンルの本を置きたい。そのために幅広いジャンルを学ぶ団体の方が集まっている「学術研究会」にご協力いただいて本を選出した。

#### 効 果

展示期間がテスト期間中に合致したこともあり、多くの学生に展示を見てもらうことができた。記述式のアンケートでは、「興味深い書籍を見つけることができた」等の感想があった。

#### 改 善 点

学術研究会側との連絡で意思の疎通がうまくいかず、当初予定していた展示期間よりも大幅に後ろ倒しになってしまい、展示期間が短くなってしまったことが悔やまれる。また、搬入後の展示物や装飾物の落下が目立った。特にボードに掲示した模造紙はよく落下し、図書館カウンターの職員の方のお手を煩わせてしまった。今後は、階段の掲示は布テープで行うこと、またボードの展示には画鋲を使うことなどを徹底する。

#### 感 想

他団体と連携した「特集本」企画は初の試みであった。しかし、今回展示の打ち合わせをするにあたって、認識の違いによって大きな問題がおこってしまい、他団体との連携企画に対する双方の連絡の大切さを痛感した。だが、アンケートにおいて、また他団体との連携した企画を望む意見があったため、今回の反省を次回に活かし、「特集本」企画をより充実したものにしたい。

## 2.2.6 KU サポーターズ

### ■ ピア・コミュニティの趣旨

KU サポーターズとは、“仲間同士の助け合い”をキーワードに、学生による学生のための学生相談を実施している。大学生活における些細な悩みや問題について誰かに話を聞いてもらいたい時や、悩みがあるけれど誰に相談してよいかわからないという時など、KU サポーターズが開設している「ほっこり相談室」で、少しだけ手を差し伸べ、サポートすることを目的に活動している。また、ほっこり相談室での活動以外にも、年に数回講演会やワークショップなども開催している。

### ■ 所属人数

18名（男10名、女8名）

\*1年次生1名、2年次生8名、3年次生2名、4年次生5名、大学院生2名（平成27年3月末現在）

### ■ ミーティングの概要

2週間に1回（その他、企画の進捗状況によって適宜実施）

### ■ ピア・コミュニティ内の連携

KU サポーターズ用に作成されたメーリングリスト（ML）や本学のSNS、Google ドライブにおいて、連絡や情報の共有を行っている。平成22年1月からピア・コミュニティを立ち上げたため、当初は毎週定例でミーティングを行い、1週間の活動共有や、作業の進捗状況などの確認を行っていた。その後も、メンバー間で互いに密に連絡を取り合ながら、互いの役職を超えてうまく連携を図っていた。

### ■ ピア・コミュニティ間の連携について

KU サポーターズの代表者を中心に、他のピア・コミュニティとの活動共有や共同企画などの進捗状況を共有した。こうすることで代表間での連携傾向を高めることには繋がったが、KU サポーターズに所属する、代表者以外のメンバーは他のピア・コミュニティとの連携はまだ十分とは言えないため、代表者以外のメンバー間での連携も見据えて活動していくことが今後の課題として挙げられる。

### ■ 教職員との連携について

学生生活支援グループが支援母体であり、活動場所との物理的距離が近いため、相談を行いややすい環境にある。そのため、学生生活支援グループの教職員が適宜ミーティングに参加し、活動状況やアドバイス、意見交換などをを行うことで、うまく連携をとりながら活動が実施できている。このほか、大学学生相談室やハラスメント相談室の相談員の先生とも、共催企画を行うなど学生生活支援グループ同様に連携を図っており、双方によい関係性が築けている。

### ■ 昨年度の課題の改善点

来年度に向けて、以下の改善点が挙げられる。まず KU サポーターズの認知度の向上。具体的には KU サポーターズの広報活動を積極的に行い、通年企画である「ほっこり相談室」の認知度向上、講演会やワークショップといった企画への参加者の増加を目指す。また、KU サポーターズのメンバー一人ひとりがより良いサポートを行うため、自主的なトレーニングや情報共有が重要となる。発足し5年が過ぎたが、未だ体系化が不十分である点もあり、全員が問題意識を共有し課題に取り組む必要がある。

**◆企画名** ほっこり相談室の開室  
**日 程** 平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月 ※期間中、月曜・水曜・金曜に開室  
**場 所** 総合学生会館凜風館 1 階 サポーターズルーム  
**参加者数** 19 名 (ピア・サポート 17 名、研修生 2 名)  
**目 的**

仲間同士の助け合い、をキーワードに本学のすべての学生を対象に、学生生活上の悩みを聴いたり、必要に応じて適切なアドバイスや情報を提供することを目的とした。

#### 内 容

4 月から、月・水・金の週 3 回、11：00～17：00 の間に毎週ほっこり相談室に約 3 名ずつ待機し、相談活動を行った。

#### 効 果

ほっこり相談室の効果としては、利用者さんから「ありがとう」という言葉をたくさん頂き、笑顔になっていただいたこと、来てよかったですと感じてもらえたことが挙げられた。良かった点としては、シフトの関係上、新メンバーを含む多くのメンバーが利用者さんとの対応を経験することができたことが挙げられた。

#### 改 善 点

改善点としては、

- ・話を聞くことに夢中になり、相談時間が大幅に超えてしまったこと、
- ・利用時間内にメンバー変更があるにも関わらず、最初にお伝えできず、利用者さんに嫌な思いをさせてしまったのではないかということ、
- ・相談記録チェックが不十分で、リピーターの利用者さんの内容を把握できていなかったこと、
- ・メンバーの都合でシフト交代や閉室が多くなってしまったこと、
- ・リファー先の把握が不十分であったこと、

が挙げられた。

#### 感 想

利用者さんと対応していくなかで、多くの反省点、改善点が挙げられ、これからさらによりよい対応を身につけていかなければならないと感じた。一方で良かった点も挙げられたので、継続していきたいと思った。

<b>◆企画名</b>	<u>Facebook を利用した広報活動</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 4 月 1 日 (火) ~ 平成 27 年 3 月 31 日 (火)</u>
<b>場 所</b>	<u>Facebook 上</u>
<b>参加者数</b>	<u>14 名 (ピア・サポート)</u>
<b>目 的</b>	

これまで KU サポーターズはインフォメーションシステムやポスターを利用し、ほっこり相談室の開室日時や企画の広報を行ってきた。しかし、情報社会の拡大に伴い、大学生の多くは SNS から情報を取り入れていることが 2013 年度企画「ソーシャルデトックス」で明らかになった。そこで、多くの関大生が日常から利用している Facebook を利用して広報活動を実施し、より多くの関大生にとって身近な存在に KU サポーターズがなれることを目的としている。

### 内 容

Facebook を利用し、そこにはほっこり相談室の開室スケジュールを掲載して一般学生の方にはほっこり相談室の開室日を告知した。また、「結構かんたん！ コミュ力基本シリーズ」など企画を行う際には、企画の紹介とそれに合わせて企画のポスターも同時に掲載し企画を告知した。

### 効 果

ほっこり相談室の開室スケジュール等 KU サポーターズの活動を手軽に見れることが可能な SNS である Facebook 上にアップすることで一般学生にはほっこり相談室の存在を知つてもらえたと同時にほっこり相談室の利用につながった。

### 改 善 点

6 月から Facebook の更新が停滞してしまっていた。ほっこり通信は発行していたので広報活動は行っていたが、そちらに重点を置きすぎてしまったため、Facebook の更新がおろそかになってしまっていた。今後はほっこり通信とともに Facebook の更新もしっかり行き、広報活動を行っていく。

### 感 想

Facebook による広報活動はネットを介して簡単に KU サポーターズの活動やほっこり相談室の開室スケジュールを一般学生に知つてもらうことが可能であり、ほっこり通信のみでは貰い切れない広報活動を行うことができる。そのため、今後改善すべき点をしっかりと改善していく、更新が停滞しないよう随時更新するようにしていく。

**◆企画名** 関大生なんでも Q&A  
**日 程** 平成 26 年 4 月 2 日 (水) ~4 月 4 日 (金)  
**場 所** 総合学生会館凜風館 1 階 屋外ブース  
**参加者数** 14 名 (ピア・サポート)  
**目 的**

関西大学に入学したばかりの新入生は、誰かに相談したくとも相談相手を見つけることが困難であると思われる。また、学内にはさまざまな部署があり、それぞれの機能に応じて学生の支援を行っているが、新入生はどの部署に行けばよいかわからない。

本事業では、こうした右も左も分からず新入生に対して、授業やサークル活動などをはじめ、大学生活（勉強とバイトの両立など）に対する不安を解消することを目的として、オリエンテーション期間にブースを設置し、個別相談に応じる。

また、本事業を行うことで、間接的にではあるが KU サポーターズの活動を新入生に認知してもらうことも目的とする。

### 内 容

凜風館 1 階屋外にブースを設置し、主に新入生を対象に各種相談に応じた。KU サポーターズのメンバーは常時 2 名以上でブースに待機し、道案内に関する相談が寄せられた場合には状況によって直接メンバーが現地まで誘導するなどして対応を行った。

また、本事業は入学して間もない新入生を対象にオリエンテーション期間中における行事、各種学内相談窓口や教室等の場所といった簡単な質問に応じることを想定して実施しているため、例えば履修に関することや深刻な相談等ブースでの対応が困難な相談内容に関しては、学内の所定の窓口の紹介もしくは「ほっこり相談室」を紹介するなどして対応を行った。

### 効 果

- ・新入生への道案内や相談の対応による手助け。
- ・凜風館外で活動することで、KU サポーターズ自体の活動告知の効果。

### 改 善 点

質問の多くは千里山キャンパス内の施設や部署についてであり、日頃から千里山キャンパスについてメンバー各自が多くを知っておく必要があると再認識した。

KU サポーターズの活動を認知してもらう目的に関して、こちらから団体名を名乗る場面が少なかったため、十分な広報効果があったとは言いがたい。実際のピア・サポート活動を一般学生に見てもらう中で、徐々にピア・サポートへの興味と関心を培っていくことができれば、より一層のピア・サポート拡大にもつなげることができると考える。今後も本事業のようなピア・サポートを実践していきたい。

### 感 想

今年は 100 件を超える相談が寄せられた。道案内をはじめ、新生活への不安やサークル選びなど、昨年度よりも幅広い内容の質問が目立った。ほっこり相談室外での活動であったので、KU サポーターズの周知の面でも一定の効果があったものと思料する。

今後もこういった活動をすることで、関大生に対する幅広いサポートを実現していくたいと考える。

**◆企画名** 結構かんたん！コミュ力基本の「キ」  
**日 程** 平成 26 年 4 月 22 日（火）  
**場 所** 総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム 2  
**参加者数** 17 名（ピア・サポート 4 名、一般学生 13 名）  
**目 的**

学生相談室やほっこり相談室の利用者には、大学で友人を作るタイミングを逃した学生もいる。そのような学生を対象とし、コミュニケーションに関する講演会を行う。最終的には、参加者に自分自身のマニュアルを作ってもらい、友達作りの「最初の一歩」を踏み出せるようになるきっかけを提供することを目的とする。

### 内 容

- ①講義 「コミュニケーションについて正しく理解しよう」  
(コミュニケーションの 3 領域→コミュニケーションの種類→コミュニケーションのプロセス→会話のプロセスでエラーを起こさない「話す」と「聞く」のコツ)
- ②ワーク 「人間関係を円滑にする表現技術」  
(人間関係のきっかけをつくる「挨拶」の意味とコツ→関係作りの第一歩「自己紹介」の目的とコツ)
- ③まとめ
- ④アンケート記入

### 効 果

- 企画の内容について
  - ・講義とワークの両方を取り入れることで、学びながら実践することが出来た。
  - ・参加者によって「コミュ力基本の『キ』」の捉え方やレベルは異なっていたが、最も基礎的な内容にすることで、基準を低いところに合わせることが出来た。
  - ・参加者が少人数であったため、友達作りを苦手とする参加者にとっては、居心地が良かったのではないかと考えられる。
- その他
  - ・学生相談室を利用している方も数名が参加されていた。
  - ・アンケート結果が概ね良好であった。

### 改 善 点

- 企画の内容について
  - ・講義が長かった。参加型のワークを通じた交流時間を増やすことで、参加者同士が友達になる機会をより上手く提供することが出来ると考えられる。
  - ・参加者によって「コミュ力基本の『キ』」の捉え方やレベルが異なり、全員が満足できたとは言い難い。

### 感 想

KU サポーターズも参加者と同様に楽しみながら企画に参加することで、参加者間のコミュニケーションを自然に促すことができた。  
参加者によって企画のレベルに対しての捉え方が異なる様子で、「この講座を受けても友達は出来ない」等の厳しいお言葉もいただいた。そのため、続編の「結構かんたん！コミュ力基本の『ホ』」については、当初予定していた内容や最終目標を変更し、レベルを少し低めに設定する方向で調整を行っている。

**◆企画名** 結構かんたん！コミュ力基本の「ホ」  
**日 程** 平成 26 年 6 月 3 日 (火)  
**場 所** 総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム 2  
**参加者数** 11 名 (ピア・サポート 4 名、研修生 2 名、一般学生 5 名)  
**目 的**

学生相談室やほっこり相談室の利用者には、大学で友人を作るタイミングを逃した学生もいる。そのような学生を対象とし、コミュニケーションに関する講演会を行う。最終的には、参加者に自分自身のマニュアルを作ってもらい、友達作りの「最初の一歩」を踏み出せるようになるきっかけを提供することを目的とする。

### 内 容

- ① 講義「コミュ力基本の『キ』のおさらい」  
(主体的に他者と関わることについての重要性→コミュニケーションのプロセス→他者と相互に存在を認め合うことの重要性→自己紹介の意義)  
②ワーク  
■その 1 「自己紹介」 (2 人 1 組での自己紹介の練習)  
■その 2 「へえ～ゲーム」 (否定せずに互いに尊重し合うコミュニケーションの練習)  
■その 3 「あたたかい言葉」 (互いにあたたかい言葉を伝え合い、相手の存在を肯定し心地よくさせる練習)  
③まとめ  
④アンケート

### 効 果

- 企画の形態について  
・KU サポーターズも参加者と共に楽しみながら取り組むことで、参加者同士の会話の潤滑油となることが出来た。  
・グループに分かれることで、参加者一人一人の個性が出しやすく、仲良くなりやすい雰囲気を作ることが出来た。  
■参加者について  
・参加者がリラックスしながら楽しんで参加されている様子だった。  
・本講座を受講したことにより自信がつき、以前より積極的になった様子が伺えた。

### 改 善 点

- 企画の形態について  
・グループごとに盛り上がりの度合いが異なった。また、違うグループの学生と接する機会を取ることが出来なかつた。  
→今後は、グループ以外の参加者とも交流できる参加者全体でのワークなどを取り入れることで、改善していくべきである。  
・参加者により、元々持っているコミュニケーション能力が異なる。そのため、ワークの際に、与えられたテーマを順調に遂行出来ない参加者がいた。  
→今後は、より多くの参加者に満足していただける様に、KU サポーターズメンバーが今まで以上にファシリテーションの意識を高く持つ必要性がある。

### 感 想

「結構かんたん！コミュ力基本の『キ』」から連続で来て下さった参加者に、前回よりも笑顔が増えた様子などが見られ、やりがいを感じた。中には、次回で講座が終了することへの寂しさなどを伝えて下さる方もおり、喜ばしい限りである。次回の講座も引き続き、参加者にリラックスしていただける空間作りを心掛けて実施していきたい。

<b>◆企画名</b>	KU グチコレ
<b>日 程</b>	平成 26 年 6 月 10 日 (火) 、 6 月 12 日 (木) 、 6 月 17 日 (火) 、 6 月 19 日 (木)
<b>場 所</b>	総合学生会館凜風館 1 階 ピアエリア
<b>参加者数</b>	78 名 (ピア・サポータ 7 名、研修生 5 名、一般学生 66 名)
<b>目 的</b>	

グチは私たちが生きている以上、切っては切り離せない行動である。グチを言うことは、世間では悪いことと捉えられがちであり、心がそのグチの言葉によってその方向に向いてしまい、俗な言い方をすると心が腐るとも言われる。しかし一方で、グチを言うことはカタルシス効果があり心の病の予防にもつながる。要するにグチはこぼしかたが大切なことがある。この点、友達に毎回グチを聞いてもらうのは気が引けるから言わないと言う人がいる。私たちは彼らのグチを聞き、彼らがより健やかな大学生活を送れるような手助けをしたい。

### 内 容

ピアエリアにブースを設置し、KU グチコレクションの看板を掲げる。最大利用時間は 30 分までに設定し、利用内容は記録用紙に適宜記録（その内容はメンバー内で共有）。全部に共通して言えることは、我々はグチを聞くことを目的としているため、メンバーとしての立場からアドバイスをすることはしない。万が一アドバイスを求められた場合は、ほっこり相談室の利用をリファーする。

### 効 果

#### ■企画の形態や内容について

- ・グチを言った後に、「すっきりした」「ありがとう」「おもしろい企画ですね」と言ってくれる利用者が多かった。
- ・グチの量や種類など利用者に合わせて臨機応変に対応できた。
- ・「グチを聞く」という企画自体が斬新で、興味を持ってくれる利用者が多かった。

#### ■参加者について

総計 34 件 (学生延べ 66 名)

### 改 善 点

#### ■企画の形態や内容について

- ・人目につきやすいところにブースを設置しており、相談者が利用するには勇気がいった。
- ・メンバーが肘をついて対応してしまうことがあった。
- ・「グチコレ」という名称は、他大学で使われているため、違う名称にした方が良かった。
- ・グチは聞かず、褒めるだけになってしまった事例があった。
- ・「利用者へアドバイスはしない」というルールのもとで企画実施したが、話の流れでアドバイスしてしまった事例がいくつかあった。
- ・「何かグチを言ってください」という感じで、グチを強引に聞き出す形になってしまった事例があった。

### 感 想

- ・利用者からのフィードバックが多く、KU サポーターズの活動として、やりがいを感じた。
- ・利用者一人一人に合わせた対応が出来ていた。
- ・KU サポーターズから積極的・自発的に声掛けが出来た。
- ・グチの無い利用者に対しても、「充実されているんですね」などと褒め返すことで、企画に対して好印象を持ってもらえるように心がけることが出来た。
- ・驚いたり面倒そうにしている利用者もいた。
- ・「グチはありません」という学生が多く、大学生にそもそもグチや悩み事が少ないのかかもしれない。
- ・勉強しない学生でも、用事があつたり話しかけられたくない場合がある。その判断が難しかった。

**◆企画名** 結構かんたん！コミュ力基本の「ン」  
**日 程** 平成 26 年 6 月 24 日（火）  
**場 所** 総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム 2  
**参加者数** 10 名（ピア・サポート 7 名、一般学生 3 名）  
**目 的**

学生相談室やほっこり相談室の利用者には、大学で友人を作るタイミングを逃した学生もいる。そのような学生を対象とし、コミュニケーションに関する講演会を行う。最終的には、参加者に自分自身のマニュアルを作ってもらい、友達作りの「最初の一歩」を踏み出せるようになるきっかけを提供することを目的とする。

### 内 容

- ① 講義「コミュ力基本の『キ』『ホ』のおさらい」  
(主体的に他者と関わることについての重要性→コミュニケーションのプロセス→他者と相互に存在を認め合うことの重要性→自己紹介の意義)
- ②ワーク
- 『1枚の絵』  
(講師の指示に従って各々が絵を描く。人との違いを優劣でなく差異として受け止める練習をする。)
- 『2枚の絵』  
(4人1組で2枚の絵を完成させることで、「違い」を埋める精度を高める。)
- 『自分に良いレッテルを貼って自信を育てよう』  
(あたたかい言葉をふせんに書いて互いの身体に貼り合うことで、自信を育てる練習をする。)
- ③まとめ                  ④アンケート記入

### 効 果

- 企画の形態や内容について
- ・参加者全員と関わることができるワークを実施できた。
  - ・ワークにふせんを用いることで、視覚的な効果を得られたと同時に楽しめた。
  - ・ワークを通して、人を褒めるということに向き合えた。
- 参加者について
- ・3部連続の参加者が数名おり、当初の狙いであるステップアップを達成出来た。
  - ・当日の会話やアンケート結果から、参加者の反応が良く、内容に満足されていたように窺えた。
  - ・更なるステップアップとして、「応用」などの続編講座を希望している参加者が多い。

### 改 善 点

- 企画の形態について
- ・名前タグを胸にシールで貼っていたため、相手をジロジロと見ている感じがした。  
→紙を折って立てる形をとった方が良かった。
  - ・絵を描くワークの際に、完成品を参加者全員で共有する時間があればより良かった。

### 感 想

3部連続で参加してくださった方が数名おり、企画を実施して良かったと心から感じた。参加者からは、「更なる続編を計画してほしい」「スタッフの方、お疲れ様でした」などのお声をいただき、今後もその様な方々からの期待に応えたいという気持ちが高まった。参加者は少なかったが、だからこそ、親密な空間を作り、良い影響を及ぼせたのではないかと考える。とはいって、より多くの学生を支援したいという気持ちも強く、やはり早めの準備や広報を徹底していくべきだと痛感した。

<b>◆企画名</b>	<u>KU サポーターズ夏季自主研修合宿</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 9 月 12 日（金）～9 月 14 日（日）</u>
<b>場 所</b>	<u>高槻キャンパス 高岳館</u>
<b>参加者数</b>	<u>19 名（ピア・サポータ 13 名、学生支援室 TA2 名、職員 2 名、卒業生 2 名）</u>
<b>目 的</b>	

KU サポーターズ春学期の活動を振り返り、秋学期の活動計画・活動指針の再検討を行う。また、ほっこり相談室における相談対応について、そして相談室の改善についてメンバー全員で話し合う場をもつ。また、次世代メンバーへの事業内容の引き継ぎ及び全メンバーのスキルアップを図ることを目的とする。

### 内 容

春学期の活動内容の振り返りと秋学期からの活動に関するミーティング、メンバーのスキルアップを図るためにワークや親睦やリフレッシュを目的としたボディワーク、レクリエーション等を行った。

- ・秋学期から導入するクラブマップの内容を共有及び協議し、最終確認を行った。
- ・新役員の紹介を行い、秋学期以降の活動や活動の方向性等について協議を行った。
- ・マネジメントブックに関する説明と実際に事業計画書を作成するワークを行った。
- ・新しく活動に加わったメンバーも多数参加していたため、KU サポーターズに関する知識をクイズ形式で楽しみながら学ぶワークを行った。
- ・鵜飼先生（関西大学学生相談室相談員）に講師をお願いし「実践を通して傾聴を身近に感じてもらう」ことを目的としたワークを行った。
- ・水鉄砲を用いたゲーム、グループ毎に協力してひとつの絵画を作り上げるボディワークを行った。

### 効 果

3 日間を共に過ごし、普段なかなか話しあえないような議題についてもじっくりと時間をかけて協議することで、メンバーひとりひとりの自覚と責任感の養成に繋がったと感じる。また、普段なかなか交流する機会の少ない教職員とも時間を共有することで、今までよりもさらに身近な存在に感じるようになった。

### 改 善 点

- ・合宿の準備（印刷物や必要事項の確認等）を前役員に頼ってしまっていた部分があった。
- ・会議が長引き、当初予定していた議題を後回しにすることとなった。
- ・リハーサルを実施し、実際にどのくらいの時間を要するのか確認すべきであった。
- ・ミーティングにおける進行側の打ち合わせや準備不足が一部あった。
- ・ワークの一部に費用が生じ、担当者が負担する形となってしまった。
- ・時間配分や企画進行の計画段階で、もっと担当者同士で内容を協議すべきであった。
- ・事前準備を 2 年次生にうまく引き継げなかった。

### 感 想

- ・今回の合宿の大きな目的の一つであった、次世代への引き継ぎが達成できた。
- ・マネジメントブックは堅苦しくて読みにくい内容だが、パワーポイントを使い、わかりやすく説明できたと思う。
- ・事業計画書を実際に作成するワークでは、とっつきにくいイメージのあった事業計画書を、少し身近に感じてもらえたと思う。
- ・引き継ぎの目的があったため、勉強会のようなワークが多くたが、ボディワークで心身ともにリフレッシュできたので、全体的にメリハリのある合宿ができたと考える。

**◆企画名** ほっこり通信 2014 年度版  
**日 程** 平成 26 年 12 月 26 日 (金) ~ 平成 27 年 3 月 31 日 (火)  
**場 所** 総合学生会館凜風館などの「ほっこり相談室」ポスター掲示場所  
**参加者数** 19 名 (ピア・サポート 15 名、研修生 4 名)  
**目 的**

ほっこり通信の記事内容にストレスマネジメントといった内容を掲載することで、活動のキーワードである「ほっこり」を紙面から提供することを主な目的とする。また、外部からは活動内容が見えにくい側面があるほっこり相談室、延いては KU サポーターズの存在や活動内容を知ってもらうことも主な目的に伴う目的とする。

#### 内 容

ほっこり通信 vol.6 ではストレスマネジメントをテーマに記事を組んだ。記事の具体的な内容としては「1 分仮眠法」と「深呼吸」の二つのストレスマネジメントの具体的な方法を載せ、読者に簡単にできるストレスマネジメントの方法を紹介した。その他、KU サポーターズのメンバーが選定した、メンバーが感銘を受けた格言を載せることで自己啓発の側面も持たせた。

#### 効 果

一人で簡単にできるストレスマネジメントの具体的な方法の流れを記載したので、場所を問わず簡単に自分のストレスマネジメントを行うことができ、ストレス軽減を実現できた。

#### 改 善 点

ほっこり通信の発行は 2014 年度は 2 回行う予定であったが、編集等の都合により年度内に実際に発行できたのは 1 回のみであったため、次回以降の本事業を行う際にはしっかりとスケジュール等を調整し事業計画書に記載した発行予定数をきちんと発行できるようになる。

#### 感 想

ほっこり通信は 2014 年度は発行予定数をしっかり発行出来なかったのは残念であったが、そこはしっかり反省し、改善していきたい。ほっこり通信の内容については場所、人数問わず簡単に行えるストレスマネジメントの方法を紹介するといった KU サポーターズの活動内容に沿ったものができたのでその点は良かった。

**◆企画名** KU サポーターズ春季自主勉強会  
**日 程** 平成 27 年 3 月 10 日 (火)  
**場 所** 総合学生会館凜風館 4 階 ミーティングルーム  
**参加者数** 18 名 (ピア・サポータ 15 名、研修生 1 名、職員 2 名)  
**目 的**

KU サポーターズの 2014 年度活動を振り返り、その反省と今後の活動指針について、メンバー全員で話し合う場を設ける。また、ほっこり相談室運営を始めとした KU サポーターズの活動の質を上げるべく、ワークを通して各メンバーの技術の向上を図る。

### 内 容

- ワーク①
  - ・漢字フォーカシングを通して、メンバー間のコミュニケーションの円滑化を図る。
- ミーティング
  - ・今後の KU サポーターズの活動指針を固めるために、次年度の活動について話し合う。
- ワーク② (鵜飼先生によるワーク)
  - ・鵜飼先生のご指導の下、相談対応の際に必要となる、多様な個性を認める心構えを身につける。
- ワーク③
  - ・活動の場における意見の対立が、人間関係の対立になることを防ぐ術を身につける。

### 効 果

- ワーク①
  - ・以降のミーティング・ワークでのメンバー間の意見交換の円滑化に繋がった。
- ミーティング
  - ・全ての議題について決定事項を示し、活動の指針を固めることができた。
- ワーク②
  - ・普段はあまり行えない、自分を見つめるという作業を実践できた。
  - ・相談対応の基本に繋がる重要なことを行えた。
- ワーク③
  - ・メンバー間の関係性を見つめ直せた。

### 改 善 点

- ワーク①
  - ・企画について深く話し合はず、一人の班員が多くを決定する形になった。
- ミーティング
  - ・1 つ目の議題に費やした時間が長く、他の議題の進行が早足になってしまった。
- ワーク②
  - ・鵜飼先生へのワークの依頼に関して、前年度からの引継ぎが甘かった。
- ワーク③
  - ・ワークの進行に用いた PowerPoint のデータを、配付資料として印刷すべきだった。

### 感 想

本企画は、前年度まで合宿として実施していたものを、勉強会（一日研修）という形で実施したものである。結果として、日帰りになったことにより、メンバーの日程調整が上手く進み、合宿よりも参加人数を増やすことができたので、良い変更であったといえる。  
企画の目的である、2015 年度の方向性の決定について、「ほっこり相談室やなんでも Q&A などの KU サポーターズのベースになる企画に力を入れるために、他の企画は行わない」という結論に至った。そのため、本企画の三つのワークで学んだ「自己理解と他者理解」を活かして、相談トレーニングやケース検討会をしっかり行っていきたいと思う。

## 2.2.7 ぴあかんず

### ■ ピア・コミュニティの趣旨

ぴあかんずは、ピア・コミュニティの活動を広報するニュースレター「ぴあかんず」の制作を行うピア・コミュニティであり、各ピア・コミュニティの活動取材のほか、各号において紙面企画を実施することで、関西大学におけるピア・コミュニティの普及とピア・サポートへのきっかけづくりを目指している。

また、紙面企画については、普段の学生生活に数多く存在している学生同士が支えあい、助け合い、成長しているシーンに着目し、関西大学に関係する人物や出来事を取り上げている。

### ■ 所属人数

0名（男0名、女0名）

\*1年次生0名、2年次生0名、3年次生0名、4年次生0名（平成27年3月末現在）

### ■ ピア・コミュニティの現状

昨年度の秋学期途中から、活動の継続が難しい状態ではあったが、今年度に入り在籍するサポートが不在となり、活動休止状態に陥った。

支援体制は維持しているため、活動を希望する学生がいれば、できる限りの支援をし、「ぴあかんず」の発行を行いたい。

### ■ ピア・コミュニティの課題

活動を再開するためには、何よりもまず活動希望者の獲得が不可欠である。ぴあかんずのサポートとして活動することの魅力を発信するなど、メンバー募集に力を入れるとともに、活動が再開した場合も軌道に乗るまでは、活動におもしろさややり甲斐を感じられるよう、教職員・TAが積極的に支援を行う必要があると思われる。

## 2.2.8 関西大学ITピア・コミュニティ“i.com”

### ■ ピア・コミュニティの趣旨

関西大学ITピア・コミュニティ“i.com”（以下、i.comとする）は、“Do IT!（ITしようぜ！）”をキャッチコピーに、平成26年度はITスキル（主にパソコンを利用し、映像・web・ポスターなどを作成する技術）を行使し、関西大学の学生に技術支援する活動を行った。特に、画像編集ソフト「GIMP」の使い方を教える講習会の開催、小冊子の配布に重点を置いて活動した。

### ■ 所属人数

5名(男2名、女3名)

\*1年次生0名、2年次生0名、3年次生1名、4年次生3名、大学院生1名（平成27年3月末現在）

### ■ ミーティングの概要

週1回程度

### ■ ピア・コミュニティ内の連携

企画を行うに当たって、支援部署、またサポート間での情報共有は問題となりやすいが、i.comではメーリングリスト（ML）やサイボウズLiveを活用し、円滑な情報共有に努めている。昨年度は情報共有時の問題点として、夜10時を超えてのやりとりがあげられたが、平成26年度は夜10時以降のML送信は0件となり、改善することができた。

また、平成26年度は、ティーチングアシスタント（TA）に頻繁に会議へ参加いただいた機会も多く、より幅広い意見を企画に生かすことができた。

### ■ ピア・コミュニティ間の連携

先述したGIMP講習会企画について、他のコミュニティのサポートにも参加してもらえた。このような形でピア・コミュニティへ技術支援することによって、他コミュニティの活動を支援すると共に、その活動を知るきっかけになると考えている。

### ■ 教職員との連携について

i.comの支援は、ITセンターが行っており、運営面や技術面のアドバイス、機器や設備の提供などを行っている。定期的にサポートと職員が直接会う機会を設け、情報伝達に漏れがないか、互いの認識に齟齬が生じていないかを確認するなど、ピア・サポートと非常に良好な関係を築いている。

### ■ 昨年度の課題の改善点

平成25年度の反省から、スケジュール管理の徹底を意識した。企画毎に事業スケジュールを作成し、サポート間、支援部署で頻繁に共有するよう努めた。しかし、スケジュール設定が現実的でない部分もあり、企画開催がずれこむこともあった。

平成26年度は、講習会開催や小冊子配布の企画を行ったこともあり、配付物を初めて見る人にも分かってもらえるような表現を使うよう心掛けた。まだまだ改善の余地があるが、この経験で培ったスキルを、今後も役立てていきたいと思う。

<b>◆企画名</b>	<u>GIMP 小冊子企画</u>
<b>日 程</b>	<u>平成 26 年 7 月 15 日 (火) ~ 平成 27 年 2 月 9 日 (月)</u>
<b>場 所</b>	<u>関西大学 IT センター、誠之館、各学舎授業支援ステーション付近、 凱風館、新凱風館</u>
<b>参加者数</b>	<u>3 名 (ピア・サポート)</u>
<b>目 的</b>	

- ・関大生のポスター等の広報物制作スキルの向上
- ・i.com の認知度の向上

#### 内 容

本学の学生に対し、画像編集ソフト「GIMP」の使用方法や GIMP の活用方法を紹介する小冊子を作成し置き配布した。

期間：第一版 平成 26 年 7 月 15 日(火)～、第二版 平成 26 年 10 月 15 日(水)～

対象：GIMP を初めて使用する関西大学の学生

内容：画像編集ソフト GIMP を実際に使用し、基本操作や実際に広報物を制作する方法を小冊子を用いて紹介した。

第一版目次

- 1 : GIMP の概要
- 2 : GIMP のインストール方法
- 3 : GIMP による制作物の例

第二版目次

- 1 : GIMP のダウンロード方法
- 2 : 紙に描いた絵を PC に取り込み、GIMP で着色する方法
- 3 : 補足説明

#### 効 果

第一版、二版合計 400 部を分けて各場所に配置・配布し、2 月 9 日 (月) 時点で 8 割が配布済みとなっている。また、GIMP 講習会で行ったアンケート結果から、小冊子を見て講習会に参加した受講者が全体の三分の一であり、講習会の足掛かりとしての役割も十分果たしたと考える。これらのことから、今回の企画が先に挙げた目的を十分に果たしたと考える。

#### 改 善 点

小冊子配置場所を見直す。IT センターやサテライトステーションなど、パソコンが設置されている場所では部数が大幅に減少しているのに対し、各学舎授業支援ステーション付近などでは、さほど減っていないかった。このことから、今後の配置場所として、パソコンを利用出来る場所近辺が望ましいと考える。

#### 感 想

今回の企画は i.com にとって初めて行うことが 3 つあった。GIMP というソフトを使うこと、小冊子を作ること、そして講習会ではなく配布物を通して学生に教えることである。このように、未知数の挑戦だったが、予想以上の結果を得られたと感じている。しかし、次回以降の結果が今回の結果を上回るために、改善点を含め様々な課題をクリアしなければならない。今後の企画をよりよいものにするために、今回の反省を活かし、これからも努力を重ねていきたいと思う。

**◆企画名** i.com Presents IT スキルアップ講座～GIMP でチラシや POP を作ろう！～リハーサル  
**日 程** 平成 26 年 10 月 4 日（土）  
**場 所** 千里山キャンパス サテライトステーション 2  
**参加者数** 3 名（ピア・サポート）  
**目 的**

- ・平成 26 年 10 月 10 日（金）、11 日（土）実施 i.com 主催のイベントのリハーサル
- ・サテライトステーションの機器確認及び使用方法の習得

#### 内 容

サテライトステーションにて、10 月 10 日（金）、11 日（土）に開催する「i.com Presents IT スキルアップ講座～GIMP でチラシや POP を作ろう！～」に使用するサテライトステーション 2 の各種機器使用方法の確認を行った。また、座学講義部分の発表練習を行った。

#### 効 果

後述する理由から、今回の目的であった企画リハーサル、またサテライトステーションの機器確認及び使用方法の習得は達成出来た。

#### 改 善 点

実施場所は今回の講習会で初めて使用するため、机のレイアウト変更、受講生パソコン設置、モニターに講師用パソコンの画面を映すなど、これまでに無かった作業が当日準備に加わることが分かり、当日は予定より早めに集合し準備を始める必要があると感じた。また、受講生への画像配布方法やマイクの使用について、これまでの方法は使用できないことが判明し、新たな方法を考えておかなければならぬことが分かった。

講義部分では、練習中、実施場所の GIMP ソフトは画像保存を行う時、サポートのパソコンで確認していた文言と違い英語で表記されていることが分かり、テキストや説明を対応させる必要を感じた。講師役の説明については、基本的に問題無いものの、言い回しやパソコン操作等に関して、より分かりやすく教えられる余地があると感じた。

#### 感 想

今回の講習会は初めての場所、初めてのソフトということもあり、リハーサルの序盤では戸惑いが見られた。しかし、企画に参加しているサポートは全員講習会経験があるためか、思っていた以上に早く環境に馴染めたように思う。ただし、今回は受講者数がこれまでと比べても一番多いため、これまでに無い状況となることも考えられる。本番までに、実際に受講者が来ることを想定した準備や練習をさらにしていきたい。

**◆企画名** i.com Presents ITスキルアップ講座～GIMPでチラシやPOPを作ろう！～  
**日 程** 平成26年10月10日(金)、10月11日(土)  
**場 所** 千里山キャンパス サテライトステーション2  
**参加者数** 19名(ピア・サポート4名、一般学生14名、学生支援室TA1名)

**目的**

- ・関西大学の学生に対する広報活動の技術支援
- ・受講者のパソコンスキルの向上
- ・i.comの認知度の向上

**内 容**

本学の学生に対し、画像編集ソフト「GIMP」の使用方法についての講習会を行った。なお、講習会は同じ内容を2日間で2回行った。

時間：1日目 18:00～19:30、 2日目 14:40～16:10

対象：GIMPを初めて使用する関西大学の学生

内容：GIMPの基本的な操作に関して、講習を行った。

内容はi.comが9月に配布した小冊子「i.com Presents PC活用小冊子 GIMP編」に沿ったものにした。

操作方法の講義の後は、見本となる画像を用意し、それを受講者に作成させる中で質問へ受け答えし、スキルの習得を支援した。

**効 果**

アンケート集計結果より、今回はGIMPによる画像編集技術やi.comサポートの対応が評価された。今回の企画への感想、要望の欄では「イラストの編集機能に限界を感じていたためGIMPを触るきっかけになりありがたい」、「初心者であったが、非常にわかりやすかった」という声を得ることが出来た。このことから、受講者のパソコンスキルの向上という目的は達成出来た。

**改 善 点**

講義の進行について、受講者はあくまで初心者であることを念頭に入れ、進行状況を確認しながら講義の速度を調節する。また、テキスト作成に関してもサポート間でよく相談し、パソコンの操作に慣れていない受講者がより理解しやすい構成を考えるようにしたい。講習会当日、遅刻者や欠席者が数名いた。よりスムーズに対処するため、講習会前日に一度確認の連絡を入れることを検討する。

**感 想**

今回、初めてPowerPoint以外のソフトウェアの講習会を行った。これまでのノウハウを活かして、講習会の準備に関しては余裕を持って行えたと思う。一方、GIMPは受講者にとっても初めて扱うソフトウェアであり、講義では受講者が進行についていけない場面が見受けられた。このことからテキストや講義スピードに配慮が足りなかつたと感じた。

次の計画として、GIMPのもっと詳しい使い方を紹介する小冊子の配布を予定している。講習会と違い直接相手に伝えることができないため、今回の反省を踏まえ、より相手に分かりやすい内容を考え、受け取った人が満足してくれるよう努めたい。

**◆企画名** i.com Presents IT スキルアップ講座～GIMP で色を塗ろう！～リハーサル  
**日 程** 平成 27 年 2 月 14 日（土）  
**場 所** 千里山キャンパス サテライトステーション 1  
**参加者数** 3 名（ピア・サポート）  
**目 的**

- ・平成 27 年 2 月 24 日（火）に行う i.com のイベント実施に向けたリハーサル
- ・サテライトステーションの機器確認及び使用方法の習得

#### 内 容

サテライトステーションにて、2 月 24 日（火）に開催する「i.com Presents IT スキルアップ講座～GIMP で色を塗ろう！～」に向け、サテライトステーション 1 の各種機器使用方法の確認を行う。

#### 効 果

後述する理由から、今回の目的であった企画リハーサル、またサテライトステーションの機器確認及び使用方法の習得は達成出来た。

#### 改 善 点

サテライトステーション 1 を使用した講習会はこれまでに多く経験してきたため、機器の確認は問題無く行なうことが出来た。時間の都合上、リハーサルで行ったのは中級編の説明のみであったが、これまでに培ってきた講習会での教え方をしっかりと確認出来たように思う。特に、操作説明中は受講者にどこを見てもらうのか、その指示の仕方やタイミングが聞きやすさの鍵となると感じ、意識して改善に取り組んだ。初級の内容は前回の講習会とほぼ同じであるが、中級と同じく気を抜かず、より分かりやすい説明が出来るように努めていきたい。

また、中級はこれまでに無く難しい内容であるため、説明には時間がかかると考えていたが、丁寧に説明しても想定より時間がかかるないことが分かり、説明後の実技部分の内容を濃くすることになった。説明部分はどうしても固く、単調になりがちなため、実技は十分受講者に楽しんでもらえるような内容にしたい。

#### 感 想

今回は、前回に引き続き GIMP を使用した講習会である。前回の経験もあり、操作や説明にも慣れ、より分かりやすくなっているのではと感じた。今回の講習会の中級編はこれまでに無いほど難しい内容であるが、前回より参加者も少ないため、ひとりひとりに手厚く教えることが出来ると考えている。当日は、受講者全員に満足してもらえるような講習会開催を目指したい。

**◆企画名** i.com Presents ITスキルアップ講座～GIMPで色を塗ろう！～

**日 程** 平成27年2月24日(火)

**場 所** 千里山キャンパス サテライトステーション1

**参加者数** 9名(ピア・サポート3名、一般学生4名、学生支援室TA2名)

**目 的**

- ・関西大学の学生に対する広報活動の技術支援
- ・受講者のパソコンスキルの向上
- ・i.comの認知度の向上

**内 容**

本学の学生に対し、画像編集ソフトGIMPの使用方法についての講習会を行った。講習は、GIMPを初めて使う学生を対象とした初級と、内容をより発展させた中級に分けて行った。

**【初級】**

時間：13:00～14:30

内容：画面の見方や操作方法など、基本的な操作に関する講義を行った。i.comが11月に行った講習会「i.com Presents ITスキルアップ講座～GIMPでチラシやPOPを作ろう！～」の内容からレイヤー機能の説明を省いた内容で行った。

**【中級】**

時間：14:50～16:30

内容：レイヤー機能を活用した画像の着色方法に関して講義を行った。i.comが12月から配布した小冊子の内容をより詳しく説明した。

初級中級ともに講義の後、こちらが提示した資料をもとに実際に画像編集する実技を行った。

**効 果**

前回の講習会では、受講者が講義についていけてないという問題点が挙げられた。今回は、講師の説明を聞いてもらう場面と受講生に操作してもらう場面にメリハリをつけた。また、進行具合を補助役のサポートと連携して確認するよう意識した。そのため、初級と中級ともに講義についていけない受講者は見受けられず、スムーズに講義を終えることができた。アンケートの集計結果からも、難しい内容ながらも「わかりやすかった」と高評価を得ることができた。このことから、受講者のパソコンスキルの向上という目的は達成出来た。

**改 善 点**

こちらが提示した資料に不備があり、講義の内容だけでは編集がうまくできない部分があった。補足の説明でフォロー出来たため結果としては良かったものの、用意した資料を実際に問題無く編集できるかということを、事前に確認すべきであった。

**感 想**

前回と同様GIMPの講習会ということもあり、全体的に安定していたと思う。前回の講習会では、講義の進行についていけない受講者が多くなってしまった。その反省から、今回はテキスト作成や説明練習、当日の説明速度調整など細かな部分まで受講者目線を意識するように努めた。これが功を奏したのか、アンケートの集計結果からも、難しい内容ながらも「わかりやすかった」と高評価を得ることができた。

今回の講習会で私達のi.comとしての活動は最後になる。今までに培った経験を活かし、最後の活動として悔いのないものができたと思っている。活動を全力で応援してくださった職員さんやTAさんに深く感謝の意を表したい。

## 2.3 ピア・サポートからのメッセージ

「考える」ことが教えてくれた充実とやりがい

ピア・コミュニティ運営本部 矢野 有理

ピア・サポートの醍醐味は、「自分の頭で考えて、自分の手で作り上げる」ことができるところにあると思います。一つの企画、物事、問題について多面的に検討し、あらゆる視点からの見解と主張を持つことは、誰もが簡単にできることではありません。絞り出した考えを形にしていく作業の中でも、納得できる解決策にまでなかなか落とし込めない問題が度々発生します。良いものを作ろうと、一つ一つ話し合いを重ねて練り直します。このような字面では、気が遠くなるような作業に感じられるかもしれません、実際には、和気あいあいとした楽しく真面目な空間でピア・サポートを充実させられていると思います。

入学当初、私は「大学生だからこそできて、大学生にしかできないこと」をやってみたい、といった非常に漠然とした考えを持っていました。「大学生だからこそできて、大学生にしかできないこと」とはいったい何でしょうか。考え方は十人十色でしょう。趣味やサークルに没頭すること、アルバイトに専念すること、一生懸命勉強すること、どれも大学生らしいと言えます。どれに対してもピンとこなかつた結果、「自發的に考えて行動できる環境で、何かためになることをしたい」というのが私の答えでした。どのような支援を行うのだろう?とピア・サポートに興味を抱いたきっかけにもなりました。そして実際に、恵まれた環境で自分のアイディアを大いに実現させてもらえたことで、自身の成長にも繋がったのではないかと感じています。

今年度は、大規模な企画に挑戦しました。関西大学統一学園祭での広報企画です。休憩所として座れる場所を提供しつつ、ゆっくりしてもらいながらピア・コミュニティを知ってもらうというコンセプトで行いました。私が指揮をとっていたものの、初めての試みで段取りがわからず、スケジューリングができていなかったせいで運営本部メンバーを始め、TA、職員にも多大なるご迷惑をおかけしました。課題も多く残りましたが、運営本部メンバーの協力と奮闘が実を結び、なんとか企画を成功させることができました。この広報企画の大きな収穫は、他コミュニティが広報内容をご覧になった企業から共同企画を依頼され、実現することができたきっかけとなれたことです。私としても運営本部としても楽しみながら活動できたと思うので、今後もピア・コミュニティの知名度向上、企画参加者増加を目指しながら広報活動に力を入れていきたいと思います。

冒頭にピア・サポートの醍醐味は、「自分の頭で考えて、自分の手で作り上げる」ができるところにあると書きました。私たちは先輩になるにつれて、後輩たちがそれを自由にできる環境を整えなければならないと思います。先輩は、進んで後輩の意見を尊重して取り入れ、また後輩自身が主役になれる自己表現の舞台を用意することが必要ではないでしょうか。不安や躊躇いを感じさせず、気軽に話しかけられる雰囲気づくり、そこから生まれ得る、サポート同士の学年を越えた幅広い信頼関係の構築が、ピア・コミュニティの存続と発展、より質の高いピア・サポートの実践に不可欠であり、先輩となっていく私がこれから目指していくべき目標なのではないかと思います。

## 自らを変えるきっかけ

KU ブリッジ 梶谷麻耶

私がピア・コミュニティの存在を知ったのは、関西大学に新入生として入学した、まさにその日でした。恥ずかしながらも私が高校生だった頃は、いかにして面倒臭い事を避けて生きるかに全力を注いでいたかのような生活をしていたので、いつの間にか頑張ることの素晴らしさや、仲間と何かを成し遂げることの達成感というものを忘れていました。そのような過去があり、今これからまた自分の新しい学生生活が始まると思うと、それがまるでこれまでの自分と決別する千載一遇のチャンスかのように思え、沢山の新入生向けのビラを読み漁り、その中からピア・コミュニティ紹介のものを見つけたのです。

実を言うと、ピア・コミュニティに自分のフォーカスを当てたこれといった理由はないのですが、“何をするか”は問題ではなく“何かをする”ということに闘志を燃やしていた私は、すぐに次の日にピア・コミュニティのガイダンスへと向かいました。その当時、たまたまガイダンス担当をしていたのが KU ブリッジの先輩 2 名だったのですが、様々な興味深い、今までの高校生活では自分には無縁だったような活動の数々を聞き、より一層、自分も憧れるだけでなくピア・コミュニティの一員として活動したいと思うようになりました。

国際関係の事柄に興味があった私は、ガイダンス担当者の勧めもあり、KU ブリッジに入ることを決めました。最初の私は、まるで何をしたらいいかわからず、経験とともに徐々に KU ブリッジの留学生や日本人学生にとっての在り方、存在意義、姿勢を理解していくのだと感じます。その中でも自分が痛感することにより重要性を認識したことは、“チームワークの大変さ・大切さ”でした。同じ目標に向かっている仲間同士とはいえ、時にはその間に摩擦が生まれます。やる気の違いったり、方針の違いだったり、その理由は様々ですが、機械的だと勝手に思っていた企画づくりの中には、人間くさくて面倒臭い問題が時として生じるのです。しかし勿論それが全てネガティブに働くのではなく、目標を達成した時や企画を成功させた時に昇華され、仲間としての関係はより強い絆となって結ばれるのです。

小中高とは違い、ホームクラスを持たない大学生の間では、このように学部をまたぎ、また学年をまたぎ、不特定多数の人とこのような経験を持ったり、関わることができるのはそうそうないことだと考えています。部活とは違い、サークルとも違い、ここでしか得られないものがあると、今までの経験を通して胸を張って言えます。そして勿論、今の私はピア・コミュニティの一員となったことで、特に何もせずに生きていたあの頃の自分と比べ、良い意味で毒され、視野も思考の幅も広がり、かけがえのない仲間と共に、自分たちで作り上げた目標に向かって進んでいます。動機は何であれ、自分を 180 度変えるきっかけとなったピア・コミュニティに、心から感謝しています。

## 学びの機会を提供しつつ学びの機会を得る活動

KU サポートプランナー 北村翔太

私がピア・コミュニティに入ったきっかけは、自分自身で 1 から考えて何かを行うということをしたいと思っていた中で、サークルガイドを見ていると、ピア・コミュニティの案内が載っていたため話を聞き、企画を行ううえで 1 番自由度が高そうだった KU サポートプランナー（以下 KUSP）に入ることにした。今思えば数多くあるサークル案内の中からよくピア・コミュニティを見つけたなと思う（笑）。

1 回生の冬に代替わりとともに副代表となり、2 回生の冬から 3 回生の冬までは代表となつた。副代表の時も代表が多忙な人であったため実質的に 2 年間は中心となって引っ張っていく側に立つことになった。私は、この活動では他人とのコミュニケーション能力、職員を論理的に説得する能力、企画を計画段階から反省するところまですべてをこなす計画力、実行力などを養うことができると考えている。また私自身は代表になつたことで、新たな企画を行つた時にゴール地点を見据えて必要なことを行うことやメンバー個人個人の予定との兼ね合いをつけて無理のないように役割を分担すること、メンバーのやりたいことと大学が許可していただけることとのすり合わせを行うことなどによって、相手の立場に立つて考え、広い視野で見ることの大切さをピア・サポート活動で学んだと思っている。一方でピア・サポート活動は、学生を様々な方法で支援するために無償で行う点はボランティアと同様であり、賃金があるアルバイトのように目に見えて得られるものがなければないため、コミュニティへの求心力が弱くなる傾向にあるのでメンバーのモチベーションの維持というのは難しいと感じていた。

私の代ではそれまでの KUSP ではあまり行ってこなかつた講演会を多数開催した。これは、一般学生にとっては滅多に聞けない企業の方等の話を聞く機会となり、KUSP としてもそういった企業の方と関わる経験を得ることができるのは学ぶことが多く、理に適つたものであると思う。KUSP は活動理念が「学生のためになることをする」、「学生の idea を形にする」「課外での学びの機会を提供する」という自由度の高い反面曖昧なものなので、これまでではこれといった強みのないコミュニティであった。これは副代表になつた頃に特に感じていた。自分たちでは一般学生に何かを教えられるほど技能があるわけではない。知名度も低いので idea を持ち込んでくる人もいない。そういう時に担当の職員である松田さんがヒントをくださり、自分たちだけでは無理なら専門知識のある方に頼むという手を使うことにした。学生が求めているものは何かを自分たちで考え、理念の範囲内で出来ることが講演会という形になった。

ピア・サポート活動は、偶然見つけた活動であったが、3 年間続けてきたことで加入当初に思っていたことよりも多くの経験や学びの機会を得ることができた。

## 図書館の良さを伝えるために

KU コアラ 原舞知子

私は2回生になってから図書館を頻繁に利用するようになりました。調べものや勉強、話し合いなど使い方は様々ですが、図書館ではどこか日々の忙しさを忘れさせてくれるようなゆったりとした時間が流れていて雰囲気も心地よく、私が大学の中で一番落ち着ける場所は図書館といえます。その図書館で月ごとにテーマを決めて本を紹介したり、他の団体に連携して写真を展示したりしているKUコアラに興味を持ち、入会しました。

2回生の後半という遅めの入会でしたが、部員の皆は優しく迎えてくれてとても嬉しかったです。KUコアラは主に図書館のスペースを借りて展示物などをすることが多いので、企画を発案し実行する上で図書館事務室の職員の方々との連絡がとても重要であるということを学びました。正しいメールの送り方や敬語の使い方など社会に出てからも役に立つと思います。私はまだ企画の代表者にはなったことがないので、企画を受諾してもらい実行に移す間に重要な書類のやり取りがどれくらいあるのか、それがどれほど大変なことを完全には理解できていませんが、目上の方に対するマナーなどをしっかりと身につけ、これから企画をしていきたいと考えています。

現在は、私がKUコアラに興味を持つようになったきっかけでもある他団体と連携して行う企画の「コアラ☆ミュージアム」の手伝いをしています。図書館を利用する学生の目を引き付け、興味を持ってもらうために、ポスターに貼る色とりどりのポップをたくさん作りました。友達に「あのポスター、すごいカラフルで目立ってた。あれは読んでみようと思う」と言われた時はとても嬉しく4団体が応募してくれたことを知り、少しでも協力できて本当に良かったと思いました。今回の共催団体は関西大学文化会吟詩部に決定し、4月上旬～6月下旬の間で1ヶ月半～2ヶ月程度の期間で作品を展示する予定です。KUコアラと吟詩部の両方の団体の良さが学生に伝わるように企画を進めていきたいです。

ピア・サポート研修では「プランニング」の研修が1番心に残っています。班に分かれて1回生を対象とした企画を考えました。そこで私達の班は、1回生の春学期で自分にぴったりの部活やサークルなどの団体を見つけることができずに迷っている人が、これからでも見つけることができるようサポートするという趣旨で企画を練っていました。4人という少人数での話し合いでしたが、皆が意見を出し合い、自分が考えていなかったような考えを聞くのはとても楽しかったです。研修で学んだことをKUコアラでも活かせたらいいなと思っています。まだ研修を受け終えておらず、ピア・サポートにはなれていませんが図書館ができる新しい企画を考えています。これから図書館や本にはあまり興味がなかった学生が、本を読む楽しさを知り、図書館を好きになってくれるような活動をしていきたいです。

## 「競争」より「協力」を

KU サポーターズ 松岡佳歩

大学に入学した頃の私は、友人は少なく、のめり込める趣味も無く、この広い関西大学で一人取り残された様な気分でした。そんなとき、キャンパス内を散歩していて見つけたのが、凜風館と第四学舎の間にある「ほっこり相談室」。専門家ではなく学生が話を聴いてくれると知り、興味が湧きましたが、残念ながらその日は閉室の土曜日でした。そして時は経ち、気がつけばもう二年生の夏。相変わらず単調な生活を繰り返していた私は、この有り余る時間を活用し、何か人のためになる取り組みがしたいと閃きました。そこでふと思いついたのが、一年前に偶然見つけた「ほっこり相談室」。早速、KU サポーターズの構成員に連絡を取り、説明を受け、即座に志願書を提出しました。その後、私は、本団体に二年半の間在籍し、内一年間は代表を務めさせていただきました。

私にとって最も印象に残っていることは、本団体の主な活動である「ほっこり相談室」内での、利用学生さん一人一人との対話です。話される内容、伝えて下さる想い、移り行く表情や仕草など...。我々人間は、日常生活において、本音を隠して建前で他者と笑い合っている場面も多いかもしれません。それは、生きて行く上で重要な術だと思います。しかし時には、自分の内側に蠢くどろどろとした本音と向き合うことや、ほっと一息休憩してみることも、大切でしょう。今までもこれからも、「ほっこり相談室」が、関西大学生にとっての安心できる駆け込み寺の様な存在であり、また、彼らが前進するための足掛かりとなれることを願います。

また、関西大学生への支援を通じ、私自身も支えられてきました。詳細は省略いたしますが、私は幼少期、いわゆる「問題児」がありました。そのために、21歳になった現在でも、他者を信頼することや、自分らしく生きることが、得意ではありません。そんな私にとって、本団体は、「自分らしさ」を自然に表出できる空間でもありました。それは、私の人生において、初めての、そして奇跡的な経験がありました。

私は、本団体に所属したことで、目の前にいる人々の幸福を自然に願える様になりました。本団体での活動について、団体外の方々にお話しすると、「若いのに偉いね」と褒めていただすことや、「どうして他人のために頑張れるの?」と質問されることが、多々あります。しかし私は、ピア・サポートとは、特別に褒められる行為では無いと思っております。元来、人々が協力し合うことは至極当然の行為であり、そこに根拠を求める必要は無いためです。

今後も、構成員のみなさまは、関西大学生の支援に精を出されることでしょう。またそれと同時に、関西大学外においても、例えば、階段で困っている車椅子の方や、電車内で立っているお年寄りなどに、そっと援助できる人であって欲しいと願います。ピア・サポートは、決して難しいことではありません。

本団体の更なる飛躍を、心より期待しております。

## 2.4 支援部署職員からのメッセージ

ピア・コミュニティの可能性

ボランティア活動支援グループ長 堀律子

大学を取り巻く環境の変化、少子化・グローバル化は、大きな影響を大学に与えています。これまでの研究・教育という機能に加え、社会貢献・地域貢献という機能を果たすことが求められるようになってきました。

平成19年度よりはじまった関西大学の先進的「ピア・コミュニティ」活動は、「考動力ある関大生」の育成を目指し、拡大しています。

その目的は、学生を21世紀型の市民に養成すること、学生の能力をグローバル化の進展による世界と共に通の基準に通用できるようにすることであり、関大人としてふさわしい「社会人基礎力」や「人間力」を身につけ、社会に貢献できる人材となるようにすることです。

しかし、一般学生との相談業務を通して感じることは、コミュニケーションの苦手な学生や受け身の学生が確実に増えているということです。

例えば、・メールはできても、目の前の相手に自分から話しかけることができない。

・与えられた課題に取り組めても、進んで新しいことに挑戦しない。など  
対人関係能力、自己表現能力などの不足は、見えない大きな障害となっています。

社会で必要とされる能力の低下により、就職活動の苦戦を強いいる原因となるからです。

「もったいない」と卒業生が言っています。それは、大学生活を、目的意識なく過ごし、成長の実感のないまま卒業してしまったことの、ほろ苦い思いです。

「学生時代にもっと勉強しておけばよかった。」「もっといろいろなことに挑戦しておけばよかった」「成長できるチャンスをにがしてしまった」などからです。

では、社会に出てから分かった、自分一人では気付かなかつた問題をどう解決すればいいのでしょうか。

ピアは、「誰もが成長する力を持っている」「誰もが、自分で解決していく力を持っている」「人は実際に人を支援する中で成長する」という考え方に基づいています。

それは、学生の可能性が無限であるように、ピア・サポートの可能性もまた無限であることを意味します。

関西大学は、学生の力を生かす仕組みとして、ピア活動を全学的に発展、展開してきました。

しかし、学生の持つ見えない問題を学生に意識させるのは難しく、理解と行動につなげ

るためのプロセスを求め、試行錯誤が続いています。

そのなか、ピア・サポート活動の成果として、ピア・サポータたちの確かな成長があります。ピア・コミュニティの活動や、春と夏の合宿に取り組むピア・サポータたちをみてきました。個人差はあるものの、おどおどしていた新入メンバーが一年たつと、堂々と司会進行を務めたり、後輩メンバーにアドバイスしたり、たくましく成長しています。

ピア・サポータになるための研修、プログラムの企画・運営、コミュニティ内の関係の構築や一般の学生とのかかわりなど様々な経験が人間力を培っています。

生き生きとしたピア・サポート活動を関西大学の全学生に広め、学生同士が互いにサポートすることが当たり前という文化を本学に根付かせ、社会に貢献できる考動力ある関大生を育て、多くの学生が自信を持って本学を卒業していくよう、支援していきたいと思います。

## 私のサポート

図書館事務室 上田夏実

「学生と一番年齢が近いから」と、私は KU コアラの担当になりました。本学の学生だった頃、名前を聞いたことはありましたが名前以外は何も知りませんでした。

約 1 年が過ぎ、「KU コアラは学生の知的な生活を支援するために、主に図書館の利用促進を目的として活動している」と認識しています。そのために、彼らは様々な企画を立案し実行まで責任を持って考動しています。2 年次生を中心だというのにどの学生もしっかりとしているので、話す度に感心してしまいます。そして、図書館事務室はそんな KU コアラの支援部署として企画実現のサポートを行っています。

学生とのやりとりはわからないことでいっぱいでした。どうしても、私は KU コアラの「先輩」という立場で物事を考えてしまうことが多く、「職員」として彼らに関わるとはどういうことなのかをまだ理解できていません。それは支援部署としてだけでなく、今後の職員生活にも繋がる問題だと思っています。また、新米の私が対応できることは少なく、企画内容の確認や他の業務との兼ね合いでどうしても学生を待たせてしまいます。知識と速度がもっとあれば、と常々感じています。

支援担当として悩んでいる最中、夏休みのピア合宿にお邪魔させていただきました。KU コアラだけでなく、ピア全体で行われる合宿です。学生自身が自分たちのサポートスキルを磨くため研修をプログラムし、成長しようとしている姿は本当に眩しいものでした。私はそれまで、事務室に時々来てくれる KU コアラの学生としか接点がなく、その学生との会話も企画についての打合せのみでした。そのため、彼らが普段どんなことを考え、どういった活動をしているのかを全くわかつていませんでした。

しかし、この合宿に参加したことでの事務室に企画を持ってくる前にどんな話をしているのか、計画を実行する前にどんな準備をしているのか、今まで見えていないところも見ることができました。ファシリテーターのような形でプログラムに参加させてもらうこともできたので、自分の中での学生との距離が少し近くなったように感じています。もっと学生と関わっていいんだ、とわかったきっかけです。

本当は、学生が持ってきた企画を淡々と実行まで進めるのではなく、学生と一緒にになって企画を作っていくかたのです。どこまで学生の自主性を重んじるのか、という疑問は浮上してきますが、第一段階として学生との距離をもう少し詰めてもいいのではないかと思うようになりました。ピア・コミュニティの支援部署という立場ですが、彼らからは学生対応の支援を受けているのだな、と感じています。これからも宜しくお願ひいたします。

## i.comとの活動を通して

システム管理課 村田直也

私は関西大学ピア・コミュニティ i.com の支援部署担当として、2011 年から 4 年間、メンバーとともに悩み、考え、嬉しさや悔しさを共有してきました。i.com は関西大学の IT 部門を運営管理する部署が支援部署であり、当初は「学生が求める学生支援を学生自らが実践する取り組み」とは、IT を通じてどのようなことができるのか非常に難しいお題だと感じていました。ですが、心配無用でした。4 年間それぞれのリーダーがメインに、学生らしい企画を提案したことに、よく驚かされました。その企画内容については、ぜひ報告書を読んでみてください。

担当としての醍醐味であるかもしれません、メンバーからの企画、提案に対し、いかに横槍をいれずに、実現にむけてフォローするか非常に頭を悩まされました。学生だからこそ失敗を恐れずに経験を積んでもらいたい、その一心で、一歩も二歩も離れたところから支援することに細心の注意を払いました。企画を思い通りに実施させることで、メンバーはその過程で発生する課題やスケジュール通りに物事を進めるこの難しさを、身をもって経験できたのではないかと感じています。具体的には企画立案時には少々の懸念点があってもその時点では指摘せず、問題が発生し悩み煮詰まったタイミングで、企画立案時の反省を踏まえて課題の洗い出しやスケジュールの再作成など、一つずつお話ししながらスキルをつけてもらい、課題解決案を考えもらいました。

i.com だけに限らず、失敗成功に囚われず、一つ一つの壁に正面からぶつかり、メンバーと共に解決に向けて尽力する経験ができる、学生だからこそ失敗を恐れずに思い切って実践できる場の一つが、関西大学ピア・コミュニティではないでしょうか。メンバーのすぐ後ろには先生方や我々職員という人生の先輩がフォローについています。私が学生時代にこのようなフィールドに立つことができたならば、とよく感じたものです。社会人スキルをつけたい、グループをまとめ企画を実行する経験がしたい、なにか課外活動をしてみたい、理由やきっかけはなんでもいいと思います、学生生活にもう一歩踏み込んだ経験を積みたいと感じているならば、ぜひこのフィールドを活用してほしいと思います。



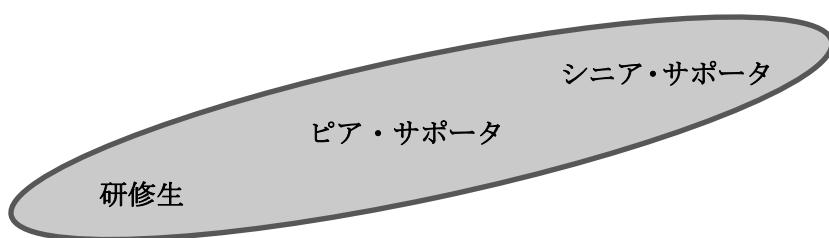
### **3 ピア・サポートの育成**

### 3.1 ピア・サポートの育成

これまで、正課教育科目「関西大学ピア・コミュニティ入門」を中心とし、「関西大学ピア・サポート研修」や日常の活動支援等を通して、ピア・サポートの育成を行ってきた。例年100名前後の学生がピア・コミュニティに所属し、ピア・サポート活動の実践を行ってきたが、本学においてピア・サポート活動により継続的・発展的に取り組んでいくためには、これまでの学生センターやピア・コミュニティを支援する教職員（支援部署を含む。）、TAを中心とした取り組みに加え、学生自身による活動の継承が重要であるということから、学生自身によるピア・サポート活動の継承を促進するための仕組みのひとつとして、平成26年度、シニア・サポートを新設した。

ピア・コミュニティにおける学生の位置づけ、およびピア・サポート、シニア・サポートの認定条件は以下のとおりである。

#### 【ピア・コミュニティにおける学生の位置づけ】



	研修生	ピア・サポート	シニア・サポート
基礎資格	学部生／大学院生	学部生／大学院生	学部生／大学院生
保有するスキル・知識等	ピア・サポートの認定条件を満たしておらず、単独でピア・サポート活動を行うことはできない者。	ピア・サポートの認定条件を満たし、ピア・サポート活動を行うために必要なスキル・知識等を持つ者。	シニア・サポートの認定条件を満たし、ピア・サポート活動に関するアドバンストなスキル・知識等を持つ者。
活動の範囲	所属するコミュニティでのピア・サポート活動。	所属するコミュニティでのピア・サポート活動。	所属するコミュニティでのピア・サポート活動、および学生によるピア・コミュニティの継承に関するここと。

## 【ピア・サポートおよびシニア・サポート認定条件】

### ピア・サポート認定条件

- ・ピア・サポートの認定条件は、「関西大学ピア・サポート研修」受講修了とする。

### シニア・サポート認定条件

- ・シニア・サポートの認定条件は、ピア・サポートとしての活動歴（1年以上）と、正課教育科目「関西大学ピア・コミュニティ入門」の単位修得、およびスキルアップ講座のうちコア講座1つ以上を含む計3つ以上の受講修了とする。

「関西大学ピア・サポート研修」および「スキルアップ講座」の詳細については次ページ以降でふれるが、平成26年度は3名のピア・サポートがシニア・サポートの認定条件を満たし、シニア・サポートとなった。なお、シニア・サポートには、シニア・サポートIDカードとネックストラップを進呈した。

これまで、ピア・サポートの上位資格は存在せず、またピア・コミュニティ合宿等で教職員からピア・サポートに期待すること等のメッセージを発する機会はあるものの、ピア・サポートとなった学生に対する体系的な育成プログラムはなかったことから、ピア・サポートたちのモチベーションを刺激し、ピア・サポート活動に係るより高度な学びと実践のサイクルを実現するものとして、スキルアップ講座を整えることができたことは大きな意義があった。

今年度は、導入初年度ということもあり、シニア・サポートおよびスキルアップ講座に対する学生の認識や関心は決して高かったとは言えないが、周知徹底を図るとともに、シニア・サポートとなった学生たちが活躍する姿を通して、ピア・サポートとなってからも様々なことを学び、よりよいピア・サポート活動の実践を目指して研鑽を重ねていくという文化を浸透させていきたい。

また、シニア・サポートの数やその活動内容を拡充し、シニア・サポートとなった学生が、関西大学におけるピア・サポート活動の継承について自覚と責任を持ち、その一端を担うようになることで、個人として成長することはもちろん、学生間で蓄積されてきた経験やノウハウを着実に次の世代へと引き継ぎ、組織としても成熟を深化させていくができるようにしていきたいと考える。

### 3.2 関西大学ピア・サポート研修

1 実施目的 ピア・サポートとしての自覚を促すとともに、ピア・サポート活動をするために必要な知識・スキル等を身につけてもらうことを目的とする。

2 対象 ピア・コミュニティ研修生

3 実施日時・実施場所・受講者数

	内容	実施日時	実施場所	受講者数
①	ピア・サポート概論	6月24日（火）18：00～19：00	凜風館4階 会議室	11名
		6月25日（水）10：40～11：40		4名
		9月2日（火）9：30～10：30	凜風館4階 ミーティングルーム2	6名
		12月17日（水）14：40～15：40		5名
		3月18日（水）9：30～10：30	第2学舎 C502教室	2名
②	自己理解	6月25日（水）18：00～19：30	凜風館4階 ミーティングルーム2	9名
		9月2日（火）10：40～12：10		9名
		12月19日（金）16：20～17：50	第2学舎 C502教室	6名
		3月18日（水）10：40～12：10		2名
③	コミュニケーション	6月25日（水）16：20～17：50	凜風館4階 ミーティングルーム2	11名
		9月2日（火）13：00～14：30		6名
		12月17日（水）18：00～19：30	第2学舎 C502教室	6名
		3月18日（水）13：00～14：30		2名
④	プランニング	6月30日（月）14：40～16：10	凜風館4階 ミーティングルーム2	11名
		9月2日（火）14：40～16：10		6名
		12月19日（金）18：00～19：30	第2学舎 C502教室	9名
		3月18日（水）14：40～16：10		1名

※①～④それぞれについて、いずれかの日程に参加。

※①～④すべてを受講することにより、「関西大学ピア・サポート研修」受講修了となる。

4 概 要 本研修は、学生支援室 TA9名（池口・石橋・小黒・河崎・木岡・佐藤・高山・濱田・松本）とともに考案・実施したものである。

具体的には、①②③については昨年度実施したものをベースに、所要時間の拡大に伴い、内容をさらに充実させる形で実施した。④については昨年度実施した「TA自主研修」の内容等を参考にしつつ、企画立案時に活用できる手法も盛り込んだ。

	内容	所要時間	実施担当
①	ピア・サポート概論	60分	吉田
②	自己理解	90分	6月25日：石橋 9月2日：松本 12月19日：石橋 3月18日：松本
③	コミュニケーション	90分	6月25日：木岡 9月2日：木岡 12月17日：木岡 3月18日：佐藤
④	プランニング	90分	池口

①では、まず各自の「サポート」に関わる経験を振り返り、サポートをしたりされたりすることのあたたかさや、サポートすることで自分も何らかの影響や刺激を受けていること等を認識してもらった。続いて、ピア・サポートとしての自覚をもって活動してもらえるよう、ピア・サポートの歴史や、ピア・サポートとは何かということ、関西大学にピア・サポートを導入した背景や、関西大学における取り組み、またピア・サポート活動を行ううえでの注意点などを説明した。

②では、他者を支援する活動の基盤となる自己理解そして他者理解について、エニアグラム（心理学的類型理論）を取りあげ、多様な性格パターンの存在を知ることを通して、人間の多様性や、習慣化された自己の言動について認識してもらう機会とした。

③では、日々の日頃のコミュニケーションを振り返るとともに、ピア・サポート活動を行う際に必要となる、話し手の気持ちを汲み取る「傾聴」と、聞き手が理解しやすいように「自分の意見を明確に伝える力」を身につけられるよう、ワーク中心で学んだ。

④では、プランニングの概要を説明するとともに、どういった目的で誰を対象に何をするのかといった立案や、具体的に何をいつまでに実行するのかといったスケジューリングについて、チェックリスト等でおさえるべきポイントを確認しつつ、グループワークで体験した。

5 所 感 学生支援室 TA が担当する②③④について、継続 TA と新規 TA がペアとなって、準備・実施を行った。

②③については、昨年度のアンケートでも評価は上々であったが、新規 TA が実施することを想定して準備を行ったことで、新規 TA 自身が理解したうえで説明できる内容へと工夫され、受講者にとってもよりわかりやすい内容になったのではないかと思われる。

④については、今年度新たに実施したプログラムであったため、初回はやや内容を詰め込み過ぎたことによる時間不足があったが、実際の活動に直結している内容であり、受講者の反応もよかったです。回を重ねるごとに内容が精練され、また時間配分も改善され、良いプログラムになったのではないかと思われる。

「関西大学ピア・サポート研修」全体として、所要時間の拡大および新規プログラムの追加により、内容をこれまでよりも充実させることができたと思料する。しかしながら一方で、全プログラムを受講修了せず、ピア・サポートとなれない学生が少なからず発生した。

今後は、研修内容をブラッシュアップするだけでなく、研修に対する意欲を高め、研修生全員が研修生登録をした年度内に必ず全プログラムを受講修了し、ピア・サポートとなるような働きかけについても検討していく必要がある。

### 3.3 スキルアップ講座

**1 実施目的** ピア・サポート活動に関するアドバンストなスキル・知識等を身につけ、より多角的で質の高いピア・サポート活動を行えるようにするとともに、ピア・サポートとしての意識を高め、ピア・コミュニティの継承を行う人材を育成することを目的とする。

**2 対象** ピア・サポート

**3 テーマ・概要・実施日時・講師・受講者数**

	テーマ	概要	実施日時	講師	受講者数
コア講座	思いやりを形にする	他者への思い、思いやりを形に表すことの大切さを考え、実践・演習する。	2月17日(火) 13:00～14:30	教育推進部教授 正課教育科目担当者 三浦 真琴	8名
	振り返りで自分を豊かに育てる	振り返りの持つ教育効果を深く考え、実践・演習する。	2月17日(火) 14:40～16:10	教育推進部教授 正課教育科目担当者 山本 敏幸	8名
	コミュニケーションを深化させる	他者との信頼感づくりに重要なコミュニケーションスキルについて考え、実践・演習する。	11月13日(木) 18:00～19:30	正課教育科目担当者 田上 正範	9名
選択講座	ピア・サポート詳論	ピア・サポートについて、より専門的な知識が得られるようする。	10月6日(月) 18:00～19:30	教育推進部特任助教 元学生支援室 TA・RA 山田 嘉徳	7名
	関西大学を知る	関西大学の歴史や概要を知り、帰属意識の形成を促進する。	7月2日(水) 18:00～19:00	学校法人関西大学 法人本部長 五藤 勝三	15名
	傾聴トレーニング	傾聴スキルを身につけ、よりよいサポート活動が行えるようする。	11月14日(金) 18:00～19:30	学生相談室相談員 鶴飼 柔美	10名
	ボディワーク	ピア・サポートについて、ボディワークを通して体感し、理解が深められるようにする。	6月28日(土) 13:00～14:30	鳴門教育大学予防教育科学センター研究員 元学生支援室 TA 村上 祐介	9名
	ストレスマネジメント	サポートする側がバーンアウトしてしまわないよう、ストレスとの上手なつきあい方について学ぶ。	12月22日(月) 13:00～14:30	臨床心理士 学生支援室 TA 河崎 俊博	4名

※受講者数には、ピア・サポートの他、学生支援室 TA、支援部署教職員を含む。

4 所 感 正課教育科目担当者を始め、これまで本学のピア・サポート活動支援に携わり、かつ専門的知識を有する方々の協力を得て、コア講座 3 つ、選択講座 5 つ、合計 8 つの多彩な講座を実施した。ピア・サポート活動に対する理解のある方々に講師を担当していただくことができたため、いずれの講座も、ピア・サポート活動で役立つアドバンストなスキル・知識等を身につけられ、さらにピア・サポート活動以外の場でも役立てることのできる充実した内容となっていた。

受講者アンケートでも、「普段考えない、感じないことをたくさん気づかせてもらえた」「相手のことはもちろん、自分のことも大切にしないといけないとわかった」「これからもっと関西大学について知りたいと思った」「スケールの大きい話を聞くことでピア・サポート活動に対するモチベーションが上がった」「ピア・サポート同士の交流の機会としてもよい場だと思った」「考えを整理する際や自分以外の人の事情を想定する際に可視化することが非常によい手法であるとわかった」のような記入が見られ、多くの学びや気づき、動機づけの機会となったことが伺い知れる。

実施時期について、なるべく多くのピア・サポートに参加してもらえるようにと分散させたが、受講者数が想定していたよりも伸びなかつたことは課題のひとつである。参加者募集の際に講座内容・魅力を伝え受講意欲を促進するとともに、周知のタイミングを早くするなどして予定に入れやすくすることが肝要であると思われる。

スキルアップ講座で学んだことがピア・サポート活動で活きることで学ぶ喜び・面白みを実感し、新たな学びを自ら求めていくような「知の循環」を、スキルアップ講座を通じて促進していきたいと考えている。より多くの学生の知的好奇心を刺激できるよう、今年度実施した 8 講座をベースとしながら、新たな講座の実施も模索していきたい。

### 3.4 効果測定

- 1 実施目的 ピア・コミュニティに所属する学生を対象に、①自らについて振り返る機会を提供し気付きを促すこと、②その気付きを集約しピア・サポート活動を行うことの効果としてまとめることを目的として、「ピア・サポート活動に係るアンケート」を実施した。
- 2 対象 研修生、ピア・サポート、シニア・サポート
- 3 実施方法 平成 27 年 2 月～3 月の間、ボランティア活動支援グループ職員が、各コミュニティのミーティングに出向き、15 分程度で実施。なお、アンケート未回答者に対しては、各コミュニティ代表者を通じてメールを送信し、メールでの回答も受け付けた。
- 4 回答数 55 件（メールでの回答 6 件を含む）
- 5 概要
- ・「社会人基礎力尺度」（関西大学版）【山田・押江・田中、2009】を「ものさし」として自己評価し、気づきを得る。
  - ・ピア・サポート活動を始める前、もしくは 1 年前と変化したと思う項目について、自由に記述することで振り返る。
  - ・なぜそのような変化が生じたか（生じなかつたか）を自由に記述することで振り返る。
- 6 整理方法 「広がれ！学生自立型ピア・コミュニティ」は、ピア・サポート活動での様々な体験を通して、社会人基礎力や他者を思いやる豊かな人間性の涵養を図る取組である。よって、学生から得られた主な回答を、社会人基礎力※で挙げられている「12 の能力要素」および「他者を思いやる豊かな人間性」で分類した。  
なお、個人の特定につながる表記については、一部変更・削除を行った。  
※「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え方」、「チームで働く力」の 3 つの能力（「主体性」「課題発見力」「発信力」等の 12 の能力要素）から構成されており、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として、経済産業省が 2006 年から提唱している。
- 7 回答
- 問 I. ピア・サポート活動を通して生じた変化はありますか？過去（活動期間が 1 年未満の方はピア・サポート活動を始める前、活動期間が 1 年以上の方は 1 年前）のあなたと

比較して、自由に書いてください。

問Ⅱ. なぜそのような変化が生じたのか（生じなかつたのか）、気づいたことを自由に書いてください。

問Ⅰ	問Ⅱ
【主体性】物事に進んで取り組む力	
・指示されたこと、頼まれたことしかできない、しない状態だったが、今では、今何が必要か自分で考え、こなすことができるようになった。	・1回生の春のときに経験した活動と役職を任せられたことが、変化が生じた大きな要因だと思う。指示される側から指示する側になったことで、メンバーとどう一緒に活動していくか、今何が必要になるかを考えるようになった。
・他者の立案企画でも、積極的に何かできることがないか常に意識するようになった。	・チーム一丸となって動くことの大切さを実体験を通して知ることができた。
・率先して物事を行うようになった。	・少人数の団体であり、企画者がしっかりとしていないといけない状況に身を置くことが多かったから。
・自分から何かしようと思うようにしている。	・自分で、“案から作って実施すること”はおもしろいと思っているから。

【働きかけ力】他人に働きかけ巻き込む力	
・自分でやることの限界や人と協力することの強さを学んだ。	・自分のコミュニティのサポート、他のコミュニティのサポート、見守りつつ、助けてくださる職員さんと近い距離で頑張つていけたことが大きいと思う。
・他者と協力し合うことが活動において大事だということがわかるようになった。	・多くの人と関わる機会が増え、自分一人ではできないようなことでも、他の人と協力するとできることがあるということがわかったから。
・一人で抱え込まずに、大変な時は人に頼れるようになった。	・ピアでの活動とその他の活動の両方が忙しかった時、どちらも中途半端になってしまい、一人でできないときは助けを求めることが大切だと気づいたから。
・以前はワンマンで物事を進める癖があったが、企画責任者としてコミュニティのサポート全員が計画の進行状況などを把握できるよう努めるようになった。	・担当企画の計画・進行表を作成し、SNSにアップしたものを見つけるよう他サポートに伝えていたが、認識にずれが生じてしまっていた。また、自分では大したことではないと考えていた誤差が他サポートにとっては違っており、どんなさいなことも報告が必要だと学んだ。
・その場で話を進めるリーダーシップが少し身についた。	・少人数の団体であり、企画者がしっかりとしていないといけない状況に身を置くことが多かったから。
・組織や協同で作業することについて考えさせられた。	・大学側に学生の自主性を尊重してもらっているので、自分たちの考えを活動にいかすことができ、自分に深く関わっていることとしてピア・サポートに取り組むことができているからだと思う。

【実行力】目的を設定し確実に行動する力	
・1年前の自分には欠けていた計画力、実行力、感情コントロール力などが、確かに付いてきていると感じた。	・代表をやっていく上で、先々のことを考えて動く力、皆の意見をまとめる力などは、自然についたものだと思う。

【課題発見力】現状を分析し目的や課題を明らかにする力	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のコミュニティの状況がわかるようになり、今後のことにも少しずつ考えるようになった。</li> <li>・常に相手や周りの人が何を求めているのか、何が1番必要とされているかを考えて、それに合った物事を考えたり実際に行動する意識を持って動けるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・様々な活動に参加することによって、たくさんの方とお会いしてお話しする機会を得られていることだと思う。</li> <li>・常に相手が何を求めているか、何を必要としているのかを考えて、それを企画として発案するようにしてきたから。</li> </ul>

【計画力】課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・複数人で何かをするとだいたい遅れが出たり止まったりすることを理解した上で計画できるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピアで様々な企画の進行を見、それでどれくらい困るかを見てきたから。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・もともと計画を立てて、その進捗を気にしながら実施することが好きで得意な方だったが、それがさらに洗練され、またその計画を行おうとする積極性も増した。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・コミュニティでの活動はまっさらの状態からアイディアで作り出すような活動で、様々な企画を行ってきたので、数を多くこなしてきたことは大きかったと思う。また、自主性は尊重されながらも、実施には大学の許可もいるので、ピア・コミュニティの視点、参加学生の視点、大学の視点などから考える必要があり、広い視点で物事を見ることの大切さを知ったことも大きいと思う。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・企画等、他者が関わるイベントを行う際、多大な時間と労力が必要であり、また労力のかけ方が悪いと実現できないことを知った。しかし、その時実現できなくてもその後に生かせることもまた気づいた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めて企画を主となって実現しようとした時、できなかったこと。また、その後後輩にその時の準備で得た知識を伝えられたため。</li> </ul>

【創造力】新しい価値を生み出す力	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画を進めていく上で、多種多様な意見があり、少しずつ取り入れることで、計画自体を研磨する術を学んだ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・夏合宿等のイベントに参加、計画を進めていく過程で多くを学んだ。また、優秀な先輩から計画への姿勢等、多くを学んだ。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・アイディアや解決策を考えることが少し出来るようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・同じ目的を持った良い仲間に出会うことができたから。それと同時に、様々な人から学び、良い影響を受けることができて、大変良かった。</li> </ul>

【発信力】自分の意見をわかりやすく伝える力	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・どんなに些細なことでも発言することで、行き詰っていたことや、新たな方向性が見つかるなどを活動を通して知り、思ついたことがあれば言うようになり意識が変わった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・上回生の先輩方の姿を見て、自分の意識の低さや、消極的な姿勢を改善しなければならないことを強く感じた。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・約1年前は本当に無口だったが、会議や企画を通して、自分の考えをまとめ、口に出すことができるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・所属コミュニティや他コミュニティの色々な人と交流し、活動している様子を見て、学ぶことができたから。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・少しだけ発言できる量が増えたように思う。とりあえず、思ったことは言ってみるようにはできるようになってきた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他のサポート達を見てきたから。思いついで発言して共有しないともったいないと思ったから。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・以前よりは自分の意見をもって発言できるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・意見を言わないといけない場に恵まれたから。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の意見に根拠を持たせられるよう意識できるようになった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・あることについて意見を求められる機会、自分でよく考えて動く機会が増えたからではないかと思う。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ファシリテーションを意識した話し合いの進め方が実行できたり、話し合いで発言できたりなどの変化があった。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ピア・サポート活動の中で、様々な企画をしたり、話し合いの場があったりしたからだと思う。また、自分一人だけではなく、いろんなことを教えてくださった先輩方や、発言できるように配慮してくれた同期の人たちがいたからだと感じている。</li> </ul>

【傾聴力】相手の意見を丁寧に聞く力	
・自分の意見を述べる、他者の意見を聞く等の際の姿勢が変わった。	・意見を交わす場に参加する機会が増えたため。
・日常生活の中で傾聴を心がけるようになった。	・ワークや研修の影響。
・相手のタイミング、雰囲気、表情などをよく読みとれるようになった。	・傾聴のトレーニングが大きかったと感じる。自分の発した言葉がどのように相手に届くのかを強く考えさせられた。

【柔軟性】意見の違いや立場の違いを理解する力	
・相手の都合や立場を考えながら、ものごとを進める心がけができるようになった。	・メンバーがそのようにふるまってくれたから。私が与えられた仕事に手間どっているとき、メンバーが私のサポートをしてくれて、ワンマンではなく、チームで動く大切さに気づいた。
・様々な考え方等があるというおもしろさに気付いた。	・年齢や立場が違う多くの人と関わる機会が多くあるから。
・普段、会議でしているような議題に対して、色々な意見が出て、自分の考えにない案が出ると、面白いなと思うこと。	・仲間内で議論をするという機会は以前にはなかったから。
・固定観念にとらわれることなく、広く物事を考えられるようになった。	・利用者の方から様々なことを教えていただけたためだと思う。
・多様な価値観を知ることにより教養が深まった。	・必要とされるスキルを補おうとするうちに自然に身についたように思う。

【情報把握力】自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力	
・物事を俯瞰的に見ようとする習慣がついた。	・代表を経験し、その役職を次の代に受け継いでからは、自分が活動に参加できなくなる今後について考えることの必要性を感じた。また、活動の中心から少し離れることで、これまで見ることのできなかった側面なども見られるようになった。
・客観的に自己や所属する組織について考えることができるようになった。	・コミュニティがどういう方向へと成長していくべきか、どうすればいいかを考えているから。

【規律性】社会のルールや人との約束を守る力	
・自分のやることに責任を持ち、期限までにできるように努力するようになった。	・ピアでの活動とその他の活動の両方が忙しかった時、どちらも中途半端になってしまい、一人でできない時は助けを求めることが大切だと気づいたから。
・目上の方へのメールのしかたや各種書類の書き方を身につくことができた。	・コミュニティに所属した直後、まっさきに支援部署の方へあいさつのメールを出すよう言われたことをきっかけに、ビジネスシーンで用いるスキルがぐんぐん身についていったと感じられる。
・責任のある仕事を任せられたりもするようになり、自分に責任感がうまれたと思う。	・他の人も頑張っているのだから、自分も頑張ろうと思えるようになったから。

【ストレスコントロール力】ストレスの発生源に対応する力	
・精神がタフになった。	・メンバー間で生じた摩擦から色々大切なことを学べた。
・ストレスを解消するのが上手くなった。	・同じ目的を持った良い仲間に出会うことができたから。それと同時に、様々な人から学び、良い影響を受けることができ、大変良かった。

【他者を思いやる豊かな人間性】	
・役割や仕事量の偏りについて考えたり、みんながピア・サポートについてやりがいを感じられるようにといった、他者への配慮の気持ちが生まれた。	・私一人だけが躍起になんでも組織は機能しないので、みんなが同じ心構えでピア・サポートができる環境、サポート個々が主体的に活動できる雰囲気を作ることが大切だと思ったから。
・自分本位でなく、メンバー全員のことを考えるようになった。	・代表になったので、メンバー全員に気を回す必要があったから。
・人の気持ちを常に考えるようになった。	・人の気持ちを考えたり、毎回の企画でたくさんいろんな障害にぶつかって乗り越えたから。また、イベントのターゲットがどんな気持ちになってくれたらいいなとかを常に考えたから。
・相手のことを考えるようになったと思う。	・高校生のときは違い、大学生になって大人としての対応が求められる機会が増えたからだと思う。

【その他】	
・人間関係が広がった。	・他人と触れ合い、自分とは違う価値観があることを知ることで、自己理解・他者理解が深まった。先輩や同期らと助け合って活動ができ、人を信用することを学んだ。
・人と接する時に、相手の目を見て話すことが非常に苦手だったが、活動を通じて以前よりは相手の目を見て話すことができるようにになった。	・活動時に相手の目を見るように意識的にすることで、自然と普段から相手の目を見て話せるようになったのだと思う。
・PowerPoint、Wordなどの扱い方が上手になった。	・活動を通じて PowerPoint、Word を使用する機会が多くだったので、自然と扱いが上手になったのだと思う。
・視界が広がった。よりグローバルな考えを持てるようになった。	・まわりの人が旅行が好き。海外が好き。
・海外志向が強くなり、外国への興味が強くなった。	・留学生や自分よりも意識の高い人と交流することで意識に変化が生じた。

6 所 感 ピア・コミュニティに所属する学生を対象に、「ピア・サポート活動に関するアンケート」を実施したが、予想以上の結果が得られたというのが担当者としての率直な感想である。

各学生の資質、志向性がそれぞれ異なること、ピア・サポート活動以外の活動の影響を取り除くことが困難であること、また回答は主観的なものであることから、ピア・サポート活動の効果として立証したり数値化できるようなものではないが、学生自身にとって、自らの活動の意味づけを行ったり、自らの現状・変化・成長を認識し、今後の課題を認識する機会という点では大きな意義があったと考える。

本アンケートを、学生の気付きを促す仕組みのひとつとして継続して実施していくとともに、その整理方法について検証を重ね、ピア・サポート活動の効果として内外に発信していくようにしていきたいと考える。

## 4 学生支援室の活動報告

## 4.1 学生支援室の役割と主な活動

学生センター内に設置されている「学生支援室」では、正課教育科目の支援をはじめ、正課外教育プログラムの実施（ピア・サポータへの研修を含む。）やピア・コミュニティの支援等を行っている。

ここでは、TA（ティーチング・アシスタント）が中心となり活動を行っており、上述の全般的な補助業務とともに、ピア・サポータに対する助言を、教職員とともに協働して行っている。また、学生と大学がうまく連携できるように橋渡し的な役割も果たしている。

平成26年度の特筆すべき活動としては、研修生がピア・サポータとして活動するために必要となる知識・スキル等を身につけてもらうことを目的とする「関西大学ピア・サポート研修」を拡充し実施したこと、そしてピア・コミュニティへの支援の質を向上させるとともに、TAのメンバーに交代が生じる際にも支援体制を維持し、継続的・安定的に学生支援室の機能が果たせるようとする新規TAを対象とした研修プログラムを実施したことが挙げられる。

これらを通して、今後も継続的そして発展的にピア・サポート活動を行っていくために必要となる知識・スキル等の共有や伝承を行い、さらにはピア・サポート活動に携わる人同士の繋がりを強めることができた。

TAは、正課教育科目と正課外教育プログラムのどちらにも関わる存在であり、その果たす役割は大きい。また、ピア・コミュニティ支援を行うには、ピア・サポートに関する専門的知識やピア・コミュニティに対する理解等が必要となるが、教職員については、役職者の変更や人事異動による交代が避けられないことから、質的・量的に十分なピア・コミュニティの支援を継続的に行うためには、TAの存在が重要となる。

TAと教職員の連携をさらに強化しつつ、ピア・サポート活動を学生たちと共に育む機関として、今後も学生支援室を継続して運営していく所存である。

## 4.2 新規TA研修

### 「新規TA研修」報告書

#### 1 実施の経緯と目的

学生支援室TAは、本学のピア・サポート活動において、正課教育科目「関西大学ピア・コミュニティ入門」の支援はもちろん、ピア・コミュニティの活動支援やピア・サポートからの相談対応、ピア・サポート研修の実施等、非常に重要な役割を担っているが、それらの対応は、TA各自の研究活動や支援活動で得られた経験則に依拠して行われてきた。

しかし、TAにも世代交代があり、今後も継続的に安定したピア・サポート活動支援を行っていくためには、TAとしてピア・サポート活動支援を行う際に必要となる基礎的な知識や技能、姿勢を整理し、それらを習得するための研修プログラムとして策定する必要があるということで、「平成25年度報告書」に記載のとおり、「新TAのための研修プログラム（試案）」（表1）としてまとめた。

「新規TA研修」は、この試案をもとにTAのニーズやピア・コミュニティの状況等に鑑み実施したものである。

表1 新TAのための研修プログラム（試案）

講義形式	ワーク形式
ピア・サポートの理念	傾聴
ピア・サポートとは（学会・本学）	ファシリテーション
ピア・コミュニティと支援部署について	メディエーション
学生支援室とTAの活動	プランニング
TAとしての心構え	自己理解
正課授業と授業中の関わり方	他者理解

#### 2 参加者 学生支援室TA（継続TAについても、受講者または講師として参加）、ボランティア活動支援グループ職員

※一部プログラムについては、ピア・コミュニティ支援部署職員も参加

#### 3 概要

平成25年度は、学生支援室TAとして2年以上ピア・サポート活動支援に携わっていたり、学生支援GP当時もTAとして関わっていたりと、経験豊富なTAが複数名いたことから、平成25年度中に、「新TAのための研修プログラム（試案）」に基づき、文書化して伝えられるものについては文書化し、平成26年度に活用できるようにした。

また、新規TA研修の準備・実施はTAとして業務（支援活動）を行いながら進めることとなるため、なるべく負担が生じないよう、既存の資料や取り組みで活用できるものについては活用すべく、実施方法〔講義／ワーク／書面／日常（OJT）〕について検討を行い、TAとして支援活動を行うにあたって必要となる度合いやタイミングにより優先順

位をつけ、実施した。

表2 平成26年度 新規TA研修

研修項目	方法	実施日
ピア・サポートの理念	講義・書面	4月23日
ピア・コミュニティと支える人々	書面	—
TAとしての心構え	講義	4月23日
正課授業（授業目的と今までの流れ、TAの役割）	講義・日常	4月9日
コミュニティ支援（担当コミュニティについて知る）	書面・日常	—
コミュニティ支援（サポートとコミュニケーションをとる際の大事なところ）	ワーク	4月23日
コミュニティ支援（コミュニティの活動の流れ）	講義・日常	6月11日
コミュニティ支援（会議）	日常	—
コミュニティ支援（書類作成）	書面・日常	—
担当部署職員との連携	日常	—
TA同士の連携	日常	—
自己理解・他者理解	ワーク	4月30日

#### 4 所 感

新規TA研修は、昨年度から継続して準備してきたもので、多くのTAの協力を得て、今年度実施に至ることができた。昨年度中に経験豊富なTAの知見を集約し、個々に保有していたものを文書化、共有できるようにしたことが功を奏したと思料する。

支援活動を行いながら研修を行うのは、時間的にもキャパシティ的にも難しいところがあり、研修（講義・ワーク）として想定していた内容すべてを実施できたわけではないが、TAとしてピア・サポート活動支援を行う際に必要となる基礎的な知識や技能、姿勢を整理したことで、それらを引き継ぐ・習得する必要があるという共通認識を持てるようになったことは大きな意義があった。

今後、TAの世代交代は一層進むことが予想されることから、TAによる様々な支援の質を維持・向上させていくために、新規TA研修を充実させることは喫緊の課題である。よりよい研修の実施により、必要なことを身につけたうえで支援に臨めるようになることで、TAの心理的負担が軽減されたり、TA自身の学びや気づきが深まったり、またピア・サポート活動にTAとして関わることへのやり甲斐・モチベーションの向上にも繋がると考えられることから、TAと意見交換を重ねつつ、よりよい新規TA研修の実施に向け、継続して取り組んでいきたい。

#### 4.3 学生支援室 TA からのメッセージ

TA としてピア・サポートに関わって

学生支援室 TA 池口愛

2014年3月、同じ研究科の先輩にご紹介いただいた事をきっかけに、ピア・サポートに関わることになりました。最初は、ピア・サポートという言葉すら知らなかつた私は、「ボランティア」という活動に関わることで、就活用に向社会的な話し作りの役にでも立つかな、という安易な考えのもと参加することを決めました。参加を決めた動機は不純でしたが、実際にピア・サポートに関わり、関西大学の独自の支援形態であるコミュニティの実態を知るにつれて、ピア・サポート活動自体に興味を持つようになり、半年も過ぎれば、学生時代に私もサポートの一員として関わってみたかったと悔やまれるほど、充実した一年を過ごすことができました。

これまで、私が関わってきた「ボランティア」といえば地元奈良のお祭りサポートぐらいしか経験がなく、関西大学で行われている様々なボランティアや支援活動に関わったことはありませんでした。関西大学での活動としては、学部時代に、関西大学統一学園祭実行委員会の一員としては活動していました。この活動経験からわかるように、私は誰かに楽しいと思ってもらえるような特別な時間を提供するような事が大好きです。ここで得られた経験である、楽しんでもらえる企画立案力や、企画の準備から本番までの運営力が、ピア・コミュニティの活動の中でいかせるかもしれないという思いがありました。そして、研修生向けピア・サポート研修ではプランニングを担当させていただき、直接伝えられる機会が得られたので、精一杯私の経験を伝えさせていただきました。

TA として最初の活動は、正課授業の支援でした。あらかじめファシリテーションがメインであると聞いていたので、気軽に相談できるような TA を目指し、積極的に学生と関わることで、学生とも早いうちにとけ込めたので、とてもスムーズに支援に取り組むことができました。

少し遅れて担当コミュニティが決まり、コミュニティの活動にも関わるようになりました。こちらは、正課授業では TA 全員で支援にあたっていたのに対し、コミュニティごとに TA が別れて担当することになります。これまででは、お手本となる先輩が目の前で支援をしているのを見て学び、自分の支援を形作ることができました。しかし、いきなり一人として支援にあたるように言われたので、とても大変でした。今までの先輩はどのよう

に活動していたのか、どのように関わっていたのか、どのような点に気を付けないといけないのか、その情報が先輩の話の中でしか聞けないので、一つ一つ自分で考え、行動し、支援できるようにすることはとても難しい事のように感じました。コミュニティごとに全く違う活動しています。TAは、担当のコミュニティには詳しいのですが、他コミュニティについてはあまり詳しくはありません。そのため、自分がTAの中でも担当するコミュニティのプロになる必要がありました。今になると、そのための様々な試行錯誤を通して多くのことを学ぶことができたと思うのですが、当時はとにかく必死で振り返る余裕などまったくありませんでした。必死で役に立たないTAでしたが、サポートの学生はとても優しく関わってくれて楽しく過ごせたので、個人的には満足しています。

活動を通して、TAの活動は長く続けて形成したサポートとの関係性がとても大切なではないかなど強く感じるようになりました。私は、M2年の春にTAに誘われたため、卒業まであまり時間が残されていませんでした。その短い時間でどのように関係を作れるかが、私の最大の課題でした。できるだけ、サポートと活動外の時間で会った時やピアエリア待機での交流を大切にするように心がけていました。

また、コミュニティ担当のTAが複数いることの必要性を様々な場面で痛感しました。現在TAは前期課程の院生が担当していることが多いため、2年程で入れ替わってしまいます。サポートからも、慣れた頃に新しい人と変わってしまうと残念という声をよくきました。もしこの先に、学生支援のあり方を考える機会があるなら、TAとおなじ立場で長くいられるようなあり方を考えていく必要があると感じました。

## TAとしてピア・サポートに関わって

学生支援室 TA 小黒明日香

TAとして4年に渡りピア・サポート事業に携わる機会をいただいた。学生が主体となり積極的に活動している本事業のなかで、「TAとして貢献できたものはあるか?」と問われると、反省点ばかりが頭をよぎる。むしろ、私自身が多くのピア・サポートや教職員と関わるなかで、新たなことを学び、“人と関わる”ことを考えるチャンスをいただいたように思う。ここでは、これまでの経験から見えてきた、私の意見や感想を述べたい。その際、「伝え方」(引き継ぎなどの伝授する行為について)というキーワードを中心に触れていく。

### ピア・サポート活動における「伝える」ことの重要性

ピア・サポートの活動をおこなう上で、学生が自分たちの活動してきた成果をどのように残していくか、伝えていくかを考えることは、無くてはならないことである。これは、各ピア・コミュニティの企画の運営方法をどうやって伝授していくかということにも繋がってくる。経験があるサポートタが、新しいサポートタに対して、企画の運営方法などを、丁寧に時間をかけて伝えることができるかによって、企画の成否が変わると言っても過言ではないほど重要なものであると、私は考えている。

例えば、サポートタの多くが苦労している、企画ごとの企画・報告書の作成がある。サポートからの質問でよく出てくるのが、①書類に「何(どんな内容)を書けばいいか分からない」、②「去年の書類の内容をそのまま使った」の2つである。極端な表現にすると、①は参考にできる資料があることを知らず、何をどのように書けばいいのか全く見当がつかない、②は参考にする資料は手元にあるが、細かい表現をどのように書き換えればいいか分からず、そのまま書き写したという状態である。この2つの場合、TAに相談があった際のサポート内容は異なる。①では、参考となる書類、具体的な見本(モデル)を提示して、今回の企画に合う文章内容を考えてもらう。②では、具体的な見本をもとに、今回の企画内容を確認しながら、今回の内容に合った文章を考えていく作業を一緒に行う。

このように、企画・報告書の書類を一つとっても、伝える際のポイントは変わってくる。伝える側が、新しいサポートタが知りたい、分からることは何かというニーズを把握することが重要となってくる。これらを考えるなかで、各コミュニティでの「伝える」方法は主に2つではないかと感じている。それは、(1) 文章・書類で残す、(2) 実際の関わりのなかで見本(モデル)を示すである。この2つは、とても有用な方法であるため、様々なコミュニティの活動で活かされている。一方で、伝える側がそれぞれの方法が持つ有用性を發揮できていない場面、自分たちの成果を残すこと、伝えることに意味を見出せ

ていないこともある。そのため、これらの方で成果を残すこと、伝えることの意味についてあらためて確認しておきたい。

### 「伝える」ことの意味

(1) 文章・書類で残す この方法では、自分たちが実施してきた成果について、内容を整理する役割がある。整理する過程で、実際に運営するときとは別の視点で、反省点も踏まえながら、あらためて自分たちの活動を振り返ることができる。また、一つの成果として文章にして残すことで、自分たちの自信にもつながり、その後、企画を実施していく人だけでなく、TAやその他のコミュニティのサポートにも伝えることができる。

一方で、実際に企画を運営する際の、失敗、試行錯誤した点などの細かな過程を文章で伝えることには限界があるため、留意しておく必要がある。文章・書類で残す際には、企画の概要、準備・当日の行程などの大まかな流れや、手順について丁寧まとめておくことがポイントである。

(2) 実際の関わりのなかで見本（モデル）を示す この方法では、企画の運営経験があるサポートが、新しいサポートと一緒に企画を運営する。そのなかで、経験者がこれまで実施してきた内容を細かく伝えたり、失敗した例も踏まえてアドバイスをするなど、新しいサポートは企画運営の過程を体験することができる。また、新しいサポートに企画運営の経験を積極的にもらうことを目的として、新しいサポートを中心としたグループ編成で企画を実施する場合もある。その際は、新しいサポートが経験者に相談しやすい環境など、安心して企画の運営ができることが必須条件である。しかし、コミュニティの現状として経験者の数が少なく、それが難しい場合もあるだろう。その際は、TAが見本となるような内容をいくつか提案して、みんなで方向性を決めたり、一緒にアイディアを出せるような機会をつくることが必要となってくる。

### 今後に向けて

上記では、「伝える」ことの意味について触れた。現在のコミュニティの現状では、どちらかの方法に偏っているところも多い。例えば、文章での引き継ぎができているのに、経験者が新しいサポートと関わる機会が少ない、または、その反対など様々である。今後も各コミュニティで、サポートが独自性のある企画を実施する際、これまでの企画内容（伝統）を参考にしながら、現状にあったものをつくっていくことは大切ではないだろうか。そのうえで、TAは教職員と連携しながら、コミュニティの活動を見守るとともに、コミュニティの現状に合わせたサポートを考え続けていく必要がある。それに加え、TA、教職員間でも伝えることの意味や本質について問い合わせることも忘れてはならないと思う。

最後に、本事業でかかわらせていただいた方々に深く感謝申し上げるとともに、今後もピア・コミュニティの活動が広がりをみせ、より一層豊かなものになることを願っている。

## TA としてピア・サポートに関わって

学生支援室 TA 木岡歩奈美

### ピア・サポート全般について

春学期の主な TA の活動としては、正課授業である「関西大学ピア・コミュニティ入門」に TA として携わることでした。ほんの少し前までは学部生と同じように授業を受講していた自分が、春からは TA として授業に参加することになりました。「ディスカッションをするのでファシリテーションしてください」と言われましたが、はじめは何をすればいいのかわからず、学生たちとの距離感も掴めませんでした。しかし、LA 経験の長い学部生や先輩 TA と共に活動していくうちに、自分のするべきことがわかってきたように思います。TA として難しかったことは、学部生とは違う、教員・職員とも違うという立場で接することでした。また、ディスカッションする際には、自分の意見がどんどん言える学生、言いたいけど言えない学生、意見がない学生などさまざままで、学生 1 人 1 人の意見を尊重しつつも、まとめるのは思っていた以上に大変でした。しかし、回を重ねるごとに学生同士の距離が縮まっていくことを感じましたし、主体的に取り組む学生が多かったということもあります。活発に意見交換がされていたように思います。

研修生向けの研修ではコミュニケーションを担当しました。リハーサルを何度も見ていただき、ワークなども改良を重ねました。はじめの方と比べると緊張せずに研修ができるようになったと思いますが、コミュニケーションはピア活動をする上ではもちろん社会生活を営む上でもとても大切なものだと思うので、今後は質を高めていくようにしようとおもいます。

### コミュニティ運営について

わたしは KUSP と i.com の TA をさせていただきました。サポートたちは気さくな学生が多く、いつも自然と声をかけてくれたりしました。また、会議では、それぞれが真剣に企画について話し合い、みんなで 1 つのものを作り上げていくということを通して結束が深まっていたように思います。それぞれのコミュニティに個性があり、また 1 人 1 人も個性的なため、意見などをまとめるのは本当に大変だと思いますが、よく議論し、予算面やニーズなどに合わせて素敵な企画をたくさん実施していたように思います。学生が学生をサポートするのは簡単そうに見えて、実は難しいことだと思います。また、どのように広報するのか、誰を対象にするのか、どのようにしたら手にとってもらえるのかなど、今後、社会に出て必要とされる能力を養ういい機会ではないかと感じました。

## TAとしてピア・サポートに関わって

学生支援室 TA 佐藤栄晃

私がTAとしてピア・サポート活動に関わり始めたのは今年度の11月からであり、また、外部から大学院へ進学したため、ピア・コミュニティの存在も知らず、具体的にTAがなにをしているかもはつきりと知らない状態で関わってから、まだ数か月しか経っていないが、この関わりから見えてきたことを報告する。

ピア・コミュニティに主に関わった場面としては、各コミュニティのミーティングとピアエリア待機である。ミーティングには先輩TAと共に参加した。企画の内容やサポートとの関わり方などどのように臨めばいいかわからない場面が多く、その場にいても参加できていない、受け入れてもらえないという不安もあった。企画内容については先輩TAに尋ねることで何とか現状の把握などはできた。しかし、サポートとの関係を作り上げるのは一朝一夕にできるものではないと思い、時間が許す限りミーティングに参加した。時には先輩TAが参加できないこともあり、私が1人で参加することになったときは、正直緊張していたし、それはサポートも同じだったのではないかだろうか。しかし、そういった中で、手探りながら意見を言うことによって、次第に話すことが増え、受け入れてもらえたと感じた。ピアエリア待機では、関わることの少ない担当コミュニティ以外のサポートと関わることやピアエリアでのサポート同士の会話に耳を傾けることで、会議などでは、あまり表面化してこない問題などに気づけ、TAとしての対応の仕方にも関わってくる場面もあった。またこのとき、ネームタグをつけることで、自身がTAであることがわかり、サポートからどういった人物なのか位置づけがされることで、会話の糸口になることから、ネームタグの必要性を感じた。

私は実際に2つのコミュニティに関わって、各コミュニティの雰囲気は同じではなく、それぞれ先輩TAの関わり方も違っていることを知った。時にはTAとして見守ることに徹する場面もあれば、行き詰っているときに絶妙なアドバイスを投げかける場面など、今まで関わってきた先輩方が作り上げた信頼と経験が軸にあることがよくわかる瞬間だった。どのコミュニティでどういった関わり方をしてきたのか、こういったことも今後、後任のTAに伝えていかなくてはいけないことであるのではないかと思う。

私自身、まだどのように関わることがピア・サポート活動を行っていくことに貢献できるかわからないが、先輩TAの関わり方から感じ取り、各コミュニティのサポートとの交流を通してできる限り貢献していきたい。

関西大学ピア・コミュニティ 平成 26 年度報告書

発 行 : 平成 27 年 9 月

発行者 : 関西大学

編集者 : 中塚 義史

住 所 : 〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35

電 話 : 06-6368-1229

U R L : <http://www.kansai-u.ac.jp/gakusei/gp>

印 刷 : 大都印刷株式会社

